

928-y927



1200500759603



始



外2886

928
192

吉波彦作著

古文眞寶後集詳解

東京 大同館藏版



緒言

徳川時代漢文學興隆の以前から、四書五經等に相尋いで、學徒の間に誦讀せられたものは、此の「古文眞寶」である。それは前集と後集とを通讀すれば、支那古代からの著名なる詩文の一斑を知了するを得るのに、頗る便益が多いからであつた。是を以て現今に於ても、その後集が文部省の中等教員檢定試験の國語科・漢文科の必讀書に指定せられ、又高等學校の漢文教科書に充てられ、或は中等學校生徒の漢文研究の必要な良參考書とせられてゐるのである。

然るに、其の註釋を施した良い參考書の乏しいことは、本書解題中の「註釋書」の項に於て述べた如くである。明治四十二年六月に、久保天隨氏の「新釋」が出版せられたが、それは既に絶版となつて了つて、容易に肆店に於て見ることが出來ない。其の後二十年に垂んとするが、未だ何處からも新刊書の出版されたことを聞かない。文檢の受験者や、學生の研究者から、其の參考書の照會を受けるけ

れども、「これは」と推奨し得るものが一つも無いのである。

是を以て、不肖敢て自ら揣らず、再昨年以來、古い参考書類や、近頃の覆刻本等數種を蒐集して、其の長を採り短を捨て、異同を訂し、詳略を考へ、努めて現代式の明確にして委曲を盡せる良参考書たらしめたいといふ念願を以て、本書の編述に著手したのである。固より斯道の専門大家の爲めにするものではないが、文檢の必讀書として、或は一般學生の受験参考用として、極めて適切ならんことを期したのである。

試みに本書編述の要旨を概記すれば左の如くである。先づ「解題」に於ては、本書の傳來及び編次等を敘して、十分にその價值を知らしめ、「註解」に於ては、「篇旨」にて一篇の概念を得るに便ならしめ、「作者」の略傳によつて、其の人格を知り、「本文」には、わざと送假名を省いて研究者の努力發明に資し、別に「訓讀」を設けて、初學者にも容易に讀了するを得しめ、「語釋」は主要なる熟語故事の出典、解釋を施し、「通釋」は、最も明確適切に全文の意味を詳解し、「評釋」に

て、文章の段落又は寓意のある所を指示し、殊に古人の評あるものは、之を列擧して全文の品價を知らしめるやうにした。此れ恐らくは、他に類例のない所のものと謂つてよからうと信ずるのである。

要するに、本書は從來の註釋書に比して、一段の工夫を凝し、最も忠實に古文の眞味を領得せしめんことに努力したのである。幸に讀者諸彦の批正を得ば、著者の最も欣幸とする所である。猶本書に關しての質問は著者の歡迎する所であるから、遠慮なく寄せられんことを冀望しておく。

本書は、昨昭和二年六月二十九日。先妣の三周忌辰に初稿を終へ、まとめて法筵の靈前に捧げ、追慕報本の涙に咽んだ記念であつて、爾來校訂に月日を累ね、今や漸く出版するに至つたのである。

昭和三年戊辰歲一月下浣

愷堂書房にて

著者識す

◎眞宗皇帝の勸學文

家を富ますに、良田を買ふを用ひざれ。書中自ら千鍾の粟あり。
 居を安んずるに、高堂を架するを用ひざれ。書中自ら黄金の屋あり。
 門を出づるに、人の随ふ無きを恨むる莫かれ。書中車馬多くして簇るが如し。
 妻を娶るに、良媒無きを恨むる莫かれ。書中女あり、顔玉かんぼせの如し。
 男兒、平生の志を遂げんと欲せば、六經勤めて憲前に向つて讀め。

古文眞寶(後集)詳解 目次

古文眞寶解題

- (一) 題號……………一
- (二) 編者……………二
- (三) 編次……………二
- (四) 價値……………四
- (五) 異本及翻刻……………六
- (六) 註解本……………七
- (七) 舊序……………九

◎辭類

- 三篇——……………一三

◎(一) 秋風辭

目次

漢武帝……………

(一) 漁父辭 屈平 五

(二) 歸去來辭 陶潛 三

◎賦類 — 六篇 —
(四) 弔屈原賦 賈誼 三〇

(五) 阿房宮賦 杜牧 三六

(六) 秋聲賦 歐陽修 四六

(七) 前赤壁賦 蘇軾 五四

(八) 後赤壁賦 蘇軾 六七

(九) 憎蒼蠅賦 歐陽修 七四

◎說類 — 五篇 —
K100 師說 韓愈 八三

Y111 雜說 韓愈 九一

(112) 名二子說 蘇洵 九五

(113) 稼說 蘇洵 九七

(114) 愛蓮說 周敦頤 一〇三

◎解類 — 二篇 —
(115) 獲麟解 韓愈 一〇六

(116) 進學解 韓愈 一〇九

◎序類 — 六篇 —
(117) 春夜宴桃李園序 李白 一二六

(118) 集昌黎文序 李漢 一二九

(119) 送孟東野序 韓愈 一三四

(120) 送李愿歸盤谷序 韓愈 一四六

(121) 送薛存義序 柳宗元 一五六

(122) 滕王閣序 王勃 一六一

◎記類 — 二篇 —
目次 一七九

(二三)	蘭亭記	王羲之	一八〇
(二四)	獨樂園記	司馬光	一八五
(二五)	醉翁亭記	歐陽修	一八九
(二六)	畫錦堂記	歐陽修	一九六
(二七)	喜雨亭記	蘇軾	二〇五
(二八)	岳陽樓記	范仲淹	二一一
(二九)	嚴先生祠堂記	范仲淹	二二〇
(三〇)	黃州竹樓記	王禹偁	二三五
(三一)	待漏院記	王禹偁	二三一
(三二)	諫院題名記	司馬光	二四〇
(三三)	袁州州學記	李觀	二四四
(三四)	思亭記	陳師道	二五二
◎箴類	——五篇——		二五九

(三五)	大寶箴	張蘊古	二五九
(三六)	視箴	程頤	二七一
(三七)	聽箴	程頤	二七三
(三八)	言箴	程頤	二七四
(三九)	動箴	程頤	二七六
◎銘類	——五篇——		二七七
(四〇)	陋室銘	劉禹錫	二七八
(四一)	克己銘	呂大臨	二八〇
(四二)	西銘	張載	二八三
(四三)	東銘	張載	二九〇
(四四)	古硯銘	唐庚	二九二
◎文類	——二篇——		二九五
(四五)	北山移文	孔稚圭	二九五

(四六) 弔古戰場文.....李華.....三一〇

◎頌類 — 三篇 —三二三

(四七) 聖主得賢臣頌.....王褒.....三二四

(四八) 大唐中興頌.....元結.....三三七

(四九) 酒德頌.....劉伶.....三四二

◎傳類 — 三篇 —三四六

(五〇) 五柳先生傳.....陶潛.....三四七

(五一) 種樹郭橐駝傳.....柳宗元.....三五〇

(五二) 讀孟嘗君傳.....王安石.....三五七

◎碑類 — 一篇 —三五九

(五三) 潮州韓文公廟碑.....蘇軾.....三六〇

◎辯類 — 二篇 —三七八

(五四) 桐葉封弟辯.....柳宗元.....三七八

(五五) 諱辯.....韓愈.....三八四

◎表類 — 三篇 —三九三

(五六) 前出師表.....諸葛亮.....三九四

(五七) 後出師表.....諸葛亮.....四〇六

(五八) 陳情表.....李密.....四一八

◎原類 — 二篇 —四二七

(五九) 原人.....韓愈.....四二七

(六〇) 原道.....韓愈.....四三一

◎論類 — 二篇 —四五四

(六一) 樂志論.....仲長統.....四五五

(六二) 過秦論.....賈誼.....四五九

◎書類 — 五篇 —

(六三) 上張僕射書	韓愈	四七三
(六四) 爲人求薦書	韓愈	四七四
(六五) 答陳商書	韓愈	四八四
(六六) 與韓荊州書	李白	四八七
(六七) 答張籍書	韓愈	四九二
	韓愈	五〇〇

— (以上) —

古文眞寶(後集)詳解

吉波彦 著作

古文眞寶後集解題

第一、題號

「古文」といふのは二様の意義がある。一は古代の蝌斗文字を稱して「古文」と言ひ、一は古代の文章といふ廣い意味で、詩も文も併せて言ふのである。本書の「師說」の中にも「李氏子蟠年十七。好古文。六藝經傳皆通習之。」などあるのは、即ち後者の例である。故に本書の「古文」といふのも後者に屬すること勿論である。

「眞實」は眞實の實といふ義で、學者の最も愛重すべきものであるを示したのである。韓愈の「答崔立之書」の題註に、樊汝霖の曰く、「韓公所學、堯舜三代孔孟之道、其文則六經古文也。公以古文爲實」とある。又蔡氏の書經集傳の序に「不見眞古文乎、歷代實之」とある。又漢書の五行志に

「聖人行_ニ其道_ニ、寶_ニ其眞_ニ」などとある。此れ等の語に本づいて「古文眞寶」と名づけたのであらう。

第二、編者

本書の編者は、宋の徐州永陽の黄堅といふ者で、元の福州三山の林以正といふ者が校刪を加へたものとするのが、從來の通説である。それは今日弘く通讀されてゐる坊本に、元の順宗の至正十六年、(或は二十六年といふ説もある)に、鄭本字は士文といふ者の書いた序(後に載す)と、明の孝宗の弘治十五年に、青藜齋といふ者の書いた跋文に、「永陽黄堅氏所集古文眞寶二十卷、載_ニ七國而下諸名家之作_一。凡二十有七體、三百十二篇、蓋精選也」とあるに據つて言ふのである。

然るに、その黄堅といふ者の事蹟が更に詳かでないが、前集中に宋の謝枋得の「菖蒲歌」を採録してあるを見れば、枋得以後の人たるや明かである。林以正は「詩學大成」といふもの三十卷を編した人であるが、是もその以外の事蹟が分からない。鄭本も建州盱江の人といふだけで、その他は何も知れては居ない。要するに何れも史傳に名を列せられるほどの人ではなく、唯々地方郷塾の學究先生に外ならなかつたのであらう。

第三、編次

今日流布してゐる本書は、前集と後集との二部各十卷に編せられてゐる。

前集は、漢代より宋代に至るまでの著名なる詩を集め、之を左の十一體に分類編次してある。

- 1、勸 學 文——八 篇
 - 2、五言古風短篇——六十六首
 - 3 五言古風長篇——二十三首
 - 4 七言古風短篇——四十六首
 - 5、七言古風長篇——七 首
 - 6、長 短 句——二十一首
 - 7、歌 類——十七首
 - 8、行 類——十七首
 - 9、吟 類——三 首
 - 10、引 類——三 首
 - 11、曲 類——六 首
- 計 二百十七首

その作家は、古詩及び無名氏のものを除いて六十人である。

後集は、戦國末に於ける楚の屈原より宋代に至るまでの文章を集め、之を左の十七體に分類してある

1、辭	類—三	篇	2、賦	類—五	篇
3、說	類—五	篇	4、解	類—二	篇
5、序	類—七	篇	6、記	類—十一	篇
7、箴	類—五	篇	8、銘	類—五	篇
9、文	類—三	篇	10、頌	類—三	篇
11、傳	類—二	篇	12、碑	類—一	篇
13、辨	類—二	篇	14、表	類—三	篇
15、原	類—二	篇	16、論	類—二	篇
17、書	類—五	篇	計		六十七篇

その作家は凡て三十五人である。

第四、價 値

以上の編次分類については、古來多少の非議がないでもないが、前集の如きも、大體に於て著名の作を採録したるは多とすべく、又其の主として古體の詩を多く取りて近體の詩に及ばなかつたのが、

本書の特色として見るべく、唐詩選、三體詩に勝つた點が在るのである。後集に於ても、分類及び文章の取捨が、古文の模範とし眞寶とするには、尙嫌焉たらざるものがある。例へば、分類に於ては、賈誼の弔屈原文を、賦として賦類に收め、王羲之の蘭亭序をば、記として記類に入れ、更に甚しきは、王安石の讀孟嘗君傳を、傳類に加へ置くが如きは、最も杜撰なるものである。先儒も既にその謬妄を指摘して分類を改定したのもある。文章の選擇に於ても、多少の議すべきものがないではないのは、畢竟編者が自己の見識を以て、一一原集から選抜したものでなくて、各種の選本から適宜取捨採録した爲めであらう。例へば、文章軌範と二十二篇も同一のものがあるのを見ても、その一端がわかる。

然しながら本書の價値は、文章軌範の唐宋兩代の文章に限れるに反して、遠く戦國時代より唐宋に至るまでの諸作家の名篇をば、浩瀚ならざる巻帙に收め、之を各體に分類して體制の變化を知るに頗る便利なるを得しめた所に在るのである。是れが本書の世俗に歡迎せられたる所以で、支那では元明の間に盛行し、朝鮮にても増補刊行せられ、我が邦に傳來してより、室町時代には五山僧徒の間に愛讀せられ、徳川初期に於ては、數種の註釋書が版行せられるほど流行したのである。物徂徠一派の者が極めてその俗本なるを唱導排毀したので、幾分か衰へたが猶論語孟子に次いで句讀を習ふ者の必讀書で、唐詩選、文章軌範と相俟ちて誦讀せられたものである。又明治に入つてからも猶刊行せられたものもあり、殊に文部省の中等教員檢定試験に於ける國語科漢文科受験者の必讀書に指定せられてゐ

るのを見れば、本書の價値の大體を知ることが出来る。

第五、異本及び翻刻

本書は詩文を初めて學ぶ者には極めて輕便なるを以つて、盛んに世に行はれたことは前項の如くであるから、その版本の種類も亦幾種もある。その

元版本、といふのは黃堅の原選を林以正が刪定して、元の順宗の至正年間に出版せられ、明の弘治年間に重刊せられたものである。

萬曆重刻本、といふのは、明の神宗が增益したと稱するもので、卷首には神宗御製の序があり、從來のものに三十五篇を増加して、萬曆十一年に重刻したといふのである。之は恐らく狡猾なる書賈が射利の爲めに假托したものであらう。

葉向高註釋本、と稱するものは、古文大全、又は新增註釋古文大全といひ、萬曆三十六年戊申、翰林吳曙谷の序があつて、後集には十五篇を加へて刊行してあるといふ。更に又評林註釋古文大全と題し、或は新增註釋古文評林と稱するものもある。後集の卷數を十一卷として各類にも數篇の増加がある。是は上梓の年代不明なるも、明代に成れることは疑ひのないものである。

朝鮮本、といふのは、古文眞寶大全、又は詳說古文眞寶大全と稱し、卷數は十卷なるも、後集の篇

數は一百二十七篇の多數である。我が内閣の所藏に三種あるが何れもその篇數は同じであるといふ。

我が邦に入りて普通に弘く行はれたるは、最初の**元版本**が原據であつて、「魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集後集」と題するものである。足利氏の初世に傳來し、その中世には盛んに五山禪僧の間に行はれ、詩文を習ふ者の必讀書となつてゐた。その翻刻は慶長十四年の活字本が最古のものとせられてゐる。その後寛永元年に木版本が出來、元祿、延寶にも數種の刊行本が出てゐる。明治以後になつても猶刊本が少くない。

第六、註解本

前項の如く數種の異本もあるが、その流行に應じて註解本もあらはれてゐる。その最初の原註者は、林以正であつたことは既に述べた如くである。その後の註釋書として著名なるものは、**支那に於ては、**

一、古文眞寶前集十二卷後集十卷。(舊本題宗伯貞音釋劉刻校正)

一、魁本大字諸儒箋解古文前集十卷後集十卷(不記撰者名者)

一、古文大全十卷 (明葉向註釋)

一、新臺閣校正註釋補遺古文大全八卷 (清張瑞圖校釋)

等があるといふ。我が邦に於ては、

- 一、古文前集抄二十卷 (笑雲和尚)
- 一、古文眞寶後集諺解大成十卷 (林道春原解 鶴岡石齋增述)
- 一、古文眞寶前集諺解大成十卷 (神原篁洲)
- 一、龍頭評註古文前集十卷 (宇都宮由的)
- 一、古文眞寶合解評林十卷 (撰者不明或曰毛利貞齋)
- 一、古文後集俚諺鈔二十卷 (毛利貞齋)

等が明治以前の主なるものである。

校註 古文眞寶前集後集 (戸邊房五郎)

龍頭註釋 古文眞寶俚諺抄 四卷 (東條保著 平山政讀補)

古文眞寶新釋 前集一册 後集一册 (久保天隨)

等が明治以後のものであるが、前二種は全く初學の爲めのもので、今日其の書物の存在を見ることも出来ない。久保天隨氏のもものは、前集と後集と相通じて、叮嚀な註釋を施されたもので、恐らくは我が國に於ける最も整つた註解書であらう。唯憾らくは、兩集ともに原文に返り點は施してあるが、送り假名を施して無いが爲めに、何人もその訓讀に困るのである。是は實に此の書の一大缺點である。其の後各種漢文註釋の覆刻が行はれて、富山房の漢文大系本には普通の板本をば様式を更めて收め、

頭註を施し加へてある。早大出版部の漢籍國字解本には、前集には、神原篁洲の「諺解大成」を、後集には、林道春、鶴岡石齋の「諺解大成」を収録してある。かくて世の讀書家の書架に普及しては居るが、然し何れも古風な註解で、現代式のものではない。従つて今の青年讀書子に満足と與へ難いものばかりである。

第七、古文眞寶敘

普通流行の板本には左の如き叙文がある。茲に訓讀と語釋とを施して參考に供する。

自六藝不講。而世之誨小學者。必先以語孟。而次以古文。亦餘力學文之意也。眞寶之編。首有勸學之作。終有出師陳情之表。豈不欲勉之以勤。而誘之以忠孝乎。此編者之微意也。惜乎舊所架行。率多刪畧。註釋不明。讀者憾焉。

訓讀 六藝の講ぜられざりしより、而も世の小學に誨る者、必ず先づ語孟を以てして、次ぐに古文を以てす。亦餘力文を學ぶの意なり。眞寶の編、首に勸學の作あり、終に出師陳情の表あり。豈に之を勉むるに勤を以てし、之を誘むるに忠孝を以てするを欲せざらんや。此れ編者の微意なり。惜いかな舊架行する所、率ね刪略多く、註釋明かならず。讀者これを憾む。

語釋 ●六藝。禮・樂・射・御・書・數をいふ。古の教科目。●小學。年少の學童。●餘力學文。論語學由篇に在り、餘力は暇暇日のごとくである。文は詩書六藝の文をいふ。德行は本、學藝は末であるから、德行を先にして學藝を後にするの意。●誘之。誘は勸也「すすむる」。●架行。架は刊に同じく、板に彫つて出版する。●刪略。刪除簡略にする。

有三山林以正先生者。授徒之暇。閱市而求書。未善者正之。繁者芟之。畧者詳之。必歸於至當而後已。若此書者。撮大意於篇題之下。精明訓解於句讀之間。非惟使幼學之士得有所資。而挾兔園冊於黨庠術序之間者。亦免籍口之譏矣。

訓讀 三山の林以正先生といふ者あり。徒に授くるの暇に、市を閲して書を求む。未だ善ならざる者は之を正し、繁なる者は之を芟り、略せる者は之を詳にし、必ず至當に歸して後已む。此の書の若きは、大意を篇題の下に撮り、訓解を句讀の間に精明にす。惟に幼學の士をして、資する所あるを得しむるのみに非ず、兔園の冊を黨庠術序の間に挾める者も、亦口を籍むの譏を免れん。

語釋 ●三山。郡名。明の福州府。●林以正。名は楨。詩に鋭き者。「詩學大成」の叙に見ゆ。本傳未だ詳かならず。●閱市。市中の書店を廻り觀る。●求書。此の古文眞寶といふ書物を求め得た。●芟之。芟は草を刈るをいふ。繁雜なものを刈り取るをいふ。●至當。至極適當のものにする。●兔園冊。郷俗の誦讀する所の書冊。兔園は漢の文帝の子、梁の孝王の園(修竹園ともいふ)である。王の薨後田畑となし、民をして耕種せしめ、吏を置きその租税を記録させて祭祀の用に供した。其の簿冊は皆俚俗の語を以て記録したから、郷俗の書を「兔園の冊」といふのである。●黨庠術序。禮記學記篇に「古の教ふる者は家に塾あり黨に庠あり。術に序あり、國に學あり」とある。五百家を黨といふ。その學校が「庠」である。術は州に作るべきで、一萬二千五百家あるをいふ。州の學校が「序」といふのである。●籍口。口を閉ぢて物を言はざること。此の書を讀めば物の言へない譏を免れることが出来るとの意。

予寓書林六年。得一善士而與之友者。必先生之高第也。來後去先。雖不及

會。然觀其徒。則可以知其師矣。一日有章余君。語予曰。古文眞寶。先師用心之勤矣。猶未有以題其首。非缺歟。盍請序之。予不獲辭。遂述其槩而爲之書。至正丙午孟夏。吁江後學。鄭本土文敘。

訓讀 予書林に寓すること六年。一善士を得て之と友たる者は、必ず先生の高第なり。來ること後れ去ること先ち、會ふに及ばずと雖も、然かも其の徒を觀れば則ち以て其の師を知る可し。一日有章の余君、予に語つて曰く、古文眞寶は、先師心を用ふること勤めたり。猶未だ以て其首に題するあらず。缺けたるに非ずや。盍ぞ請うて之に序せざると。予辭するを獲ず、遂に其の槩を述べて之が爲めに書す。至正丙午の孟夏、吁江の後學、鄭本土文敘す。

語釋 ●書林。書店のこと。林は叢木也といふから、書の多く集ること樹木の叢るに比したのである。●高第。才優れ品第の高きをいふ。●來後去先。我が生れ來ること先生に後れ、先生の死し去ること我に先つの意。●有章。地名。建章府に在り。●余君。余曩字は元璋。書を以て世に鳴り、絲竹に工に、詩文に深かつたといふ。●先師。林以正を斥す。●其槩。其の概要。●至正丙午。至正は明の順宗の年號で、丙午はその二十六年。皇紀二〇二六年に當る。●鄭本。字は士文。其の傳は詳かでない。

●文章經國之大業、不朽之盛事。年壽有_レ時而盡、榮樂止_ニ乎其身。二者必至之常期。未_レ若_ニ文章之無窮_一。(魏文帝)

●文章一小技。於_レ道未_レ爲_レ尊。此論_ニ後世之文_一也。天以_ニ雲漢星斗_一爲_レ文、地以_ニ山川草木_一爲_レ文。要皆一元之氣所_ニ發露_一、古人之文似_レ之。巧女之刺繡、雖_ニ精妙絢爛_一、纔可_ニ人目_一、初無_レ補_ニ於實用_一。後世之文似_レ之。

(鶴林玉露)

古文眞寶後集詳解

●辭類

辭も賦も支那南方の律語の一種で、その代表は則ち楚辭である。楚辭は離騷以下屈原の諸作を始め其の徒其の流の作を集めたもので、戦國時代から其の端を發し、漢代に及んで盛行した。普通には、「楚辭は詩の變なり」といひ、又「風雅頌すでに亡びて一變して離騷となる」といつてゐるが、必ずしも北方三百篇の後を承けたものではない。楚辭は始め賦と騷とに區別し、騷は主として主觀的の感想を述べ、賦は多く客觀的描寫を主とした。辭は則ち騷の變と見るべきものである。原註に「古文於式に云ふ。辭賦の文は婉麗を貴ぶ。…辭は以て情を寄すること深くして、語は緩なり」とある。「秋風辭」がその權輿と稱せられてゐる。

一、秋風辭

漢武帝

【補註】

左の序文が此の辭の作られた所以を示してゐる。即ち史記の武帝紀に「元鼎四年の十月、夏陽より東して汾陰に幸し、

一秋風辭

十一月甲子、后土を汾陰淮上に建て、禮し畢つて祭陽に行幸し、還りて洛陽に至る」とあるのが、其の時である。其の當時の十一月といふは、秦の曆に據つたもので、夏曆では秋八月に相當するのである。それは漢の高祖が十月を以て歲首としたからである。後ち武帝の太初元年に夏曆の正月に復したことが史記に出てゐる。

秋風に托して感懷を述べたのであるから、「秋風辭」といふので、萬乘帝王の吟懐詩經、千歳の下猶願る愛誦するに足る。

作者 武帝——正しくは世宗孝武皇帝、名は徹、前漢四世の主皇帝の子である。母は王美人といふ。帝は雄才大略があつて事功を好み、文帝景帝の後を承けて、府庫が充實してゐた。是に於て北は匈奴を征し、西は西域に通じ、東は朝鮮を撃ち、南は越を伐つた。かくて各地に郡を置き、領土を大に擴張し、衛青、霍去病、李廣等の功臣に榮爵を授けた。帝又文學を好み、天下の俊材を招選し、朝廷人あること漢代第一であつた。然れども晩年土木を營み、神仙を好み、府庫が空虚となり、人心亦動搖するに至つた。在位五十四年。壽七十を以て崩ぜられた。

上行幸河東祠后土。顧視帝京欣然。中流與群臣飲燕。上歡甚。乃自作秋風辭曰。

秋風起兮白雲飛。艸木黃落兮鴈南歸。蘭有秀兮菊有芳。懷佳人兮不能忘。泛樓船兮濟汾河。橫中流兮揚素波。簫鼓鳴兮發棹歌。歡樂極而哀情多。少壯幾時兮奈老何。

訓讀 上、河東に行幸して后土を祠る。帝京を顧視して欣然たり。中流にして群臣と飲燕す。上、歡ぶこと甚し。乃ち自ら秋風の辭を作りて曰く。

秋風起りて白雲飛ぶ。艸木黃落して鴈南歸す。蘭に秀でたるちり菊に芳しきあり。佳人を懷ひて忘るる能はず。樓船を泛べて汾

河を濟る。中流に横ばつて素波を揚ぐ。簫鼓鳴つて棹歌を發す。歡樂極つて哀情多し。少壯幾く時ぞ老を奈何せん。

語釋 ●上、「しやう」と訓み、今上皇帝又は主上といふが如し。史記より始まる。●河東。郡名。汾陰は河東郡に屬してゐる。●后土。土の神をいふ。土正といふも同じい。●帝京。長安(今の陝西省の治府)の都。●中流。汾河の中流。●飲燕。燕は醜に通ずる。酒を飲みて宴游する。●兮。音「けい」語句と語句との間又は語句の下に用ひて、音調を助くる字。譯讀には讀まない。●艸木黃落。禮記月令篇に「季秋の月、艸木黃落し鴻雁南歸す」とあるに據つたもの。●蘭有秀。秋蘭の花盛んなるをいふ。●佳人。美人のことにて忠良の臣下をさして言ふ。赤壁の賦にも「美人を天の一方に望む」とある。是も在朝の賢臣を斥すのである。●樓船。大船を作つて其の上に樓を建てたるもの。●汾河。山西省太原の地方に在る河。●素波。素は白。白き波。●簫鼓。簫は吹く物、鼓は太鼓、共に樂器。●棹歌。棹唱、棹歌は皆舟歌をいふ。●少壯云々。古詩長歌行に「少壯努力せずんば、老大にして徒に悲傷せん」とあるに基づく。

【通釋】 漢の孝武皇帝が、元鼎四年の秋、河東郡の汾陰に行幸して、土地の神を祀りなされた。其の時遙かに長安の帝都を顧み視て、にこにことして喜ばれた。汾河の中流に船を浮べて、從行の群臣と酒宴を催され、皇帝の歡びは甚しかった。そこで自ら此の秋風辭を作られたのである。秋風がそよそよと吹き起つて、白雲が空高く飛んでゐる。草木の葉は皆黄ばみ落ちて、鴻雁も遙か北方より南へ歸り來る季節である。野には秋蘭の美しく花咲けるもあり、菊花の芳香を放つもある。斯る光景の中に於ても、群下忠良の事どもを懷ひて忘ることが出來ない。今やかうして樓船を浮べて汾河を渡り、中流に船が横はれば、清き白き漣波が起つて、清爽の氣が四邊に漂うてゐる。簫鼓管絃の聲が鳴り渡ると、それに和して船人どもの棹歌もあこる。實に愉快なことである。

然し考へて見れば、人間歡樂の事が極つて哀愁の情が多いものである。少壯盛年の時期が幾何あらうか、問もなく老い行かねばなるまい。さても此の果敢ない人生を如何にしようか。

【評釋】 秋風、草木の二句は、秋の景氣を叙し、蘭菊の句と佳人の句とは、秋の美しき景物に由つて感興を發したのである。樓船、中流の二句は、河上眼前の實事、簫鼓の句は船中宴饌の清興である。最後の二句は則ち以上の凡てを包括して、無限の感懷を吐いたもの、何人の琴線にも觸れて金玉の音を發するものである。

此の詩は、昭明太子の「文選」に選せられてゐるので、古來人口に膾炙し、其の解釋も前述の如くである。然るに清の張玉嘉の編した「古詩賞析」(漢文大系十八卷)にも此の詩を擧げて解釋をしてある。それに據ると、此の詩中の「懷佳人兮不能忘」の佳人は仙人のことである。斷じて群下忠良の臣下を斥すものではない。それは武帝は不老長生の仙法を得んことを平素求めて居たので、秋風搖落に感じてその意を發露したものである云々といふのである。穿鑿に過ぎるやうでもあるが、亦一理はないでもないと思ふ。記して讀者の參核に供して置く。

二、漁父辭

屈平

【補註】

作者屈原の略傳は左にあるが如く、楚の同姓であつて、懷王に事へてゐた。同列の者に嫉まれて、遂に懷王の疎んずる所とな

なり、頃襄王の逐ふ所と爲つた。而かも竊忠君愛國の赤誠に燃えてゐた。此の篇即ち漁父との問答に擬して、自己の皓潔廉直なるを示し、世俗の者の如き汚濁に沈淪し、塵垢を蒙ることが出来ない憤懣の情を披瀝したものである。

問答體の文章の祖として、後世之に模する者が多く出た。又其の獨創の才を窺ふに足るのである。

【作者】 屈平、一字は原、楚の同姓である。懷王に仕へて三閭大夫と爲り、王族の昭・屈・景の三姓を掌り、入りては則ち王と政事を圖議し、出でては則ち諸侯に應對し、謀行はれ職修ると稱せられた。王は甚だ之に任じたが、同列の大夫は其の能を妬んで之を讒毀した。王は乃ち平を疎するに至つた。平、忠貞にして讒せられ、憂心煩亂、懇ふる所を知らず、乃ち離騷を作つて王の反省を冀望した。この時懷王張儀に欺かれて秦に入り、遂に秦に客死するに至つた。その子襄王また讒を信じ、平を江南に遷した。平復た九章を作つて自ら明かにしたが、終に省みられなかつた。平は清白を以て久しく濁世に處るに忍びず、遂に汨羅に投じて死んだのである。平は資性博覽強記、治亂に明かに辭令に媚ひ、忠貞の至誠に篤かつたが、不幸にして用ひられず、詩物の情を詩文に托し、離騷以下凡そ二十五篇を詠じて、南方辭賦の祖となつたのである。

屈原既放。游於江潭。行吟澤畔。顏色憔悴。形容枯槁。漁父見而問之曰。子非三閭大夫與。何故至於斯。屈原曰。舉世皆濁。我獨清。衆人皆醉。我獨醒。是以見放。漁父曰。聖人不凝滯於物。而能與世推移。世人皆濁。何不淪其泥。而揚其波。衆人皆醉。何不餽其糟。而歠其醢。何故深思高舉。自令放爲。屈原曰。吾聞之。新沐者必彈冠。新浴者必振衣。安能以身之察察。受物之汶汶者乎。寧赴湘流。葬於江魚之腹中。安能以皓皓之白。而蒙世俗之塵埃乎。

訓讀 屈原既に放たれて、江潭に遊び、行と澤畔に吟ず。顔色憔悴して形容枯槁す。漁父見て之を問うて曰く、「子は三閭大夫に非ずや。何が故に斯に至れる。屈原が曰く、「世を擧つて皆濁り、我れ獨り清む。衆人皆醉ひ、我れ獨り醒む。是を以て放たる。」と。漁父の曰く、「聖人は物に凝滞せずして、能く世と推し移る。世人皆濁らば、何ぞ其の泥を混して其の波を揚げざる。衆人皆醉へば、何ぞ其の糟を餽ひて其の醜を散らざる。何の故に深く思ひ高く擧り、自ら放たれしむることを爲す」と。屈原曰く、「吾れ之を聞く、新に沐する者は必ず冠を弾く。新に浴する者は必ず衣を振ふ。安んぞ能く身の察察たるを以て、物の汶汶たるを受くる者ならんや。寧ろ湘流に赴き、江魚の腹中に葬らるるとも、安んぞ能く皓皓の白を以て、世俗の塵埃を蒙らんや」と。

語釋 ●放。追放又は放逐などいふ意。●江潭。江水の邊。或は江南の屈潭といふ地方。●澤畔。今の湖南地方を澤國といふ。池澤多きが爲めである。●行吟。歩行しながら吟咏する。吟は長詠する。歎息をもらす。●憔悴。やつれて元氣のないこと。●枯槁。瘦せ果てた様。●三閭大夫。官名である。楚の王族に、昭氏・屈氏・景氏あり。之を三閭といふ。其の司を三閭大夫といふ。●凝滞。凝固滯滞にて、執着といふが如し。或は其の身を困辱することともいふ。●混。濁すと訓む。●揚其波。泥波を揚げるにて共に浮沈する。●餽。食ふ。●糟。酒のかす。●醜。音「せつ」。すする。のむ。●鵲。酒の糟の汁。●沐。髪を濯ふ。●浴。身を洗ふ。●察々。潔白。●汶々。塵垢の汚れ。又は垢辱。●皓々。潔白なること。

通釋 屈原は懷王の忌む所となり、頃襄王に放逐せられて、江潭を遊歴し、澤畔を行吟してゐた。其の顔色はやつれて元氣もなく、形も姿も瘦せ衰へて居た。一人の漁父が之を見て問うて曰ふには、「あなたは三閭大夫の屈原殿ではござらぬか、何うして斯る姿となつて、こんな處へ來られたのか」と尋ねた。屈原之に答へて、「世の中は皆貪慾に迷ひ淫逸に耽つて、混濁を極めてゐるが、我は獨り清廉で濁つたことをしない。衆人は皆酒に酔つたやうに本心を失つてゐるが、我は獨り醒めてゐる。是れがために讒に逢ひ追放せられて、此處へ流浪して來たのである」と曰つた。

漁父之を聞いて曰ふには、「聖人といふ者は、何物にも深く執着せず、能く世の中の風潮に従ひて推し移るものである。世人が皆濁つてゐるならば、あなたも、なぜ其の泥を濁し、濁れる波を揚げて浮沈を共にしないのか、衆人が皆酔つてゐるならば、あなたも、なぜ其の糟でも食ひ、汁でも啜つて、俱に酔はないのであるか。何が故に獨り深く國家の憂にのみ思ひ沈み、高く世俗の外にのみ抜き擧つて、自ら放逐されるのであるか。さても愚かなことである」と。

屈原は之に答へて、「吾之を古語に聞いてゐる。『新に髪を濯つた者は、必ず冠を弾いて其の塵を拂ふものである。新に入浴した者は、必ず着物を振つて其の埃を落とすものである』と。して見ればどうして清淨潔白の身を以て、汚穢なる物の垢辱を受けることが出來ようか。寧ろ彼の清き湘水の流に飛び込んで、江魚の腹中に葬られても、斯の皓々たる潔白の身を以て、世俗の塵埃を蒙ることが出來ようか。とてもそんな事は出來ないことである」と曰つた。

評釋 屈原、聰敏英明の資を以て懷王に事へ、忠悃至誠を竭しながら、却つて同僚の讒に逢ひ、懷王の忌む所となつて放逐の厄に遭つた。而かも忠誠の赤心は君を忘れ國を棄つるに忍びず、憤悶の情を懷抱して、澤畔を行吟したのである。漁父を假り問答に托して、胸中を告白したものは、實に悲絶痛絶といふべきである。千載の下、猶其の人を想見して、追慕已み難きもののあるのは、誠悃が中に充ちてゐるからである。

漁父莞爾而笑。鼓枻而去。乃歌曰。滄浪之水清兮。可以濯吾纓。滄浪之水濁兮。可以濯吾足。遂去不復與言。

訓讀 漁文莞爾として笑ひ、枻を鼓して去る。乃ち歌つて曰く、滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふ可し。滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふ可し」と。遂に去つて復た與に言はず。

語釋 ●莞爾。にこくと笑ふ。●鼓枻。枻は音「えい」、楫で「かい」又は「かぢ」で舟を行るの具。楫で枻をたたく。●滄浪。漢水の下流をいふ。此の歌は孟子離婁篇にも出てゐる。●纓。冠の紐。

【通釋】 漁夫が莞爾として笑ひ、枻を鼓して去つた。さうして歌つて曰ふには、「滄浪の水が清く澄んで居れば、吾が冠の紐を濯つてよからう。滄浪の水が汚れて濁つて居れば吾が泥に汚れた足でも洗ふがよろしい」と。遂に去つて復た與に語らなかつた。

【評釋】 滄浪の水の歌は、孟子にもあるが、孟子の意は冠を洗はるるも水の心、泥足を洗はるるも水の心である。畢竟、善も悪も己の心からであると、水を己に喩へたのである。此れは、世間が濁らば足を洗ひ、世間が清めば冠を洗ふがよろしい。何を苦んで、世間が濁つてゐるのに、冠を洗はうとするのか、愚かなことだと、漁父が屈原を笑ふの意である。

洪容齋の評に曰く、屈原が詞賦、漁父日者の問答を假爲してより後、後の作者は悉く相規倣するのみ。司馬相如の上林の賦は子虛・烏有先生・無是公を以てし、揚子雲の長楊賦、孟堅の兩都賦、張平子の二

京賦、左太沖の三都賦、等の如き、皆名を改め字を換へ、蹈襲一律、復た超然たる新意の稍々法度規矩に出づる無しと。

三、歸去來辭

陶 潛

原註 原註に據ると、「朱文公云ふ。歸去來の詞は乃ち晋の陶潛淵明の作る所なり。潛彭澤の令と爲る。時に郡守督郵を遣はして至る。吏白す。當に束帶して之を見るべし」と。潛歎じて曰く、「吾れ安んぞ能く五斗米の爲めに腰を折りて郷里の小兒に向はんや」と、即日印綬を解きて歸り去る。此の間僅に八十餘日。遂に此の詞を作りて以て其の志を見はす。後劉裕特に晋祚を移さんとするを以て、二姓に事ふるを恥ぢ、遂に復び仕へず。宋の文帝の時、特に徵されしも至らず。卒して靖節先生と諡す」とある。是が普通に此の辭の作られた理由となつてゐる。しかし淵明集には此の辭の序文が載つてゐる。それに據れば、自分の妹が武昌に於て死んだから、それを弔する爲めに歸りたくなつたのであるといふのである。それもあつたであらうが俗吏として事務を執掌するのがいやになつて來たのが實際で、早く郷里に歸つて田園生活を樂みたいといふのが本意に相違ない。妹の死に托したのは、自ら奇矯世に違ふ者と世間から見られるのを好まなかつたのであらう。

歸去來の來の字は助字で、「歸り去らう」といふことである。古來、歸去は彭澤について曰ひ、歸來は南村について曰ふので、合せて「歸去來」と曰つたのだなどの説もあるが取るに足らない。

作者 陶潛——字は元亮、淵明は晋代の名で、潛は宋代になつてからの名といふ。潯陽柴桑の人である。曾祖陶侃は晋の大司馬として有名であつた。潛少くして高趣があり、博學不群、善く文を屬し、眞に任かせて自得してゐた。五柳先生傳(本書傳類に在り)がその性格を明かにしてゐる。親老い家貧なるを以て、起つて州の祭酒となつたが吏職に堪へず、少日にして歸つた。後彭澤の令に徵されたが、衣冠して郡の督郵を見るを恥ぢ、即日印綬を解いて此の辭を賦して歸つたのである。その後著作郎に

微されたが就かず、宋の高祖の王業漸く隆なるに及んで愈々出仕するを好まず、元嘉四年、年六十四を以て卒ふ。世に靖節先生と號す。その集八卷がある。晋は實に田園詩人の鼻祖ともいふべく、高風清節長く後人の崇敬を擅にしてゐる。

歸去來兮。田園將蕪。胡不歸。既自以心爲形役。奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫。知來者之可追。實迷途其未遠。覺今是而昨非。舟搖搖以輕颺。風飄飄而吹衣。問征夫以前路。恨晨光之熹微。

訓讀 歸去來兮。田園將に蕪れなんとす。胡ぞ歸らざる。既に自ら心を以て形の役と爲す。奚ぞ惆悵として獨り悲まん。已往の諫められざるを知り、來者の追ふ可きを知る。實に途に迷ふこと其れ未だ遠からず。今是にして昨の非なるを覺ゆ。舟は搖搖として以て輕く颺り、風は飄飄として衣を吹く。征夫に問ふに前路を以てし、晨光の熹微なるを恨む。

語釋 ●歸去來兮。來兮は助語の辭で意味がない。即ち歸り去らうといふ意である。孟子に「盍歸乎來」、莊子に「嘗以語我來」などあるのと同じい。●將蕪。蕪は荒れ果てる。●以心爲形役。心を以て形役を使役すべきものであるのに、肉體を愛はんが爲めに、心を枉げて官途に就くが如きは、心が形の役となつたものである。●惆悵。失望愁悵する。●已往。過去のこと。●來者。未來、將來。●迷途。路途に迷ふといふので、心にもない官吏生活をやつて、うかうかと深みへ入らうとしたこと。●搖搖。舟のゆらゆらと動く貌。●飄飄。風の吹くさま。●征夫。旅人。●晨光。日景、即ち日の光りである。●熹微。熹は照で光明である。其の光明が微暗くなるのである。夕日の光の次第に薄くなるをいふ。或は「晨光之熹微」は朝の光で、夜の將に明けんとする時のことであるといふ説もあるが、今は「夕日の光」として置く。又文章軌範の補註には、「此の句は蓋し暗に晋室の衰微に比す」とある。

【通釋】 さあ官を罷めて故郷の柴桑に歸らう。田園も將に荒廢してゐるであらう。何ぞ早く歸らな

いで居られよう。既に尊い我が心をば形體に使役せられて居たのは、大なる心得違ひであつた。然し今更之を恨みも愁へもしない。過去のことは後悔して見ても取返しつかないことを悟ると共に、未來前途のことは尙改めて善くすることが出来るを知つた。官途に就いて一生の方向を誤らうとしたことは、幸にあまり深くもなかつたから、今日の此の考が是であつて、昨日までの行ひが非であつたことを覺知した。早速行李を整へて舟に乗つて歸路につけば、舟は搖々として軽く進み行き、風はそよそよと旅衣を吹いて涼しい。行き逢ふ旅客に郷里までの遠近を問うて、もはや夕陽のほの暗くならうとするのを残念に思ふ。

【評釋】 此の段は歸去の所以を説いたので、「既自以心爲形役」が抑々の間違であることを悟つたから、矢も楯もたまらないほど歸りたくなつたのである。「知來者之可追」の句が即ち前途の田園生活を豫想せしむるのである。

乃瞻衡宇。載欣載奔。僮僕歡迎。稚子候門。三徑就荒。松菊猶存。攜幼入室。有酒盈樽。引壺觴以自酌。眴庭柯以怡顏。倚南牕以寄傲。審容膝之易安。園日涉以成趣。門雖設而常關。策扶老以流憩。時矯首而遐觀。雲無心以出岫。鳥倦飛而知還。景翳翳以將入。撫孤松而盤桓。

訓讀 乃ち衡字を曉、載ち欣ひ載ち奔る。僮僕數び迎へ、稚子門に候つ。三徑荒に就いて、松菊猶存す。幼を携へて室に入れば、酒有りて樽に盈つ。志願を引き以て自ら酌み、庭柯を彫て以て頰を怡ばしむ。南廳に倚りて以て傲を寄せ、膝を容るるの安んじ易きを審かにす。園は日に涉りて、趣を成し、門は設けたりと雖も常に開せり。策もて老を扶けて以て流憩し、時に首を矯げて遐觀す。雲は心無くして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦んで還るを知る。景は騎驛として以て將に入らんとし、孤松を推して以て盤桓す。

語釋 ●衡字。衡門は木を横へて門と爲す。かぶき門と稱する。●載。則ちと訓む。詩經に用例多し。●三徑。庭園中の三筋の徑路。門へ出る路、背戸へ出る路、井戸へ通ふ路をいふ。或は、松徑、竹徑、菊徑也といふ説もあるが必ずしもさうではない。●彫。旁視。見るともなしに見る。●怡頰。にこにここと笑ふ。●南窓。南向きの日あたりのよい窓。●寄傲。傲は「おごる」。我がまゝな氣分で窓に寄りかかる。●容膝。身を置くこと。足を知りて小室に安んずる。●開。とざす。●策。杖。●流憩。周流休憩。ぶらぶら歩いて休む。●矯。擧げる。●出岫。岫は「山穴」とある。又山の巔をもいふ。●景。太陽。●騎驛。くもりかざす。●盤桓。行いて進まざる貌。たちもとほる。

通釋 やがて家近くなつて我が家の門や屋根が見えるようになる、則ち欣喜雀躍して馳せつける。すると召使の僮僕などが歡んで迎へに出るし、稚き子供は門に立つて待ちかまへてゐる。門を潜つて入れば、庭内の三徑は既に荒れ果てて居るが、それでも松と菊とは猶存在してゐる。幼兒を携へて室内に入れば、早やお酒の用意も出来てゐて樽に盈ちてゐる。盃觴を引き寄せて自らついで之を飲み、庭の樹の枝の茂り合つて居るのを眺めて、にこにことする。南向きの窓に倚り懸つて我が儘な氣分でゆつくりする。かくて我が家の身を置くに氣樂であることを審に知るを得た。是から後

は荒れ果てた庭園も一日一日に少しづつの手入れが出来て自然に趣きのあるやうになるであらう。門は設けてはあるが、訪ふ人も無い隱居の身であるから常に堅く鎖してある。時には杖をついて老いたる身を扶け、以て彼處此處と周流休憩する。時には又首を高く擧げて遙かに遠い所までを見渡すこともある。雲は何等の心意も無くして自然に山岫から出て来る。鳥はもう飛ぶのに倦んだのか埒に還り行くを知つてゐる。太陽は既に西山に傾いて其の光りも次第にくもりて將に入らうとしてゐる。斯る景色を眺めながら獨り庭上の孤松を撫でて其の堅貞の節を愛し、あたりを徘徊する。

評釋 此の段は家に歸りての安樂な愉快な情趣を叙したので田園詩人の面目躍如たるものがある。「松菊猶存」、「有酒盈樽」、「倚南廳以寄傲」を樂み喜ぶは眞に知足安分の高風を見るに足る。「雲無心以出岫」云々の二句は自己の出處進退の自由を比したもので、行雲流水の心境を示したのである。

歸去來兮。請息交以絕游。世與我而相遺。復駕言兮焉求。悅親戚之情話。樂琴書以消憂。農人告余以春及。將有事于西疇。或命巾車。或棹孤舟。既窈窕以尋壑。亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮。泉涓涓而始流。善萬物之得時。感吾生之行休。

訓讀 歸去來兮。請ふ交りを息めて以て遊びを絶たん。世と我と相遺る。復た駕して言に焉を求めん。親戚の情話を悦び、

琴書を樂みて以て憂を消す。農人余に告ぐるに春の及べるを以てす。將に西嚙に事あらんとす。或は巾車を命じ、或は孤舟に棹さす。既に窮窳として以て憂を尋ね、亦崎嶇として丘を經れば、木は欣欣として以て榮に向ひ、泉は涓涓として始めて流る。萬物の時を得たるを善し、吾が生を行々休するを感ず。

●歸去來兮。重ねて言ふは、歌ふ爲めの語。既に歸つた以上は「との意になる。●復駕。復び車に乗る。仕官するをいふ。●言兮。ここに」と訓む。詩經鄒風泉水篇に「駕言出遊。以寫我憂」とあるのを逆用したのである。「言」は「われ」とも訓ずる。●焉求。「何をか求めん」と訓む。「何ぞいづくんぞ」と訓じた本もある。●情話。眞情を以て語る話。●西嚙。嚙は田。滯明の居宅の西方の田地。●有事。耕作の事。●巾車。巾は飾である。裝飾した車。●窳窳。深長の貌で奥深きをいふ。●崎嶇。山坂の險しい路。●欣々。生意の盛んなる貌。春の陽氣で萬物が勢よく生長せんとすること。●涓々。泉水の流るる聲。●行休。休は死をいふ。將に死に近づかんとする。莊子に「其生若浮。其死若休」とある。或は淮南子に「或者生乃橋役也。而死乃休息」ともある。皆此の語の據る所である。

【通釋】 既に歸去來兮と言つて歸つた以上は、どうか一切の交りを息めてかの官游をも絶ちたいものである。世間と我とは全く相忘れて何等の關係もない者になりたい。今更復び仕官して車に駕し、何をか求めようぞ。仕官も嫌ひ名利も欲しくない。親戚の情話を悦んで聞き、琴を弾じ書を讀んで樂み以て人の世の憂を忘れる。近所の農夫は、「追々春が近づいて來ますぞ」と告げ知らせて呉れるから、將に西方の田に出て耕作にも從事せねばならない。或時は車に裝飾して外へ出る。或時は孤舟に棹しても見る。舟に乗つて奥深い谷を尋ねて見たり、車に乗つて峻しい坂路を上つたりすれば、山には草木が皆欣々として以て新しい芽を吹き、川には泉が涓々として流れてゐる。萬物が皆よい

季節を迎へて榮え茂らうとするのに感心すると同時に、吾が生命の行く死に近づくことを悟るのである。

【評釋】 此の段は歸去の後に於ける交游行樂を説いて、自己の感懷を叙したのである。親戚の情話と琴書とが憂患を忘るる所以であり、巾車孤舟が散策行樂の具である。「木欣欣」「泉涓々」の二句寫し得て妙である。「萬物」と「吾生」との對比によつて最も深い感懷を起し來つて次段に入る。旋轉脈絡、巧を求めずして巧緻を極めたものか。

已矣乎。寓形宇内復幾時。曷不委心任去留。胡爲乎。遑遑欲何之。富貴非吾願。帝鄉不可期。懷良辰以孤往。或植杖而耘耔。登東臯以舒嘯。臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡。樂夫天命復奚疑。

●已ぬるかな。形を宇内に寓すること復た幾時ぞ。曷ぞ心を委して去留に任せざる。胡爲れぞ、遑遑として何に之かんと欲する。富貴は吾が願に非ず、帝郷は期す可からず。良辰を懷ひて以て孤往し、或は杖を植てて耘耔す。東臯に登りて以て舒嘯し、清流に臨みて詩を賦す。聊か化に乗じて以て盡くるに歸す。夫の天命を樂みて復た奚をか疑はん。
●已矣乎。歎息の辭。絶望の辭にも用ひる。「もう仕方がない」「もう駄目だ」などの意。●寓形。形は肉體。寓は寄寓。●宇内。上下四方を宇と曰ふ。●委心。心を自然にまかせ。●任去留。生命の去留にまかせ。生きるも死ぬるも天命にまかせ。●遑々。求む所ありて得ざる貌。忙しくあはただしい。●帝郷。仙人の都。莊子天地篇に「華封人謂堯曰、乘彼白雲。至子帝郷」とあるに本づく。●良辰。良き日。風雨も無く、天氣清和の日。或は花の開く時、月の明かなる夜など。●耘耔。耘は

草ぎる。軒は土をかける。●東阜。東の方に在る田地。●乗化。天地の化育の爲すがままに。自然に従ひて。●歸盡。生命の盡くるを待つ。●樂天命。易に「樂天知命。故不憂」とあるに本づく。

【通釋】もう何を思つても致方のないことである。我が形體を天地の間に寄托して居ることが、もう幾年であらうか。到底長いものではないに決つてゐる。して見れば、何の爲めに我が心を自然に委かせて氣樂な生活をし、生命の去留に任せないのか。何んすれど違々乎として名利の巷に奔走して、何處にゆかんとするのか。元來富貴となることは、我が志願ではない。又帝郷に到らんことを期するわけには行かない。故に長閑なる良い日には、獨りぶらぶらと散步に出で、或る時には何を何處にでも立て、草を刈つたり土を掩ふたりする。東阜に上つて舒かに思ふがままに嘯きある清流に臨んで詩でも賦して情懷をのべる。斯くの如くにして天地の化育に従つて生命の盡くるを待ち、願ふ所もなく期する所もなしに、悠々自適して天命に安んじ樂み、何物をも疑はずに平和愉悅で終りたいものである。

【評釋】前段を承けて吾が生命の歸趣を悟り、悠々自適して天命を樂んで疑はざる絶對境に逍遙する。是れが一歸去來兮の本旨本意である。清操高風あらはれて錦繡の文を織り出し、千載の下欽仰讚歎措く能はざらしめるではないか。

蘇東坡の評に曰く、歐陽公嘗て言ふ。「兩晋に文章なし。獨り此の歸去來の辭一篇あるのみ」と。其

の辭義夷曠にして蕭散。楚聲なりと雖も、尤怨局蹙の病無しと。

胡秋字の評に曰く、此の篇必ずしも實用に切なるあるに非ず。但々其の寄興の高遠なる、韻度の蕭散なる、學者游息の暇に、之を諷し之を詠せば、以て塵襟を滌ひて逸思を生ず可しと。

李惟學の評に曰く、陶元亮の歸去來は、野鶴の風に任せ、寒鷗の海に立つの狀あり。之を讀めば人をして清澗ならしむと。

● 賦 類 (六篇)

賦はもと詩の六義(風・賦・比・興・雅・頌)の一であるが、後には楚辭から發達した前項の辭と併せ稱し、専ら客觀的描寫を主とし、狩獵都城等を題目として長篇のものを作るに至つた。事文類聚に「賦の起る所、屈原始めて賦を作る。既に死するの後、楚に宋玉・唐勒・景差の徒、皆賦を以て稱せらる。是れ賦の戰國より始まる所なり」とある。又漢書藝文志に「歌はずして誦する。之を賦といふ。高に登つて能く賦す、以て大夫たるべし」とある。之は賦の用である。文心彫龍に「賦は鋪なり、采を鋪し文を搦し、物を體して志を寫す」とある。之は賦の體を示したのである。

要するに、辭も賦も次第に變化して後世にはその區別も明確ならず、種類も形式もいろいろになつて、遂に韻律のある文章となつたのである。

四、弔屈原賦

賈誼

篇旨 屈原は至誠純忠を以て楚に容れられず、賈誼は絶世の英才を以て漢の文帝に用ひられず、共に悶悶鬱鬱に勝へざるの境に陥つた不遇な士である。賈誼が南方長沙に左遷せられて湘水を過り、汨羅の名を聞いて自ら悄然又惕然たるものがあつた。此の賦は即ち屈原を弔ぶが爲めにして又自ら傷み憤るの辭である。故に言言句句肺腑より出で、悲愴感慨に充ち、千秋の下猶此の兩士の不遇を惜むの情に堪へないものがある。然れども後の君子は其の志を高しとして其の才を惜むと同時に、其の量を狭しとするのは、餘りに時人(當時の小人)を譏諷することが甚しいからである。

作者 賈誼——漢の洛陽の人、世に賈生と稱す。年十八、能く詩を誦し書を屬するを以て郡中に聞えた。吳廷尉、河南の守と爲り、その秀才なるを聞き、召して門下とし幸愛す。孝文帝召して博士と爲す。時に年二十餘、詔令の議下る毎に、諸老先生言ふ能はざるもの、賈生盡く之が對へをなす。帝之を喜び、超遷して一歳の中に太中大夫に至つた。賈生以爲らく、漢興つて二十餘年、天下和洽す。當に正朔を改め、服色を更へ、制度官名を定め、禮樂を興すべしと。乃ち悉く其の儀法を草案して上つた。帝大いに賈生を任用して、將に公卿の位に置かうとした。絳灌・東陽侯・馮敬の屬、妬んで盡く之を帝に讒した。帝之に惑ひ遂に貶して長沙王の太傅とした。賈生意願するを得せず、湘水を渡るに及んで此の賦を作つて屈原を弔した。長沙に居ること數年、後召されて帝に宣室に見え、鬼神のことを對へた。頃くして梁の懷王の太傅に任ぜられた。懷王は文帝の少子で愛せらるること深かつた爲めである。居ること數年、懷王馬より落ちて死す。誼自ら其の責任を感じて哭泣すること歲餘、遂に亦死んだのである。年三十三。

恭承嘉惠兮。竢罪長沙。仄聞屈原兮。自湛汨羅。造托湘流兮。敬弔先生。遭世罔極兮。廼隕厥身。烏喙哀哉兮。逢時不祥。鸞鳳伏竄兮。鷓鴣翱翔。闢茸尊顯

兮。讒諛得志。賢聖逆曳兮。方正倒植。謂隨夷溷兮。謂跖躋廉。莫邪爲鈍兮。鉛刀爲銛。子嗟默默。生之亡故兮。幹棄周鼎。寶康瓠兮。騰駕罷牛。驂蹇驢兮。騏垂兩耳。服鹽車兮。章甫薦屨。漸不可久兮。嗟苦先生。獨離此咎兮。

訓讀 恭しく嘉惠を承けて、罪を長沙に墮つ。仄に聞く「屈原は自ら汨羅に湛めり」と。造つて湘流に托して、敬んで先生を弔す。世の極り罔きに遭ひて、迺ち厥の身を隕せり。烏喙(くわい)哀しい哉。時の不祥に逢へり。鸞鳳伏し竄れて、鷓鴣(せいつ)翔る。闢茸(へくじよう)尊顯せられて、讒諛志を得たり。賢聖逆に曳かれて、方正倒に植てり。隨夷を溷れりと謂ひ、跖躋を廉なりと謂ふ。莫邪を鈍とし、鉛刀を銛と爲す。子嗟。默黙たり生の故亡きこと。周の鼎を幹棄して、康瓠を寶とす。罷牛に騰駕して、蹇驢を驂にす。騏驎は兩耳を垂れて鹽車に服す。章甫を屨に薦ぐ。漸く久しかる可からず。嗟苦、先生獨り此の咎に離へり。

語釋 ●恭承嘉惠。恭は敬で、嘉惠は有り難き恩惠である。天子の命をいふ。●竢罪長沙。長沙王の傳に左遷せられて赴くのであるから、罪を墮つと言ふのである。●湛。音調ともに沈に同じ。●汨羅。川の名。湘水の支流。湖南省湘南縣の北に在り。●造。至る。●托湘流。湘水の本流に弔辭を流して汨羅へ送るの意。●同極。同は無。極は中正。中正の道は行はる無きをいふ。●烏喙。嗚呼に同じ。●不祥。不幸。●鸞鳳。共に靈鳥。不祥の世には出ざるもの。賢人に喩ふ。●鷓鴣。二字にて「ふくろふ(鳥)」。惡鳥とし讒人に比す。●闢茸。微賤不肖の者。●隨夷。隨は卞隨といふ人。殷の湯王が天下を譲らんとしたが、之を受けなかつた清廉の人。「莊子」の讓王篇に見ゆ。夷は伯夷。弟の叔齊と位を譲り合つて共に逃げた人。「史記」の列傳に在り。●跖躋。盜跖と莊躋。盜跖は魯の大盜。「莊子」の盜跖篇に在り。莊躋は楚の大盜。「韓非子」論老篇に在り。●莫邪。干將、莫邪と並稱して名劍とす。●銛。銳利。●默默。口にはせずして心に歎くこと。●生。先生にて屈原をいふ。●幹棄。幹は轉。ころがし棄てる。●康瓠。康は大。瓠は瓢。大瓢のこと。或は瓦盆底とて土燒の瓶のことともいふ。●罷牛。罷は疲れ弱る。●蹇驢。足の不具なる驢馬。●騏驎。四頭鞍の車の外側につける馬。●章甫。殷の冠。●嗟苦。苦は若の誤としてもよろし。

【通釋】 恭しく茲に天子のありがたき恩恵を拜受して、死刑に處せられもせず、罪を長沙の地にて
 俟つことになつた。仄かに聞けば、屈原は自ら汨羅の河に身を沈めて死なれたとのことである。今
 吾れ此の湘水に臨んで哀悼の情に堪へず、敬んで辭を作つて流れに托し、以て先生を弔ふのである。
 思へば先生は世の中の正しき道の行はれざる濁亂の際に生れ合はせて、遂に其の身を汨羅に投じて
 命を隕された。嗚呼、實に哀しいことである。時代の不幸に遭遇されたのである。鸞鳳の靈鳥が全
 く逃げ匿れて、鴟梟の如き惡鳥が世の中を翔け廻つてゐる。微賤不肖の者が尊敬せられ顯彰せられ
 て、讒諂阿諛を好む小人輩が志を得て跋扈してゐる。賢人聖者は却つて姦佞の者に曳きずられ、方
 正の道が顛倒して世に行はれてゐる。卞隨伯夷の如き清廉の士を汚濁であると謂ひ、盜跖莊蹻の如
 き大盜を廉直であると謂ふのである。莫邪の名劍をば鈍であるとし、鉛で作つたやうな刀を銳利
 だといふ。實に是非轉倒の世の有様である。于嗟何と言つてよいかわからない。先生が何の理由も
 無くして斯る不幸に遭遇されたことは是非もないことであるのである。周の寶器である九鼎の尊き
 物を、ころがし棄てて顧みず、何の役にも立たない價値のない康瓠を寶物としてゐる。疲れ弱つた牛
 に乗つて走り、足の不具な驢馬を添馬として車を曳かせてゐる。千里を走る駿馬が鹽を積んだ車を
 挽くの勞に服してゐる。章甫の冠をば履物の下じきにしてゐる。斯の如く凡てに於てさかさま事ば
 かりの多い世の中は到底久しく滅亡せずには居ないのである。然るに屈原先生は獨り此の咎禍に罹

りなされた。實に傷ましいことである。

【評釋】 冒頭の「恭承嘉惠兮」は皮肉なくすくつたい感じがする。貶謫される身となるのは、嘉惠
 でもないが、斯う言はねばならない。之れ既に悲痛である。「烏羣哀哉兮」以下は戰國亂世の時代相
 で、是非善惡分明ならず、冠履轉倒して味噌糞一つの有様を叙したのである。鸞鳳と鴟梟、隨夷と
 盜跖、莫邪と鉛刀、周鼎と康瓠など皆相反するの對比である。蘭茸と讒諛、賢聖と方正、罷牛と蹇
 驢などの類は類似の對比である。此二種を巧に混用して平板を避けたのである。

諍曰。已矣。國其莫吾知兮。子獨壹鬱其誰語。鳳縹縹其高逝兮。夫固自引而
 遠去。襲九淵之神龍兮。沕淵潛以自珍。蝮蟻獮以隱處兮。夫豈從蝦與蛭蟻
 所貴聖之神德兮。遠濁世而自臧。使麒麟可係而羈兮。豈云異夫犬羊般紛
 紛其離此郵兮。亦夫子之故也。歷九州而相其君兮。何必懷此都也。鳳凰翔
 于千仞兮。覽德輝而下之。見細德之險微兮。遙增擊而去之。彼尋常之汙瀆
 兮。豈容吞舟之魚。橫江湖之鱣鯨兮。固將制於螻蟻。

訓讀 諍して曰く。已ぬるかな。國其れ吾れを知る莫し。子獨り壹鬱として其れ誰れにか語らん。鳳は縹縹として其れ高く逝
 く。夫れ固に自ら引きて遠く去る。九淵を襲ぬるの神龍は、沕として淵く潜れて以て自ら珍とす。蝮蟻に備きて以て隱處す。夫

れ豈に蝦と蛙類とに従はんや。貴ぶ所は聖の神徳、濁世に遠かりて自ら成る。麒麟をして保きて羈す可からしめば、豈に夫の大羊に異なりと云はんや。殺つて紛紛として其れ此の郷に離へり。亦夫子の故なり。九州を歴て其の君を相けば、何ぞ必ずしも其の都を懐はん。鳳凰は千仞に翔り、徳輝を覽て之に下る。細徳の險微を見ては、遂に増擊して之を去る。彼の尋常の汗漬は、豈に吞舟の魚を容れんや。江湖に横はるの鱣鯨は、固に將に螻蟻に制せられんとす。

【評解】 音「する」告ぐ。前段の大意を撮つて述べるの辭。離職の終に「亂曰」とあるが如し。●已矣。絶望の辭。どうすることもならない。●國其莫吾知兮。屈原が離職の抽思篇に「已矣哉。國莫人。莫吾知兮」と曰つてあるの語を用いたのである。●登擣。佛擣と同じく憤懣の積りて胸中に滿ること。●經纒。高く軽く飛ぶ貌。●九淵。九は數の極、極めて深き淵。●洶。潜み藏るる貌。●淵潛。深く隠る。●備。音「めん」。背く。●螻蟻。蟻は水蟲、蛇に似て四足、能く人を害すといふもの。「あもり」の類。類は「かはをそ」。●蝦、蝦蟇。●蛙類。「ひる」と「みみず」。●賊。藏と同じく「かくる」。●般。反つて。●鄆。尤も同音にて「とが」。禍のこと。●故。事と同じく「つみ」と訓む。失敗失策の意。●九州。禹の時支那全土を雍・梁・荆・豫・徐・揚・冀・青・兗の九州に分ちてあつたので、即ち支那全體をいふ。●此都。楚の都。●德輝。人君の徳化光輝。●險微。危險で衰微すること。●增擊。益々羽うつて高く飛ぶ。●尋常。尋は八尺、尋の倍が常である。●汗漬。汗は漬(たまり水)。漬は小渠(小さい溝)。●吞舟。舟を吞み込むほどの大魚。●鱣鯨。鱣は鯨に似たる大魚。口は頷下に在り、鱗無くして甲あり。肉は黄なるを以て江東にては黄魚と稱すといふ。今の鱣の類のこと。鯨は「くぢら」。螻蟻。蟻は「けら」。蟻は「あり」。ともに小蟲。

【通釋】 更に要約して之に告げて曰ふ。もう駄目なのであつた。先生が嘗て、「楚の國の君も人も吾(屈原)の忠直公正を知るものがなくなつたので」と言はれた如くに、其の胸中の悲憤鬱屈は誰にも語る事が出来ないことであつたらう。彼の鳳凰は標標として高く遠くへ飛んで行く。それは自ら危険な所に居られないとて去るのである。九淵に棲むの神龍は、深い深い處に潜み藏れて、自ら其

の身を珍重自愛してゐる。即ち螻蟻の如きものに背いて深く隠れてゐる。夫れ豈に蝦蟇や蛙類の如きものに随従して居らうか居ない。即ち聖人君子の貴ぶべきは、其の神智靈徳であつて、危邦には入らず亂世は避けて、小人暗君と事を共にせざるものである。彼の麒麟の如き神獸でも繋ぎ止めて自由を束縛したならば、豈に夫の犬羊と異なるものがあらうか。然るに反つて先生は自ら去ることをしないで、紛紛たる小人の讒誣に遭ひ、遂に此の如き禍殃に罹つたのである。之れ亦先生自身の招いた失敗であつた。若し廣い九州の天下を歴游して、有道賢明なる人君を索めて、之を輔けて自己の志を行ふを得ば、何ぞ必ずしも楚國の都ばかりに戀戀として居なくともよかつたらう。かの鳳凰の靈鳥は、千仞の中空に飛翔してゐて、人君の徳輝を覽れば下り至るものである。若し徳も無く道も無い衰微危険の國を見たならば、速かに天空遙に羽ばたきして遠く飛び去るのである。彼の尋常の小さい溝には、どうして吞舟の大魚を容れられよう。江湖の廣きに横はる巨大な鱣鯨でも、誤つて其處を離れて陸上にあげられたならば、螻蟻の小蟲にでも制服せられて了ふのである。

【評釋】 前段は主として世相をいひ、此の段は多く時人を説く。而して君子と小人とを比するに、鳳龍と螻蟻蛙類の類とを用ひ、麒麟と犬羊とを擧げてゐる。而して出處進退行藏用舍の機を見るに敏でなくては、小人の讒誣を蒙つて媿恥垢辱に勝へざるに至るを説く。「尋常之汗漬」以下最も人能く言ふ所である。全文比興寓意の文であるから、反復熟讀して其の眞味に徹すべきである。

蘇東坡曰く。賈生の如きは、漢文(帝)の用ひざるに非ず。生が用ひらるる能はざりし也。其の湘を過ぎて賦を爲り以て屈原を弔するに及び、遽然として遠く擧がるの志あり。其の後卒に以て自ら傷み哭泣して死絶するに至る。是れ以て善く窮に居らざる者なり。嗚呼賈生は志大にして量小に、才餘り有りて誠足らざるなりと。

五、阿房宮賦

杜

牧

篇旨 秦の始皇帝天下を統一して王業を一世より二世三世と計へて萬世に傳へようとした。其の雄心壯圖があらはれて萬里の長城となり阿房宮となつたのである。事は史記始皇本紀三十五年の條に左の如く書いてある。

始皇おもへらく、咸陽は人多くして先王の宮廷小なり。吾れ聞く周の文王は豊に都し、武王は鎬に都す。豊鎬の間は帝王の都なりと。乃ち朝宮を渭南の上林苑中に營作す。先づ前殿を阿房に作る。東西五百步、南北五十丈。上には以て萬人を坐せしむ可く、下には以て五丈の旗を建つ可し。周馳して閣道を爲り、殿下より直に南山に抵る。南山の巔を表して以て闕と爲し、複道を爲り、阿房より渭を渡りて、之を咸陽に屬し、以て天極閣道、漢を絶り營室に抵るに象る。阿房宮未だ成らず。成らば更に令名を擇びて之に名けんと欲す。宮を作ること阿房なり。故に天下之を阿房宮と謂ふ。――

杜牧が此の賦を作つた所以は、單に始皇のことを慨歎したのみではなく、當時唐の王室には、天寶の亂があり奉天の變などがあつた爲めに、之を憂へ之を傷んで大いに諷する所があつたので、末段の鑑戒が最も深長の意を寓してゐるのである。

作者 杜牧——字は牧之、樊川と號し、唐の京兆の人である。善く文を屬し、奇節ありて小事に拘泥せず、詩情亦頗る豪邁であつた。文宗の時、進士に及第し、復た賢良方正に擧げられ、牛僧孺の淮南節度府の掌書記となり、監察御史に擢んでられた。後出でて地方に刺史となり復た入りて中書舍人に遷つた。曹操の定めた孫子十三篇を注して世に行ひ、その古今に通じ成敗を見

ること頗る明かであつた。然れども困頓して振はず、怏怏として不平であつた。年五十、惡夢を見て我が死を知り、自ら墓誌を爲つた。集二十卷、杜氏樊川集といふ。杜甫と區別して小杜と稱す。亦唐代詩人の尤である。

六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出。覆壓三百餘里。隔離天日。驪山北構而西折。直走咸陽。二川溶溶。流入宮牆。五步一樓。十步一閣。廊腰縵迴。簷牙高啄。各抱地勢。鉤心鬪角。盤盤焉。困困焉。蜂房水渦。轟不知其幾千萬落。長橋臥波。未雲何龍。複道行空。不霽何虹。高低冥迷。不知西東。歌臺暖響。春光融融。舞殿冷袖。風雨淒淒。一日之內。一宮之間。而氣候不齊。

訓讀 六王畢つて四海一なり。蜀山兀として阿房出づ。三百餘里を覆ひ壓して、天日を隔離す。驪山北に構へて西に折れ、直に咸陽に走く。二川溶溶として、流れて宮牆に入る。五步に一樓、十步に一閣。廊腰縵く廻りて簷牙高く啄む。各々地勢を抱いて、鉤心鬪角、盤盤焉たり困困焉たり。蜂房・水渦、轟として其の幾千萬落なるを知らず。長橋の波に臥すは、未だ雲あらざるに何の龍ぞ。複道の空に行くは、霽れざるに何の虹ぞ。高低冥迷として、西東を知らず。歌臺の暖響は、春光融融たり。舞殿の冷袖は、風雨淒淒たり。一日の内、一宮の間に於て、而かも氣候齊しからず。

語釋 ●六王。韓王(安)、趙王(遷)、燕王(喜)、魏王(假)、楚王(負芻)、齊王(建)の六王は何れも始皇の將たる王翳・王賁等に滅さる。●蜀山。蜀の地方の樹木の鬱蒼たる山。●兀。はげにて禿である。樹木の無きをいふ。●驪山。大明一統志に曰く。陝西省西安府、臨潼縣の東南三里に在り。驪戎の居る所。因つて名づく。●二川。渭水と涇水。●溶溶。水の多くありて緩く流るゝ貌。●五步。歩は六尺。三十尺の距離に一樓を置く。●廊腰。廊下が椽閣の腰の如く連ること。●簷牙。椽端の先が尖りて牙の如くなるをいふ。●鉤心。屋根の眞中の曲りそつて鉤の如きをいふ。●鬪角。簷の尖角の集りて闘ふ如きをいふ。●盤盤。未だ雲あらざるをいふ。●水渦。水渦の如く連ること。●長橋。橋の如く連ること。●臥波。波の如く連ること。●不知西東。歌臺の暖響は、春光融融たり。舞殿の冷袖は、風雨淒淒たり。一日の内、一宮の間に於て、而かも氣候齊しからず。

盤焉。盤環の貌。●困困焉。輪囷の貌とてまがりまはる様。●蜂房。蜂の巢。雨垂れの下に敷いた瓦が蜂の巢の如くになつてゐる。●水渦。水の渦うず。雨垂れが落ちて溜つた水が渦をなして流れ溢れる。●壑。音「ちく」。長くして直き貌。●幾千萬落。雨垂れ水の落つる様が幾千萬條もある。●長橋。阿房から渭水を渡りて之を咸陽に繋げる爲めに水波の上に架けた橋。●複道。道が上と下とにあるので、上は皇帝、下は臣下の行くもの。阿房から直に南山の巔に至るまで複道を爲つて通ずる。●高低。以上の各種の樓殿宮閣が或は高く或は低く建ち並ぶさま。●冥迷。暗くして迷ふ。●歌臺。宮女の集りて唱歌する處。●舞殿。舞樂する處。

【通釋】 韓・魏・燕・趙・齊・楚の六國が滅亡して、四海は皆秦の統一する所と爲つた。始皇帝は舊來の宮闕を狹隘であるとして、大規模の宮殿建築の土木工事を興した。森林の鬱蒼たりし蜀山は忽ちに伐り出されて禿山となると同時に阿房宮といふ未聞の大宮殿が出来上がった。其の廣さが三百餘里の間を覆ひかくし、高さが中天に聳えて天つ日影を隔て遮るばかりである。其の位置は驪山の北南から建て始めて西の方へ曲折し、一直線に咸陽まで續いてゐる。渭水と涇水との二川が緩々と水を湛へて、宮殿の墻塼内へ流れ入るといふ雄大なもので、山川の形勝を極めて居る。五歩目には一樓があり、十歩目には一閣がある。その樓閣の通路となる廊下がぐるぐると纒く廻つて、簷端の先きが高く聳え、鳥が何物かを啄つばまうとするが如くである。その樓閣が各々地勢の高低に應じて建てられ、鉤の如くに曲り反つた棟や、角を突き出して鬩ひらふが如き簷端などが、盤環したり屈曲したりして建ち並んでゐる。雨垂れの下に敷いてある石は蜂の巢の如くに、落ちた雨垂れの水は渦巻をなして

て溢れ流れてゐる。其の雨垂れ水の落ちる様が糸をはえた如く眞直ぐに幾千萬條あるかわからない。渭水に架けてある長い橋は、未だ雲が出ないのに、どうして現はれた龍であらうかと思はれる美しい立派なる物である。南山に到る上下の複道が空中に連つてゐるのは、霧れ渡らないのにどうして現はれた虹であらうかと思はれる美しい立派なる物である。高殿低廊連續參差して其の廣さが限りがないから、中は暗くて出入に迷ひ、東西の方角もわからないばかりである。唱歌する高臺より洩れ来る暖かさうな音楽の響は、春光の融融たるが如く、人をして恍惚たらしめる。舞踊する深殿より翻り見る涼しさうな袖や袂の風は、風雨の凄凄たるが如く、人をして爽涼を感ぜしむる。一日の中に於て、又一宮の内に於ても、或は暖く或は涼しく、氣候が齊しくないほどである。

【評釋】 「六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出」は、三字を以て句を成す。是れ一篇の提綱であつて、筋勁無比と謂ふべきである。以下其の細叙に入る。「三百餘里」より「二川溶溶」までは大觀であつて其の宏壯雄大を想見せしめる。「五步一樓」以下次第に精細の叙述形容に入り、修辭の妙を極む。「未雲何龍」「不霽何虹」の如きは最も技巧を凝したものの。「歌臺暖響」と「舞殿冷袖」より「氣候不齊」を以て結んだ如きも照應の整へるもので、明喻あり、暗喻あり、且つ對偶ありて辭賦の體に能く適うてゐる。

以上は宮殿樓閣の美を誇張したのである。

妃嬪媵嬙王子皇孫。辭樓下殿。輦來于秦。朝歌夜紘。爲秦宮人。明星熒熒。開粧鏡也。綠雲擾擾。梳曉髮也。涓流漲膩。棄脂水也。煙斜霧橫。焚椒蘭也。雷霆乍驚。宮車過也。輾輾遠聽。杳不知其所之也。一肌一容。盡態極妍。綬立遠視。而望幸焉。有不得見者三十六年。

訓讀 妃・嬪・媵・嬙、王子・皇孫、樓を辭し殿を下り、輦にして秦に来る。朝歌夜紘して、秦の宮人たり。明星の熒熒たるは、粧鏡を開くなり。綠雲の擾擾たるは、曉髪を梳るなり。涓流の膩を漲らすは、脂水を棄るなり。煙斜に霧横はるは、椒蘭を焚くなり。雷霆の乍も驚くは、宮車の過ぐるなり。輾輾として遠く聽え、杳として之く所を知らざるなり。一肌一容、態を盡し妍を極め、綬く立ち遠く視て幸を望む。見ゆるを得ざるある者三十六年なり。

語釋 ●妃嬪媵嬙。皇后の次が妃、妃の次が嬪で、媵嬙は又其の次ぎ。何れも阿房宮中に在るの宮女。●熒熒。光り輝く貌。●擾擾。亂るる貌。●涓流。涓水の清流。●漲膩。膩は「あぶら」。香油などの多く流るるをいふ。●椒蘭。共に香木。焚いて薰するもの。●輾輾。車の響き鳴る形容。●望幸。天子のみゆきを仰ぎ望む。●三十六年。秦の始皇帝が王位に在ること二十五年、帝位に在ること十二年であつたが、三十六年といふのは崩御の年を省いたのか。

【通釋】 妃嬪以下媵嬙の宮女や、王子皇孫の方々が、各自の住居と定められて居る樓を辭し殿を下りて、皆輦車に乗つて阿房の宮殿に集り來り、朝には歌舞し夕には管絃して、歸ることを忘れ、阿房宮裡の宮人と爲つて了ふのである。殿中生活の一斑を見ると、明星のきらきらと光り輝くかと思ゆるは、お化粧する爲めに開く鏡の光りである。又綠雲が亂れ飛ぶかと思ゆるは、曉早く起きて黒髪

を梳るの影である。涓水の流にあぶらの漲り浮ぶのは、宮女たちの香油香水などを棄てるのである。煙霞斜に棚引き雲霧横に飛ぶかと思ゆるは、椒蘭の香木などを焚き薰するのである。雷霆が天の一方に轟き渡るかと驚き聞かせるは、宮人たちの車が通り過るのである。其の輾輾たる響きは次第に遠くなつて、杳かに何處へ行つたかわからない。多數の宮女が各々お化粧を凝して、嬌態を盡し妍容を極め、媚を呈し笑を含み、しとやかに綬く立ち上がり遠きを望み視て、君王の寵幸を得んとを望んでゐる。然し何分にも多數の宮女であるから、始皇の在位三十六年間に一度も接見するを得ない者すらあつた。

【評釋】 此の段は宮女の多くして妍美を競ふの状を描いたもので、能くも言へたものだと思はせるほどの巧妙で、「有不得見者三十六年」で總括し盡してゐる。

燕趙之收藏。韓魏之經營。齊楚之精英。幾世幾年。取掠其人。倚疊如山。一旦有不能輸來其間。鼎鑄玉石。金塊珠礫。棄擲邈迤。秦人視之。亦不甚惜。

訓讀 燕趙の收藏、韓魏の經營、齊楚の精英、幾世幾年、其の人を取り掠め、倚疊して山の如し。一旦には其の間に輸來する能はざるものあり。鼎は鑄のごとく玉は石のごとく、金は塊のごとく珠は礫のごとく、棄擲して邈迤たり。秦人之を視て亦甚だしくは惜まず。

語釋 ●收藏。收め藏しておいた寶。●經營。苦辛して搜し求めた物。●精英。すぐれた貴い物。●倚疊。寄り累りて疊み積む。多くあること。●一旦。一朝一夕。●輸來。運搬し來る。●鑄。なべ。●塊。土塊。●礫。小石。●邈迤。連接の意。道路

につづいてゐるさま。

【通釋】 以上の如き美人の外に又多くの珍寶奇什もある。それは燕趙の深く愛して收藏して居たものや、韓魏の經營して求めたものや、齊楚の精英とするものばかりで、始皇は其の人までを取り掠め來つて、積み重ねたことは山の如くであつた。一朝一夕にはとても茲まで運搬し來ることの出來ないものがあつたであらう。そのやうに澤山の品物が集り來てゐるから、尊き鼎も鍋釜の如くに賤しみ、貴き玉でも石の如くに取扱ひ、金銀を見ること土塊のごとく、寶珠を見ること小石の如くで、之を投げ棄てて顧みないこと遷延として道路に連る有様であつた。秦人は之を視て少しも惜しいとは思はなかつた。

【通釋】 此の段は寶器珍什の多くして輕視せられたるの狀を描いたもので、「鼎鑑玉石。金塊珠璣」を以て言ひ盡してゐる。「秦人視之。亦不甚惜」は、後段一轉折させるの伏線である。

嗟乎。一人之心。千萬人之心也。秦愛紛奢。人亦念其家。奈何取之盡錙銖。用之如泥沙。使負棟之柱。多於南畝之農夫。架梁之椽。多於機上之工女。釘頭磷磷。多於在庾之粟粒。瓦縫參差。多於周身之帛縷。直欄橫檻。多於九土之城郭。管絃嘔啞。多於市人之言語。使天下之人。不敢言而敢怒。獨夫之心。日

益驕固。戍卒叫。函谷舉。楚人一炬。可憐焦土。

嗟乎。一人の心は、千萬人の心なり。秦紛奢を愛すれば、人も亦其の家を念ふ。奈何ぞ之を取ること錙銖を盡し、之を用ふること泥沙の如くなる。棟を負ふの柱は、南畝の農夫よりも多く、梁に架するの椽は、機上の工女よりも多く、釘頭の磷磷たるは、庾に在るの粟粒よりも多く、瓦縫の參差たるは、周身の帛縷よりも多く、直欄横檻は、九土の城郭よりも多く、管絃の嘔啞たるは、市人の言語よりも多からしむ。天下の人をして、敢て言ひ敢て怒らざらしむ。獨夫の心は、日に益々驕固なり。戍卒叫んで函谷舉げられ、楚人の一炬、憐む可し焦土となりぬ。

●一人。始皇帝をいふ。●紛奢。極めて甚しい奢侈。●錙銖。僅少の貨幣。些少の意に用ふ。●磷磷。きらきらと輝く貌。●庾。米倉。●瓦縫。瓦と瓦との合せ目。●參差。互に入りまじり長短不揃のさま。●九土。九州と同じく支那全土をいふ。●嘔啞。歌の聲の長短高低あるをいふ。●獨夫。一夫に同じく君道を失ふ者をいふ。孟子にも見ゆ。茲にては始皇を斥す。●戍卒。番兵。陳勝吳廣の始めて兵を舉げしをいふ。●函谷。漢の沛公(劉邦)が項羽に先ちて函谷關を破つて秦に入ったこと。●楚人。楚の項羽の軍をいふ。

【通釋】 嗟呼、始皇一人の心は、即ち天下幾千萬人の心となるのである。秦皇が甚だ奢侈紛華を愛好するから、下人民も亦各々其の家を華美にして贅澤な生活をしたいと思ふのである。然るに如何なれば、下人民から租税として賦課として取り立てることが錙銖毫釐の微細までを盡しながら、之を費し用ふることが泥沙の如く少しも惜まらずに濫用妄費するのであらうか。さても亂暴な政道であつた。試に見よ、宮殿の棟を負ふ柱の数の多いことは、南畝に耕作して居る農夫の數よりも多く、梁木に架け渡した椽の數は、機織に従事してゐる工女の數よりも多く、釘の頭がきらきらと光り輝

いてゐる數は、米倉に在る粟粒よりも多く、屋根の瓦の合せ目が重り合つて亂れ見ゆるは、身に纏ひ着る衣服の糸數よりも多く、縦横に設けたる欄干の數は、全國に散在してゐる城郭の數よりも多く、管絃歌舞の高低相唱和する様は、市中の人の言語の數よりも多いといふ有様である。斯る贅澤紛奢を極めて居て、而かも人民を壓抑し、毫も不平を言つたり怒りを洩したりすることの出来ないやうにした。かくて獨夫ともいふべき始皇の心は、日に益々驕り高ぶり頑固となつて、何人の忠諫も聽き入れなかつた。而して遂に天下の人心をして離叛せしめて了つた。其の結果、二世皇帝の元年に及んで、一戍卒であつた陳勝吳廣等が兵を擧げて叛するに至つた。天下之に響應して秦を伐つ者續出し、就中漢王劉邦と楚王項羽とが函谷關の要險を破つて三秦の地に侵入した。項羽は咸陽の都に入り、秦の宮殿に一炬火を投げて焼き盡し、あはれ阿房の前殿も跡形の無い焦土となつて了つたのである。

【評釋】「嗟呼。一人之心。千萬人之心」の一句は、前を總括して後を展開させるの一轉折である。「負棟之柱」。以下「市人之言語」までは重疊法で同一句法を累ねたものである。「楚人一炬。可憐焦土」は、慘として樞花一朝の榮となり了つたので、人間盛衰の倏忽を語るものである。

嗚呼滅六國者六國也。非秦也。族秦者秦也。非天下也。嗟夫。使六國各愛其

人。則足以拒秦。秦復愛六國之人。則遞三世。可至萬世。而爲君。誰得而族滅也。秦人不暇自哀。而後人哀之。後人哀之。而不鑑之。亦使後人而復哀後人也。

訓讀 嗚呼、六國を滅す者は六國なり。秦に非るなり。秦を族する者は秦なり。天下に非るなり。嗟夫、六國をして各々其の人を愛せしめば、則ち以て秦を拒ぐに足りしならん。秦復た六國の人を愛せば、則ち三より遞して、萬世に至りて君たる可し。誰か得て族滅せん。秦人自ら哀むに暇あらず、而して後の人之を哀む。後の人之を哀んで、而かも之に鑑みずんば、亦後人をして復た後人を哀ましめん。

語釋 ●族秦。秦の一族を悉く滅亡させる。●遞。次から次へと送り傳へる。●不暇自哀。秦の滅亡が餘りに早急であつたから、自分自身で之を悲む暇さへ無かつた。

【通釋】嗚呼、六國を滅亡させたものは六國であつて、秦ではなかつた。秦を族滅させたものは秦であつて、天下ではなかつた。ああ、六國の王たる人人が各々其の國の人民を愛撫して善政を行つたならば、十分に秦の攻略を防禦することが出来たのである。秦もまた六國を平定したならば平定したとして、其の人民を愛撫して善政を布くことに心を用ひ、阿房宮の如き贅澤をすることが無かつたならば、國家の基礎は磐石の如くで、一世より二世三世と計へて次第に萬世にも君主たるを得たので、誰か族滅させることを得たであらう。あはれにも秦の亡滅は餘りに急速であつて秦人自らが哀み傷む暇さへ無かつた。それを後人が又哀み傷んでゐる。後人たる者が秦の亡滅を哀み傷んで、

自らそれに鑑みて善政を布くことに留意努力しなくては、又同一轍を踏んで滅亡するであらう。すれば又その後人をして秦の滅亡を哀んでゐる後人を哀み傷むことであらう。恐るべきは榮華驕奢を極めた暴君の政治である。

【評釋】 結末凡て是れ鑑戒の鐵槌を下したので、作者の本意此にあるを知らしめるものである。三誦して愈々意味の深遠なるを見るに足る。試に諸家の評を挙げよう。

邵二泉曰く、此の篇宏壯巨麗、馳聘上下、數百言を累ね、「楚人の一炬、憐むべし焦土となりぬ」に至り、其の盛衰の變を論ずること此に判す。末の一段尤も鑑戒を含み、之を讀むに餘味ありと。金聖嘆曰く、奇を窮め麗を窮め、至れり盡せり。却つて是れ一篇最も清出の文字なり。文章も此に至つて心枯れ血竭く。字を逐ひて細細に之を讀むべしと。

六、秋聲賦

歐陽修

【論旨】 秋の靜かな夜、獨坐して書を讀むに方り、雨にもあらず、風にもあらぬ聲が聞えて來た。是は何の聲であるかと、疑問を呼び起して、一篇の文を成したのである。古人が「此の篇最も善く物象を形容し、鋪叙描寫、變遷窮らず。末は人生の憂感時と俱に變ずるに歸せり。人をして之を讀めば秋を悲むの意あらしむ」と評してゐる。以てその概を知ることが出来る。

【作者】 歐陽修。字は永叔、自ら醉翁と號した。觀の子で、古州廬陵の人である。仁宗に事へて諫院に知となり、朋黨論を

上り邪説を破つた。姦黨之を忌み、滁州に貶した。揚州、穎州等に徙り、後朝廷に復歸して翰林學士となり、貢舉を司つた。熙寧の初め王安石と意見合はず、太子少師を以て官を辭し、熙寧五年(一七三二)年六十六で卒し、文忠と諡せられた。修は晩年六一居士と號し、詩文經史に至るまで、舊來の面目を脱し、宋一代の學術のために一生面を開いた。文忠公全集百五十三卷、其の他新唐書、五代史記等の著がある。

歐陽子。方夜讀書。聞有聲自西南來者。悚然而聽之。曰。異哉。初淅瀝以蕭颯。忽奔騰而砰湃。如波濤夜驚。風雨驟至。其觸於物也。鏗鏘錚錚。金鐵皆鳴。又如赴敵之兵。銜枚疾走。不聞號令。但聞人馬之行聲。予謂童子。此何聲也。汝出視之。童子曰。星月皎潔。明河在天。四無人聲。聲在樹間。予曰。噫嘻悲哉。此秋聲也。胡爲乎來哉。

【訓讀】 歐陽子、夜に方つて書を讀む。聲の西南より來る者あるを聞く。悚然として之を聽いて曰く、異哉。初めは淅瀝として以て蕭颯たり。忽ち奔騰して砰湃たり。波濤の夜驚き、風雨の驟に至るが如し。其の物に觸るるや、鏗鏘錚錚として、金鐵皆鳴る。又敵に赴くの兵の枚を銜んで疾く走り、號令を聞かずして、但し人馬の行く聲のみを聞くが如し。予童子に謂へらく、「此れ何の聲ぞや。汝出でて之を視よ」と。童子曰く、「星月皎潔として、明河天に在り。四に人聲無く、聲は樹間に在り」と。予曰く、「噫嘻悲しい哉。此れ秋の聲なり。胡爲れぞ來れるや」と。

【語釋】 ●悚然。驚き懼れる。●淅瀝。雨の聲。●蕭颯。風の聲。●奔騰。はしりのぼる。風の吹き過ぐるをいふ。●砰湃。水の石を撃つ聲。●鏗々錚々。金鐵の鳴る形容。●枚。其の形狀箸の如くで、横にして口に銜ましめる物。言語を發せしめざる爲めに用ふ。●明河。天の川。

【通釋】 歐陽子(自分自身を稱するのである)、夜に入つてから静坐して讀書してゐた。すると何の聲か知らぬが、西南から音立てて來るのが聞えた。驚き懼れて能く之を聽き取つて曰ふには「不思議なことであるわい。初めは浙瀝として雨の降り注ぐが如くで、又蕭颯として風の吹き渡るが如くである。忽ち遠く高く奔りのぼつて、水が石に衝き當つて激するが如くである。恰かも大波巨濤が夜の寂寞を破つて岸を打つが如く、暴風驟雨が急に至るが如くである。又其の物に觸れて響くのを聽けば、鏗々錚々として金鐵の鳴り渡るが如くである。又敵陣目がけて突進する兵士が、聲を出さない爲めに口に枚を銜んで、急速に走り行くけれども、其の進軍の號令も何も聞かず、但々其の人馬だけが黙々として進行する聲ばかりを聞くが如くである。さても不思議な變な聲だと思つて、早速側に侍してゐる童子を呼んで、之に謂つていふには「此れは何の聲であらうか、奇異な聲である。汝早く外へ出て之を調べて視よ」と言つた。すると童子が一寸庭へ出て視て、復命して曰ふには、「星や月が皎く濶く大空に輝き渡つて、明かな銀河が天に横はつてゐる。四方何處にも、人の聲も何も聞えない。惟だ其の聲は大樹大木の中に鳴り響いてゐるだけです」と應へた。予之を聞いて驚いて曰く、「嗚呼悲しいことだ。此れは正しく秋の聲である。何すれぞ斯くも吹き寄せて來たのであらうか」と。

【評釋】 秋氣清爽の靜夜、獨坐して讀書するの時、浙瀝蕭颯として至るもの、之れ何の聲であるかと、先づ侍童をして視せしめ、侍童の返答を聞いて、是れ秋聲であると斷じ、以下の前提としたのである。「異哉」。「噫嘻悲哉」の歎聲は、遙に最後の「如助予之歎息」を喚起するの伏線で、「歎息」が一篇の主意である。

蓋夫秋之爲狀也。其色慘淡。煙霏雲斂。其容清明。天高日晶。其氣慄冽。砭人肌骨。其意蕭條。山川寂寥。故其爲聲也。淒淒切切。呼號奮發。豐艸綠縟。而爭茂。佳木葱蘢。而可悅。艸拂之而色變。木遭之而葉脫。其所以摧敗零落者。乃一氣之餘烈。

訓讀 蓋し夫れ秋の狀たるや、其の色慘淡として、煙霏び雲斂まる。其の容清明にして、天高く日晶かなり。其の氣慄冽、人の肌骨に砭す。其の意蕭條として、山川寂寥たり。故に其の聲たるや、淒淒切切として、呼號奮發す。豐草綠縟として茂を争ひ、佳木葱蘢として悦ぶ可きも、艸之に拂はれて色變り、木之に遭うて葉脱つ。其の摧敗零落する所以の者は、乃ち一氣の餘烈なり。

語釋 ●慘淡。物すごく。ほの白うして痛ましきこと。●慄冽。慄は急速、冽は清冷。●砭。石針と調み、上古の治病法に砭を以て肌膚に刺した。●蕭條。物さびしき様。●淒々切々。寒涼にして急迫の貌。●呼號。萬籟呼びさげぶ。●奮發。ふるひおこる。●綠縟。縟は繁采とて茂り榮える。●葱蘢。蘢は蔽ふ貌、又聚れる貌。青々と繁れるをいふ。○一氣。秋氣をいふ。●餘烈。烈しい力の残り。

【通釋】 蓋し夫れ秋の形狀といふものは、其の色は慘淡として物すごく痛ましくほの白うして、煙霧は高く飛び去り、雲は遠く消え失せて、其の光景は清澄明徹、天は高く晴れ、日は鮮かに晶かである。又秋の氣といふものは、鋭く急く、清冷であつて、人の肌膚骨髓に砭を刺すが如くである。其の意といへば、蕭條として物さびしく、山も川も寂寞荒寥たるものである。故に秋の聲といふものは、寒涼急迫であつて、萬頼悉く呼びさけんで奮發躍動する。故に豊かに茂つた草が綠色濃やかに其の繁茂を争ひ、佳き樹木が聚り繁つて、悦び愛すべきものであつたのも、此の秋風一たび至れば、草も之に拂はれて其の色を變へ、木も之に遭つて其の葉が脱落する。斯の如く萬物が摧き敗られて零落枯凋する所以のものは、即ち此の秋の陰氣の烈しい力の影響である。

【評釋】 秋の狀景を叙するの一段である。其の色、其の容、其の氣、其の意と順次に擧げ來つて、遂に其の聲に及んだのである。次序整然として、佳麗なる對偶法を用ひ、珠を聯ねた如くである。「一氣之餘烈」は、次段に入るの連鎖である。

夫秋刑官也。於時爲陰。又兵象也。於行爲金。是謂天地之義氣。常以肅殺而爲心。天之於物。春生秋實。故其在樂也。商聲主西方之音。夷則爲七月之律。商傷也。物既老而悲傷。夷戮也。物過盛而當殺。

訓讀 夫れ秋は刑官なり。時に於ては陰たり。又兵の象なり。行に於ては金たり。是を天地の義氣と謂ふ。常に肅殺を以て心と爲す。天の物に於ける、春は生じ秋は實る。故に其の樂に在るや、商聲は西方の音を主る。夷則は七月の律たり。商は傷なり。物既に老いて悲傷す。夷は戮なり。物盛を過ぎては當に殺すべし。

語釋 刑官。周禮に春夏秋冬の四官あり。秋官は司寇として法度刑罰を司る。爲陰。春夏は陽、秋冬は陰。兵象。兵は兵器にて物を殺傷する。秋氣の萬物を凋落せしむるに譬ふ。於行。行とは五行。五行は木火土金水。五行を四季に配すれば、木は春、火は夏、金は秋、水は冬である。義氣。義は秋霜の如く、仁は春日の如しといつて、義は烈、仁は順、義は方、仁は圓、仁は生じ、義は殺す。故に秋氣と爲す。商聲。宮・商・角・徵・羽を五音といふ。商聲は金聲である。陰である。故に西方の音とする。夷則。十二律の一で、七月の律管である。七月は陰曆の初秋である。

【通釋】 又夫れ此の秋は刑官に相當する。四時に於ては陰である。又兵の萬物を殺傷するの象である。五行の上では金に相當する。故に秋は天地間に於ける義氣と謂ふべきもので、常に嚴肅殺伐を以て其の心としてゐる。天が萬物に對する關係を見るに、春は百穀草木を生長せしめ、秋は五穀果實まで成熟せしめるものである。故に音樂の上に於ては、商聲に當り、商聲は西方の音を掌り、西方の音は即ち秋の聲で、夷則の律が七月初秋の音律である。商聲の商は傷といふ意味で、萬物既に老い果つれば損ひ傷れるといふのである。夷則の夷は、誅戮の戮で「たひらげる」の意である。萬物が強盛を過ぎたならば、當に誅戮を加ふべきを示したものである。

【評釋】 前段の「一氣之餘烈」を承けて、刑官と曰ひ、陰氣と曰ひ、兵象と曰ひ、金性と曰ひ、義氣と曰ひ、「以肅殺而爲心」と斷じ、更に「商傷也。夷戮也。物過盛而當殺」と結ぶ。實に是れこそ

秋霜烈日、凜乎として懼るべきを思はしむるものである。鋪叙實に巧緻、水も漏らさぬ論議である。嗟夫艸木無情。有時飄零。人爲動物。惟物之靈。百憂感其心。萬事勞其形。有動乎中。必搖其精。而況思其力之所不及。憂其智之所不能。宜其渥然丹者爲槁木。黦然黑者爲星星。奈何非金石之質。欲與艸木而爭榮。念誰爲之狀。賊亦何恨乎秋聲。童子莫對。垂頭而睡。但聞四壁蟲聲唧唧。如助予之歎息。

訓讀 嗟々夫れ艸木の情無きも、時あつて飄零す。人は動物たり。惟れ物の靈たり。百憂其の心を感じしめ、萬事其の形を勞す。中に動くあれば、必ず其の精を搖かす。而かも況んや其の力の及ばざる所を思ひ、其の智の能はざる所を憂ふるをや。宜なり。其の渥然として丹き者は槁木と爲り、黦然として黒きものは星星と爲る。奈何ぞ金石の質に非ずして、艸木と榮を争はんと欲するか。念へば誰か之を狀賊することを爲す。何ぞ秋の聲を恨みんやと。童子對ふる莫くして、頭を垂れて睡る。但々四壁の蟲聲唧唧として、予の歎息を助くるが如きを聞く。

語釋 ●飄零。木の葉の散り落ちる。●渥然。赤くして光澤ある。●槁木。枯木で人の年老いたるに喩ふ。●黦然。毛髮の黒きこと。●星星。白く光ること。白髮の貌。●狀賊。二字共に「そこなふ」。人の性命をそこなふ。●唧々。蟲の繁く鳴く聲。

【通釋】 嗚呼夫れ、かの草木の如き無情の物でも、四時の推移、陰陽の變化に従つて、凋落飄零するのである。況んや人は有情の動物である。これ實に萬物の靈長である。故に多くの憂患を抱いて其の心を感傷せしめたり、多くの事を成さんとして其の形體を過勞せしめたりしてゐる。物慾意中に衝動すれば、必ず其の精神を動搖せしめる。而かも況んや、吾が體力の及ばない過大の事を思ひ

煩ひ、又吾が智能の屈きもしない深遠の事を憂ひ歎いたりするが故に、益々其の精根を消耗するのである。見よや、彼の渥然として紅顏の少壯者も、いつの間にか枯木の如き老衰した姿となり、黦然として黒髪を戴く妙齡の者も、忽ちにして銀髮星星の白頭翁となるのである。殊に況んや、人間の生命は、金石の質の如き堅固長久なるものでなく、一度盛りを過ぐれば復た再び得べからず、老衰より死歿に至るは免かるべからざるものである。して見れば奈何して彼の年々歳々赫れても復た生生する草木と榮を争はれようか、争はれないではないか。畢竟人間の榮枯は、草木の榮枯に及ばないほどの果敢なさである。然るに彼の年齢尙壯にして顔色既に衰へ、志氣消耗して爲す無きに至れるは、誰が之を狀賊したかと言へば、皆之れ物慾中に動いて其の精を搖かし、力の及ばざる所を思ひ、智の能はざる所を憂へた結果である。即ち物慾に囚れて本然の性を傷害したからである。斯る事どもを思ひ考へて見れば、秋聲の至り來るも何ぞ驚き且恨むるを要せん。皆是れ自然の理法である」と、語り終つたが、側の童子は、何の返答もなく、頭を垂れて眠りに落ちてゐる。夜は既に更けて、但々四邊の蟲の音が繁げく、予の長大息の歎聲に和して之を助くるが如きを聞くのみであつた。

【評釋】 一轉して人生に歸到し、人間の愛慾物情は神を勞し形を役して、無限の憂愁哀苦を懐かしめ、時至らずして老い、事成らずして逝かんとするの悲恨を陳べ、深く自己省察の要を道破したの

である。

「童子莫對」以下は、第一段の「予謂童子」云々に應じたので、呼應の必然である。即ち首尾完全、模寫周到、而して變幻窮らざるものと稱せらるる、所以である。

七、前赤壁賦

蘇軾

蘇軾絶世の英才を以て、貶謫の厄に遭ひ、宋の神宗の時、黄州に遷された。始めて定惠院に寓したが、後臨皋亭に移り、州の東坡(東方の堤)に堂を設けて雪堂といひ、自ら東坡居士と稱して居た。元豐五年東坡四十七歳の秋七月、客と赤壁に遊んで、此の一篇を得た。同年冬十月復び遊んで次の一篇を得たのである。其の他尙數回の遊遊があつたらうが、とにかく此の二篇が千古の絶調として廣く人口に膾炙してゐる。前後三ヶ月の間に同一場處に於て其の結構意思の全く異なる傑作二篇を得たるは、實に「天下文章の僊」と稱せらるる所以である。

赤壁といふ處に就いては、古來諸説紛紛である。今その二三を示す。先づ文章軌範の註には、

赤壁有三。唯蒲圻縣西北岸烏林、與赤壁相對。乃周瑜破曹操處。東坡所遊則黃州之赤壁也。建安十三年、曹操自江陵遣劉備、順流東下。備求救于孫權。權將周瑜請兵三萬拒之。瑜部將黃蓋、建議以檣艦開船、載燥荻枯柴、先以書遺操。詐言欲降。時東南風正急。蓋以十餘艘、前、餘船繼進。去二里許。同時發火。火烈風猛。燒盡北船。操軍大敗。石壁皆赤。故曰赤壁。

又後赤壁賦の原註には、

元豐六年東坡自書此賦後云。江漢之間、指赤壁者三焉。一在漢水之側竟陵之東、即今復州。一在齊安郡步下、即今黃州。一在江夏西二百里、今屬漢陽縣、予謂、江夏之西南者、正曹公所敗之地也。按三國志、操自江陵而下、備與瑜、由夏口往而

運戰。則赤壁明非竟陵之東與齊安步下也。

右によつて、古戦場の赤壁と東坡の遊んだ赤壁と、同一でないことは明瞭である。東坡の赤壁は黄州のものであることは、後賦に由つても明瞭であるが、古戦場に就いては、右の外尙異論が多くある。今一々之を詮索するにも及ぶまい。只赤壁といふ處が、古戦場としてよりも、むしろ東坡の此の賦に由つて世に廣く知られてゐるのは、武よりも文の力が偉大であることを承認せねばならない。市川寛齋の詩にも、

孤舟月上水雲長。崖樹秋寒古戰場。一自風流屬坡老。功名不復畫周郎。

とあるが如く、又安積良齋の「題赤壁圖後」といふ文にも、
(前略)——彼周郎錫智力、以精兵三萬、破曹備數十萬之衆。可謂千古奇功矣。而蘇子乃提三寸不律、詠風月於盃酒談笑之間、使百世之下、讀其文、想其人、吟風贊嘆之不已。而善畫者、又摹寫之以傳。則蘇子三寸不律之功、反出于周郎精兵三萬之上矣。文章之盛如此。——(後略)

とあるが如くに、赤壁といへば必ず舟遊の圖にきまつてゐるやうになつた。

此の賦は嚴密に言へば、賦でなくて記である。然し處々押韻してあるが爲めに、賦と稱してゐるまでのことである。

蘇軾。——字は子瞻、東坡がその號である。宋の眉州眉山の人、父洵字は明允、弟轍字は子由、三人共に皆詩文を善くし、且博く史に通じた。世に三蘇と稱する。仁宗の嘉祐二年弟轍と同じく禮部に試みられて第二に登る。又殿試乙科に中り、大理評事簽書、鳳翔府判官に叙せられた。王安石の新法を行ふに及び、其の非を論じて、黄州團練副使に貶せられ、後汝州に移された。哲宗の朝、翰林學士兼侍讀に任じ、爾來諸官に遷りて、徽宗の建中靖國元年(一七六一)六十六歳を以て常州に致した。文忠と諡し、資政殿學士及び太師を贈らる。軾嘗て曰く、「文を作るには行雲流水の如くなるべし」と。初より定質なし。其體は渾渾光芒あり、百代に雄視してゐる。蓋し宋代第一の才子である。著す所、東坡志林、東坡全集、易傳、書傳、論語說等が

ある。

壬戌之秋。七月既望。蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。清風徐來。水波不興。舉酒屬客。誦明月之詩。歌窈窕之章。

訓讀 壬戌の秋、七月既望。蘇子客と舟を泛べて、赤壁の下に遊ぶ。清風徐ろに來り、水波興らず、酒を舉げて客に屬し、明月の詩を誦し、窈窕の章を歌ふ。

語釋 ●壬戌。神宗の元豐五年。●既望。望は十五夜の満月。既は「盡くる」。望が盡きた翌日十六夜のこと。●蘇子。東坡自らいふ。●興客。楊世昌といふ客と共に。●舉酒。酒を杯につぐ。●屬客。客に飲めと勸める。●明月之詩。詩經の陳風月出篇のこと。●窈窕。それは「月出皎兮。佼人僚兮。舒窈糾兮。勞心悄兮」といふのである。●窈窕之章。月出篇の「窈窕兮」の字を窈窕と言つたのである。以上は古來の解釋であるが、若しさうとすれば月出之詩、窈窕之章とすべきである。然るに明月といひ窈窕といふは、必ずしも指定したものではなく、汎く明月に關した古詩を歌つたとするが妥當である。窈窕は「蘭閨の貌」と注して、しとやかにおくゆかしきさまをいふ。

【通釋】 元豐五年壬戌(みづのえいぬ)の秋七月十六日の夜、蘇子が客の楊世昌と共に、舟をうかべて赤壁の下に遊んだ。折しも秋の夜の清風がそよそよと徐かに吹き來つて、涼氣清爽、江水は靜かに流れて波は興らず、實に良い景色であつた。酒を杯に注いで客に勸め、明月に關した詩を吟じたり、ゆかしい面白い歌などを歌つて居た。

【評釋】 此の一段は、月の未だ出ざる以前の情景である。清風あり、水波あり、明月の詩歌を誦して月の上るを待つ風の風情、既に優雅に勝へないものがある。清風と明月とが一篇の骨子であり張本である。

少焉月出於東山之上。徘徊於斗牛之間。白露橫江。水光接天。縱一葦之所如。凌萬頃之茫然。浩浩乎如馮虛御風。而不知其所止。飄飄乎如遺世獨立。羽化而登仙。

訓讀 少焉して月東山の上に出で、斗牛の間に徘徊す。白露江に横はり、水光天に接す。一葦の如く所を縱にして、萬頃の茫然たるを凌ぐ。浩浩乎として虚に馮り風に御して、其の止まる所を知らざるが如く、飄飄乎として世を遺れて獨立し、羽化登仙するが如し。

語釋 ●少焉。しばらく。●斗牛。普通には北斗星と牽牛星と解す。即ち東北の方面。或は二十八宿中の斗星と牛星のことともいふ。其の他異論多くあれど、要するに東坡が自己の知れる二星をあげて其のあたりに月が徘徊したと大略に書いたものと見るがよからう。●横江。沿岸の草露が月に照らされて光るさまの多きをいふ。●一葦。小舟。詩經の河廣篇に「誰謂河廣。一葦杭之」とある。それは一束の葦を水に浮かせて、それに由つて河を渡るの意。轉じて小舟の意となる。●萬頃。一頃は田百畝をいふ。極めて廣きを萬頃といふ。●浩浩乎。廣大なる貌。●馮虚。虚は天空、馮は依る。天空によりかかる。●御風。御は乗る。風に乘る。●飄飄乎。風に物のひるがへるが如く、身體の軽くなつた貌。●羽化。羽が生ずる。●登仙。仙人となつて天上界に上る。

【通釋】 やがて暫くすると、十六夜の月が東山の上から昇つて、斗牛の星のあたりに徘徊して居るが如くに照り輝いてゐる。白露はキラキラと輝いて、廣い楊子江一面に横はつてゐるが如くに見え、水の光が天と連接して、水やら天やら見分けもつかない景色である。小舟の流れ行くがまゝに任かせて、萬頃の茫然として廣き水上を漕ぎ渡る。其の心地は唯、廣く大きくなつて大空に馮りかゝり風に乗つて、其の到り止る所を知らざるが如くである。又ふはりふはりとして身體が軽くなつて、世の中の塵思垢想を全く忘れて了つて、自分獨りが超然として立ち、羽を生じて飛行自在の仙人にでもなつて天へ上るが如くにも思はれた。

【評釋】 此の段は月が東山に昇つた後、小舟の流れ行くまゝに任かせた景情である。「浩々乎」以下は正に今日の飛行機に乗つて飛ぶを形狀したものの如くである。謝疊山云ふ「余嘗中秋泛舟大江。月色水光。與天宇合而爲一。始知此賦之妙」と。

於是飲酒樂甚。扣舷而歌之。歌曰。桂櫂兮蘭槳。擊空明兮泝流光。渺渺兮予懷。望美人兮天一方。客有吹洞簫者。倚歌而和之。其聲嗚嗚然。如慕如泣。如訴。餘音嫋嫋不絕。如縷。舞幽壑之潛蛟。泣孤舟之嫠婦。

是に於て酒を飲みて樂むこと甚し。舷を扣いて之を歌ふ。歌に曰く、「桂の櫂・蘭の槳、空明に擊して流光に泝る。渺渺たり予が懷ひ、美人を天の一方に望む」と。客に洞簫を吹く者あり。歌に倚りて之を和す。其の聲嗚嗚然として、縷を

が如く慕ふが如く、泣くが如く訴ふるが如く、餘音嫋嫋として絶えざること縷の如し。幽壑の潛蛟を舞はしめ、孤舟の嫠婦を泣かしむ。

●扣。叩と同じく「たたく」。●桂櫂兮蘭槳。桂櫂はともに香木。櫂を棹とした書もある。櫂は普通には、「かい」と訓むが「かぢ」とも訓む。棹は普通には「ささ」と訓むが、「かい」とも「かぢ」とも訓む。槳も「かい」「かぢ」なども訓む。前に推すを槳と曰ひ、後に曳くを櫂と曰ふ。●擊空明。擊は「ささす」と訓む。棹槳にて水面を打つをいふ。空明は水清くして底まで見える中に月の影を宿せるをいふ。●泝流光。泝は水に逆つて進むこと。流光は月光の波と與に動くをいふ。●渺渺兮予懷。倒裝語法で、自分の心が遠く廣く、種々の感慨のおこること。●美人。これにも三説ある。楚辭に「眾美人兮南浦」とあるは君主を指したのであるから、之もそれと同じく都に在す天子をさすのが一説。又美德の賢人君子をいふの語であるから、在朝の臣僚をさすのだといふのが一説。又以上の二説の外に、只誰ともなしに景慕してゐる者をさすのだといふ説もある。予は金聖嘆の「美人君恩。此先生眷々不忘朝廷之心也」と曰つたのに從ひて第一説を採りたい。即ち東坡が遺調の身を以て、一日も其の君を忘れざる忠誠を見るに足るとした。●洞簫。二説ある。洞は通であるから簫の底の無いものである。之れ一。洞簫は長さ二尺或は二尺五寸、長短同じからず。表に四孔あり、裏の上に一孔あり云々といふのが一説。後者ならば尺八に類したもの。詳しくは和漢三才圖會樂器部を見よ。●嗚々然。物あはれな細い長く續く音の形容。●縷々。縷々に同じく、たをやかに細く續くさま。●縷。「いとすぢ」と訓じ細い糸の一すぢ。●潛蛟。水底深くに潜んでゐる蛟。蛟は龍の屬。「みづち」と訓む。荀子勸學篇に「伯牙鼓琴而游魚出聽。——又黃帝張雲門成池樂於洞庭之野。魚龍出舞」などあるに本づく。●嫠婦。寡婦に同じい。

【通釋】 是に於て酒を飲みて樂むこと極まりもない。乃ち舷を叩いて歌をうたひ出した。其の歌は、「桂の櫂を操り蘭の槳をさして、底に月影の澄める水上を撃ちながら、月の光りと俱に動く波の上を泝つて行くのである。斯る景物を見るにつけても、種種の感慨があつて来る。さても都に在し

ます天子は此の頃如何して在らせられるやら、雲山萬里の帝都が暮はしく思はれる」といふ意味のものであつた。すると客の中に洞簫を吹く者があつて、早速歌に合せて吹き鳴らした。其の聲は、鳴々然として物哀れな細い悲しい音で、何物をか怨むるが如く慕ひなげくが如く、泣き哀しむが如く、或は不平を訴ふるが如くで、其の消え残る餘音が嫋々として細い糸すぢの如くに絶えない。其の微妙な洞簫の聲には、深い谷底に潜み隠れてゐる蛟龍も出でて舞ひさうであり、小さい一つ舟に乗つてゐる寡婦も之を聞いては泣かずに居ないであらうと思はれた。さても靜かな物さびしい洞簫の音であつた。

【評釋】 酒を飲んで樂むこと甚しいから、歌が出た。歌に由つて客が出た。客に由つて洞簫が出た。洞簫に由つて哀愁が起つた。脈絡貫通、筆路自然にして、歡樂と悲哀との頓旋抑揚、其の妙を極盡してゐる。

蘇子愀然正襟危坐。而問客曰。何爲其然也。客曰。月明星稀。烏鵲南飛。此非曹孟德之詩乎。西望夏口。東望武昌。山川相繆。鬱乎蒼蒼。此非孟德之困於周郎者乎。方其破荊州。下江陵。順流而東也。舳艫千里。旌旗蔽空。酈酒臨江。橫槊賦詩。固一世之雄也。而今安在哉。

訓讀 蘇子愀然として襟を正し危坐して、客に問ひて曰く、「何爲れぞ其れ然るや」と。客曰く、「月明かに星稀にして、烏鵲南に飛ぶとは、此れ曹孟德の詩に非ずや。西のかた夏口を望み、東のかた武昌を望めば、山川相繆ひて、鬱乎として蒼蒼たり。此れ孟德の周郎に困められし者に非ずや。其の荊州を破り、江陵を下り、流に順ひて東するに方つては、舳艫千里、旌旗空を蔽ひ、酒を酈んで江に臨み、槊を横へて詩を賦す。固に一世の雄なり。然るに今安くにか在るや。」

語釋 ●愀然、物悲しくして氣色の變る。●危坐、正しく坐る。●曹孟德、魏の曹操の字、武帝といふ。其の短歌行の中に「月明星稀。烏鵲南飛。繞樹三匝。何枝可レ依」の句がある。此は蜀主劉備の敗れて南方へ逃げたのを讀つたのである。●夏口、今の湖北省漢陽府。●武昌、湖北省武昌府。鄂州ともいふ。●相繆、繆は繆繆する。●周郎、吳の周瑜字は公瑾。年二十四にして建威中郎將となる。吳中の人物と呼んだ。後十年曹操八十萬の水軍を率ゐて吳を伐たんとした時、周瑜三萬の精兵を以て劉備と力を合せて赤壁の下に之を破つた。●酈酒、曹操が劉表の子劉琮を破つて之を占領した。●舳艫、舳は船尾、艫は船首。●酈酒、酒を酌むこと。酈は「したむ」と訓む。●橫槊、槊は一丈八尺もある「任こ」それを傍において。

【通釋】 蘇東坡先生は客の洞簫に感動して、俄かに愀然として氣色を變じ、襟をかき合せ、正坐して客に問うて曰く、「何が故に斯くも物かなしい思ひに浸らせるのか」と。客答へて曰ふには、「月が大空に皎々と輝き渡つて、星の光りが寥々としか見えなない。烏鵲が南の方へ啼いて飛んで行く」と歌つたのは、彼の曹孟德の詩ではないか。西方遙か武昌の方面を眺めやり、東方遠く夏口のあたりを望めば、山と川とが相繆繞して、樹木が鬱々蒼々として見える。此處が彼の曹孟德八十萬の水軍が、吳の周瑜三萬の精兵に散散に攻め立てられて、辛うじて逃げ還つたところではないか。然し曹操が劉琮を荊州に討ち破つて、更に江陵の劉備を追窮し、楊子江の流に順ひて赤壁へ向つた時には、

數多の兵士を乗せた戦艦が舳艫千里も相續いて、樹て列ねた旌旗は太空をも蔽ひかくすの盛んな勢であつた。其の時彼は酒を酌んで江流に臨み、粟を傍に横へて「月明星稀」の詩を賦した。實に彼は武に長じ文に秀でた一世の英雄であつた。然し今其の跡を尋ねて見ても何もない。即ち如何なる英雄も豪傑も、皆生死盛衰の運命は免れないものである。

【評釋】 果然洞簫の響から「何爲其然也」に由つて主客一段の問答を惹起した。以下は客の語り出した前半である。明月之詩を誦した關係から「月明星稀」の追憶が湧いた。其の追憶が曹孟徳の霸業に及んだ。而して孟徳の勢威は「舳艫千里。旌旗蔽空」の隆々たるものがあつたことを稱揚し、更に「而今安在哉」の一轉語で、榮枯盛衰の倏忽なるを示し、後半の人生觀に入るのである。

況吾與子漁樵於江渚之上。侶魚鰕而友麋鹿。駕一葉之扁舟。舉匏樽以相屬。寄蜉蝣於天地。渺滄海之一粟。哀吾生也須臾。羨長江之無窮。挾飛仙以遨遊。抱明月而長終。知不可乎驟得。託遺響於悲風。

訓讀 況んや吾れと子と、江渚の上に漁樵し、魚鰕を侶として麋鹿を友とするをや。一葉の扁舟に駕し、匏樽を舉げて以て相屬し、蜉蝣を天地に寄す。渺たる滄海の一粟なり。吾が生の須臾なるを哀み、長江の窮りなきを羨む。飛仙を挾んで遨遊し、明月を抱いて長へに終へんことは、驟かに得可からざるを知り、遺響を悲風に託す」と。

●漁樵。魚を捕ふるのが漁。草木を取るのを樵といふ。●江渚。大江のほとり。●麋鹿。麋は「となくい」。鹿の屬で形

は水牛に似てゐる。●匏樽。匏は瓠と同じく「ふくべ」。二字にて酒樽の意。●相屬。互に盃をやりとりする。●蜉蝣。「かげろふ」。朝に生れて夕に死するといふ小蟲。●渺滄海。渺茫として際涯のない青海原。●遨遊。遊も「あそぶ」。●遺響。洞簫の餘音。悲哀のこもつた響。●悲風。秋の物寂しい風。

【通釋】 まして吾と君との如きは、江水のほとりに佗住居をして、或は漁夫の真似して魚や鰕などを伴侶とし、或時は樵夫の如くに山に入つて麋鹿を友として遊んで見たり、又時には斯うして木の葉のやうな軽い小舟に乗つて江水に浮べ、酒樽を傾けて飲みかはすやうなこともある。然し考へて見れば、朝に生れて夕に死ぬる「かげろふ」の如き短かき生命を、廣大無邊にして永遠無窮の天地の間に寄托して居るのである。是れ恰かも渺茫たる青海原に浮べた一粒の米粟の如きものであるではないか。實に吾等の生命の餘りにも短かいことを哀しみ傷むとともに、滔々たる長江の永世無窮に流れてゐることを羨ましく思はれる。と言つた所で、彼の飛行自在の通力を有する仙人を相携へて遊び廻ることや、又永久に光り輝いてゐる萬古不滅の明月を抱きかへて、長へに生きることが、吾等人間にては到底驟かに出來得ないことを知つたから、吾が哀しい思ひを吹き込んで其の餘響を悲しい秋風に託して見たのである」と。

【評釋】 「況吾與子」は、曹孟徳の勢威に比していふので、「一葉之扁舟」は「舳艫千里」に映照し、「滄海之一粟」は「一世之雄」に對比するもので、句句相承げ相反照して、精彩愈々輝くものであ

る。長江と明月とは又次の伏線である。

前段と合せて、東坡が胸中の人生觀を客に言はせたのである。

蘇子曰。客亦知夫水與月乎。逝者如斯。而未嘗往也。盈虛者如彼。而卒莫消長也。蓋將自其變者而觀之。則天地曾不能以一瞬。自其不變者而觀之。則物與我皆無盡也。而又何羨乎。且夫天地之間。物各有主。苟非吾之所有。雖一毫而莫取。惟江上之清風。與山間之明月。耳得之而爲聲。目遇之而成色。取之無禁。用之不竭。是造物者之無盡藏也。而吾與子之所共適。

訓讀 蘇子曰く、「客も亦夫の水と月とを知れるか、逝く者は斯の如くにして、而かも未だ嘗て往かざるなり。盈虚する者は彼が如くにして、而かも卒に消滅すること莫きなり。蓋し將た其の變ずる者よりして之を觀れば、則ち天地も曾て以て一瞬なる能はず。其の變ぜざる者よりして之を觀れば、則ち物と我と皆盡くる無きなり。而るを又何ぞ羨まんや。且つ夫れ天地の間、物各々主あり。苟も吾が有する所に非ずんば、一毫と雖も取ること莫けん。惟だ江上の清風と、山間の明月とは、耳之を得て聲を爲し、目之に遇うて色を成す。之を取るも禁ずる無く、之を用ふるも竭きず。是れ造物者の無盡藏なり。而して吾と子との共に適する所なり」と。

●逝者。水を謂ふ。論語子罕篇に、「子在川上。曰。逝者如斯夫」とあるに本づく。●盈虚者。盈ちたり虧けたりする月。●消長。消滅生長。●自其變者觀之。變化するといふ立場から之を觀察すれば。莊子德充符篇に、「自其異者而詆之。肝膽楚越也。自其同者而詆之。萬物皆一也」とあるに本づいた句法。●一毫。髮の毛一すぢ。●無盡藏。取れども盡くることなき

藏。佛語。

【通釋】 蘇東坡先生、客の語る所を聽いて客に曰ふには、君も亦かの水と月とのことを知つてゐますか、流れ逝く水は斯の如く日々夜々に流れ流れて已まないけれども、而かも其の水が未だ嘗て流れ往いて絶えたといふことはない。毎月必ず盈ちたり缺けたりする月は、彼のやうに盈虧はしてゐるが、而かも卒に消滅したり生長したりすることはなく、常に同一不變の光輝を放つてゐるのである。蓋し物は其の觀察のし方でどのやうにも見られたり考へられたりする。即ち變化するといふ立場から觀れば、此の天地間のもの凡てが一瞬間も同一の状態にあるものではない。又其の變化せざるものといふ風に觀察すれば、萬物凡てが常住不滅で盡くることもないのだから、吾も人も亦不死不生不滅不朽の者と見られるのである。果して然らば、彼の長江の無窮を何ぞ羨む必要があらうか。少しも吾生の須臾を悲むことなどいらないではないか。且つそれ天地の間に存在する一切の物には、皆それぞれの所有主があつて、かりそめにも自己の所有でないものは、一毫一絲の微細な物でも随意に取るわけには行かない。然し惟だ江上を吹き渡る清風と、山間に照り昇る明月とは、耳に入つては優しい音楽の聲と聞き、目に映じては美しい色彩となつて見える。これは幾ら取つても眺めても、所有主があるのでないから誰も禁ずる者もなく、又之をいくら用ひ使つても竭きはてることはない。是れは天地造物の神が吾人に賜與する所の無盡藏であつて實に有りがたいものである。

而して此の無盡藏のものこそは、吾と君との共に心に快適とするものである。

【評釋】 客の言つた長江明月を受けて、「客亦知夫水與月乎」といひ、「逝者」と「盈虛者」とに由つて、常住不滅、不生不死の幽玄なる哲理を説き、「又何羨乎」を以て客の「羨長江之無窮」を駁したのである。而して人生の樂むべきは自然の清風明月に在るを叙して、遙に冒頭の「清風徐來」等に應じ、造物の無盡藏に感激して之を愉しみ之を喜び、「吾與子之所共適」と收束して、前段の客の哀愁を清風にて一掃し、茲に本來真如の面目を發露し來つたのである。

差別の人生を超越し、生死の境涯を解脱して、自然の風月水光に無限の美と快とを會得證悟した絶世の大詩人蘇東坡の襟懷、洵に欽するに足るではないか。

客喜而笑。洗盞更酌。肴核既盡。杯盤狼藉。相與枕藉乎舟中。不知東方之既白。

訓讀 客喜んで笑ひ、盞を洗ひて更に酌む。肴核既に盡きて杯盤狼藉たり。相與に舟中に枕藉して、東方の既に白るを知らず。

語釋 ●肴核。魚肉が肴。果實が核。●狼藉。狼は草を藉きて臥す。去れば則ち其あとが穢亂になること。●枕藉。相重なりて寝ころぶ有様。

【通釋】 客は之を聽いて大いに悟る所があつたと見えて、喜び笑つた。さうして更に又盞を洗ひ清

めて酒を酌み交はした。肴も果物も既に盡き果てて、杯や鉢などがそこらあたりに散亂してゐる。共に酔ひ疲れて相與に枕し合つて舟中に寝ころんだまま、東の空がほの白く明け渡るのも知らなかつた。

【評釋】 「客喜而笑」の一句。以上の問答を收めたので、迦葉尊者の拈華に對する微笑とでも謂ひたい。「不知東方之既白」は、陶醉酣樂の極致である。

謝疊山の評に曰く、此の賦は莊騷を學びて一句の相似たるもの無し。超然の才と絶倫の識あるに非ずんば爲す能はざるなり。瀟洒神奇、塵を出で俗を絶ち、雲に乗じ風に御して九霄の上に立ち、六合を俯仰するが如し。何物も茫々として、惟に齒牙に掛けざるのみに非ず、亦其の靈臺丹府に入るに足らざるなりと。

茅鹿門の評に曰く、予嘗て謂へらく、東坡は文章の儼なりと。此の二賦を讀んで、人をして遺世の想あらしむと。

八、後赤壁賦

蘇

軾

前篇は、客を借りて、閑玄なる人生の哲理を問答した體であつたが、此の篇は、單に景を寫し事を叙するに過ぎないの

である。而かも其の妙は前篇に譲らない。再三反讀して其の眞諦を味得すべきである。

作者 七、「前赤壁賦」に在り。

是歲十月之望。步自雪堂。將歸于臨臯。二客從予。過黃泥坂。霜露既降。木葉盡脫。人影在地。仰見明月。顧而樂之。行歌相答。

訓讀 是歲十月の望。雪堂より歩いて、將に臨臯に歸らんとす。二客予に從ひて黃泥の坂を過ぐ。霜露既に降り、木葉盡く脱す。人影地に在り。仰いで明月を見、顧みて之を樂み、行々歌ひ相答ふ。

語釋 ●是歲。前の元豐五年壬戌のこと。●雪堂。黃州の東坡に築いて居た堂。即ち別莊ともいふべきもの。大雪の中に築いたので雪堂と名づけたのである。●臨臯。亭名。東坡始め黃州に至りて定惠院に寓し、後に臨臯亭に遷る。●二客。郭遵と古耕道の二人なりといふ。●黃泥。坂名。雪堂と臨臯亭との間に在るもの。

【通釋】 是歳の十月十五日に、東坡の雪堂から歩行して、臨臯に歸らんとした。郭遵と古耕道との二客が、予に從ひて黃泥の坂道を通り過ぎた。時に初冬寒涼の候で、霜露が既に降り下り、木の葉も盡く脱落してゐる。足もとを見ると人影が地上に描いたやうであるから、さてはと仰ぎ見れば十五夜の満月が東の空に昇つてゐる。ふりかへつて友と語り、歩きながら歌を歌ひ合つて、徐かに家へ還へらうとした。

【評釋】 「霜露既降。木葉盡脫。人影在地。仰見明月」の四句は、實に初冬の晩景を曲盡したもので、一幅の畫圖を見るが如くである。

已而歎曰。有客無酒。有酒無肴。月白風清。如此良夜何。客曰。今者薄暮。舉網得魚。巨口細鱗。狀如松江之鱸。顧安所得酒乎。歸而謀諸婦。婦曰。我有斗酒。藏之久矣。以待子不時之需。

訓讀 已にして歎じて曰く、「客あれども酒無し。酒ありとも肴無からん。月白く風清し。此の良夜を如何せん」と。客曰く、「今者薄暮に網を擧げて魚を得たり。巨口細鱗。狀如松江の鱸に似たり。顧ふに安にか酒を得る所あらんか」と。歸りて諸を謀る。婦曰く、「我に斗酒あり、之を藏すること久し。以て子が不時の需を待てり」と。

語釋 ●如此良夜何。此の如き良き夜を空しく過ごすことはどうして出来ようか出来まい。●今者。今日。●巨口細鱗。大口の細かい鱗の魚。即ち鱸(すずき)のこと。●松江之鱸。松江は今の江蘇省松江府に在り。吳淞江ともいふ。鱸の名産地。正字通に「鱸、巨口細鱗、似鱖而長數寸、有四鰓。俗呼三四鰓魚。以二七八月二出。吳江、松江最盛。天下之鱸皆二鰓。」とある。松江の鱸を天下の美味として稱讚すること、諸書に在り。●斗酒。一斗ばかりの酒、宋代の斗は我が邦の約四升に當る。量の名稱は同じでも時代によつて容量が異なる。●不時之需。時ならぬ要求。不意の入用。

【通釋】 やがて歎息して曰ふには、「良いお客があつたけれども酒が無い。よしや酒があつても肴があるまい。月はさやかに澄み渡つて風は又清く吹き渡つてゐる。此の良夜を如何にして徒に過されようか」と。二人の客は、「今日の夕方に網を引きあげて魚を得た。それは巨口細鱗のもので、形狀が松江の鱸に似てゐる。之があれば肴はそれでよいから、何處かに酒のある處があるまいか」と曰つた。それではと早速臨臯の家に辿り着いて、之を妻に相談して見た。すると妻の曰ふには、「私に

一斗ばかりの酒があります。久しくしまつてあるのだが、あなたの不時なお需めを待つて居たのです」と。

【評釋】「顧而樂之。行歌相答」の歡樂が一轉して歎聲となつた。それは酒と肴との有無である。何等の飄逸であらう。「歸而謀諸婦」。何等の情緒であらう。果せるかな「待子不時之需」とあつた。此の文豪詩宗にして此の賢婦ありと言ひたい。

於是攜酒與魚復遊於赤壁之下。江流有聲。斷岸千尺。山高月小。水落石出。會日月之幾何。而江山不可復識矣。予乃攝衣而上。履巉岩。披蒙茸。踞虎豹。登虬龍。攀栖鶴之危巢。俯馮夷之幽宮。蓋二客不能從焉。劃然長嘯。艸木震動。山鳴谷應。風起水涌。予悄然而悲。肅然而恐。凜乎其不可留也。反而登舟。放乎中流。聽其所止而休焉。

訓讀 是に於て酒と魚とを携へて、復た赤壁の下に遊ぶ。江流聲あり。斷岸千尺、山高月小に、水落ちて石出づ。會て日月の幾何ぞや。而して江山復た識る可からず。予乃ち衣を攝げて上り、巉巖を履み、蒙茸を披き、虎豹に踞し、虬龍に登り、栖鶴の危巢を攀ぢ、馮夷の幽宮を俯す。蓋し二客は從ふこと能はず。劃然として長嘯すれば、草木震動し、山鳴り谷應へ、風起り水涌く。予も亦悄然として悲み、肅然として恐れ、凜乎として其れ留る可からざるなり。反つて舟に登り、中流に放ちて、其の止まる所に聽せて休む。

●水落。揚子江の水量が冬季になると減少するをいふ。●會日月之幾何。前に遊んだ時と月日の経過が幾何であらうか、僅か三ヶ月に過ぎないのに。●攝衣。攝は「かかげる」衣の裳をひきあげる。●巉巖。けはしい角張つた岩。●蒙茸。草木の繁茂せるをいふ。●虎豹。虎や豹の形をした石。●虬龍。古木の蟠屈して虬龍に似たるをいふ。虬は龍の子で角があるといふ。●栖鶴。鶴は「くまたか」は「やぶさ」。鷹の類。栖は棲む。●馮夷。水神、河伯。●幽宮。幽深なる水神の居る所。●劃然。刀を以て物をたち截るやうな音。●長嘯。長い音調で聲を出すこと。嘯は「うそぶく」。●悄然。悄は「うれへる」。憂愁の貌。●肅然。畏れ敬む貌。●凜乎。ぞつとする。身體が引きしまるさま。●反。返つて。●聽。任せる。●休。休止する。とどまる。

【通釋】是に於て酒も肴も用意が出来たから、之を携へて復び赤壁の下へ遊びに行つた。行き着いて見ると、江水滔々と流れて聲がある。削り立てたやうな絶壁は高く千尺も聳えてゐる。兩岸に並んでゐる山は愈々高く、月も亦澄んで小さく見える。大江の水量も既に減じて、今まで見えなかつた岩石があらはれ出てゐる。さても此の前に遊びに来た時と日月が幾何経過したであらうか、僅かに三ヶ月に過ぎないのに、江山の面目は一變して復び前の景色とは見分けもつかない程である。予はそこで衣の裾を引き上げて岸へ上つて見た。角立つたけはしい岩石を履み、茂れる草木を押しひらいて、虎豹の姿をした巨石の上に腰を下し、或は虬龍の如き古木に登つて見たり、或は鶴の棲む高い危い巢のある處まで攀ぢ登つたり、或は又水神の住む河底の深い宮室をも俯向いて見た。しかし二人の客は予に従つて登ることは出来なかつた。そこで自分獨りで寂しく感じたから、聲を張り上げて、帛でも裂くやうに高く長く嘯いて見た。ところが夜の静寂を破り四邊の反響が大きいので、

草木は震動し、山は鳴り響き谷は驚き應へて、風が起り水も涌き立つばかりであつた。自分自身で物悲しくなつて来て、肅然として恐怖の念さへ起り、ぞつとして来て久しく其處に留まることが出来なくなつた。そこで引き返して舟に登り、江の中流へ漕ぎ出し、水の流れ行くのに任せて、其の止まる所に於て休んだ。

【評釋】 酒と肴とを得て復た遊ぶの快適言はずもがなである。「江流有聲。斷岸千尺。山高月小。水落石出」の四句も、古來嘖々として稱讃するの名句である。「予乃攝衣而上」の以下は、前篇の「凌萬頃之茫然」に反して、實地探險的の行動であつて、舟游の事とも思へない書きぶりである。「劃然長嘯」の一句、眞に是れ意想の表に出でたるの行動。獨り夜陰の靜寂を破つて萬籟を驚かすのみではなく、千歳の讀書子をして亦肅然凜然たらしむるものである。

時夜將半。四顧寂寥。適有孤鶴橫江東來。翅如車輪。玄裳縞衣。憂然長鳴。掠予舟而西也。須臾客去。予亦就睡。夢一道士。羽衣翩跹。過臨臯之下。揖予而言曰。赤壁之遊樂乎。問其姓名。俛而不答。嗚呼噫嘻。我知之矣。疇昔之夜。飛鳴而過我者。非子也邪。道士顧笑。予亦驚悟。開戶視之。不見其處。

【訓讀】 時に夜將に半ばならんとす。四顧寂寥たり。適に孤鶴あり、江を横ぎりて東より來る。翅車輪の如し。玄裳縞衣、憂然

として長鳴し、予が舟を掠めて西す。須臾にして客去り、予も亦睡に就く。一道士を夢む。羽衣翩跹として、臨臯の下を過ぎ、予に揖して言ひて曰く、「赤壁の遊樂しきか」と。其の姓名を問へば、俛して答へず。「嗚呼噫嘻、我れ之を知れり。嗚昔の夜、飛鳴して我を過ぎし者は、子に非ずや」と。道士顧みて笑ふ。予も亦驚き悟む。戸を開きて之を視れば、其の處を見ず。

●四顧。四方、四邊。●寂寥。寂寞寥闊。●玄裳。縞衣。玄は黒。縞は白。黒い裳裾で白い上衣。鶴の尾羽の黒いのと體毛の白いのとをいふ。●憂然。憂は玉の鳴る響、或は物の轆る聲。此處は鶴の鳴く形容。●一道士。方士ともいひ、仙術を修むる者。●翩跹。ひらひらと高くから舞ひ下る。●揖。軽い敬禮をする。會釋する。●俛。首を俯す。俛焉は「べんえん」と訓むので。勉に同じい。●嗚呼噫嘻。重ねていふだけで深い意味もない。蜀人、物を見て驚異すれば輒ち噫嘻といふ。●嗚昔。昨夜に同じい。●驚悟。驚いて目がさめ気がついた。

【通釋】 斯く遊びまはる中に、時は次第に移つて、夜も將に半ばにならうとした。見渡せば四邊唯々寂寥として極めて靜かであつた。丁度その時一羽の鶴があつて、大江を横ぎつて東から飛んで來た。その翅が車輪の如き大さで、黒い尾羽と白い羽とがはつきり見えて、一聲高く憂然と鳴きながら、予が舟の上を掠め通つて西へ飛び去つた。須臾にして客も歸り去り、予も亦家に歸つて睡に就いた。そして夢の中に一道士が現れ來つた。羽衣を着けてひらひらと舞ひ下り、臨臯のあたりを過ぎ通つて、予に會釋して「あの赤壁の遊びは樂しかつたのか」と尋ねた。予は「あなたほどなたですか、姓名を聞かせて下さい」と言つたら、道士はうつ向いて答へなかつた。そこで一寸氣がついて「ああ、——私はわかりました。昨夜一聲長く鳴いて、私どもの舟の上を通り過ぎなかつたのは、あなたでありませんか」と言つたら、道士も振りかへつてにつこり笑つた。その途端に予も亦驚い

て目がさめた。若しや誰かがほんとうに來たのではないかと思つて、戸を推し開けて見たけれども、何處へ行つたのか影も姿も見えなかつた。

【評釋】 楊子江上の夜は更けて、四顧寂寥の際、孤鶴の憂然長鳴するは、正に是れ晴天の露靈にも似たるのこと。更に夢中に道士を見、「赤壁之遊樂乎」と言はれ、「問其姓名」と言ふ一段の間答を以て、恍惚縹緲の神想鬼思を抒べたるは、文章の儼ならでは能はざるの妙技である。

呂東萊が、此の賦の結處は、韓文公が石鼎の序の彌明の意を用ひ、鶴を指して道士と爲せしは、亦暗に高道傳の青城山の徐佐卿が鶴に化せし事を使つたのであると云つてゐるから、多少の依據があるとしても、全く換骨脱胎したもので、これを前篇に比して亦特殊の高韻幽趣の存することを見るに足るのである。

虞邵菴の評に曰く、「陸士衡云ふ、「賦は物を體すること瀏亮なるべし」と。坡公の前赤壁の賦は已に其の妙を曲盡せり。後賦尤も物を體すること精し。「山高く月小に水落ちて石出づ」の如きは、皆天然の句法にして、末に道士鶴に化せしの事を用ひしは、尤も人の意表に出づ」と。

九、憎蒼蠅賦

歐陽修

宋の英宗の當時、姦佞の小人、朝廷に跳梁跋扈して、威權を弄し私欲を逞うし、賢人君子を讒誣して罪に陥る。歐陽公當時六十歳にして京師に在り。時勢を慨して此の一篇を作る。即ち蠅は微小な蟲ではあるが、物を害することが至大である。恰かも姦邪の佞人が、君徳を傷ひ賢臣を陥れ、善を惡とし、惡を善とすること、蠅の物を腐敗せしめて、黒を白とし白を黒と變ぜしむるが如くに比したので、詩經の青蠅篇などに倣つた比興の體である。叙述頗る詳審委悉、紆餘曲折を盡してゐる。

作者 六、「秋聲賦」に在り。

蒼蠅蒼蠅。吾嗟爾之爲生。既無蜂蠆之毒尾。又無蚊蠃利觜。幸不爲人之畏。胡不爲人之喜。爾形至眇。爾欲易盈。盃孟殘瀝。砧几餘腥。所希秒忽。過則難勝。苦何求而不足。乃終日而營營。逐氣尋香。無處不到。頃刻而集。誰相告報。其在物也雖微。其爲害也至要。

訓讀 蒼蠅蒼蠅。吾れ爾の生たることを嗟く。既に蜂蠆の毒尾無く、又蚊蠃の利觜無し。幸に人の爲めに畏れられず。胡ぞ人の爲めに喜ばれざる。爾が形は至眇にして、爾が欲は易ち易し。盃孟の殘瀝、砧几の餘腥、希ふ所は秒忽にして、過ぐれば則ち勝へ難し。何を求めてか足らざるを苦み、乃ち終日營營たるや。氣を逐ひ香を尋ねて、處として到らざる無く、頃刻にして集まる。誰れか相告報する。其の物に在るや微なりと雖も、其の害を爲すや至要なり。

語釋 ●蜂蠆。「はち」と「さそり」。共に毒尾にて人を蝨す。●蚊蠃。「か」と「あぶ」。●盃孟。盃は「さかづき」孟は飯を入れる器。●砧几。肉を載せる臺。「まないた」の類。●秒忽。秒は禾の芒。忽は蜘蛛の網の絲。極めて微細なること。●營營。詩經小雅青蠅篇に、「營營青蠅。止于樊」にあるに本づく。營營は往來の貌。即ちぶんぶんと飛び廻るさま。

【通釋】 蒼蠅よ蒼蠅よ。吾れ汝が生れ付を嗟歎せずには居られない。汝には蜂や「さそり」の如き

毒液を出す尾もなく、又蚊や蛇の如き鋭い嘴も持たない。故に幸に人には畏れられない。然しもう一步進んで人の爲に喜ばれるやうになぜならないのか。汝が形體は至つて眇小で、汝の欲望は直に盈ち易い。酒盃飯盃の残れる汁や雫を嘗め、「まないた」の上に残れる腥き臭を嗅ぎ、嚮望する所は極めて僅少で満足できる。一寸量が過ぎると則ちもう食べられない。然るに何物を要求して其の不足に苦み、乃ち終日營營として飛び廻るのであるか。物の香氣を逐ひ尋ねて、到らざる處もなく、頃刻にして集合する。誰れが其のやうに相告げ知らせるのか、怪しからぬ次第であるぞ。汝が物に止まり付いて居ることは微小ではあるが、其の害毒を爲すことは至つて大である。

【評釋】「蒼蠅蒼蠅」と重ねて呼びかける所に、深く憎むの意が含んでゐる。蜂蟻蚊蛇に比して、人に畏れられずと言ふ所、及び「無處不到。頃刻而集。誰相告報」などの句は、最も姦佞邪智の者を狀し得て妙である。「其在物也雖微。其爲害也至要」は「不爲人之畏」に對して面白い照應である。

若乃華棧廣廈。珍簟方牀。炎風之燠。夏日之長。神昏氣蹙。流汗成漿。委四肢而莫舉。眊兩目其茫洋。惟高枕之一覺。冀煩歎之暫忘。念於爾而何負。乃於吾之見殃。尋頭撲面。入袖穿裳。或集眉端。或沿眼眶。目欲瞑而復警。臂已痺而猶攘。於此之時。孔子何由見周公於髣髴。莊生安得與蝴蝶而飛揚。徒使

蒼頭丫髻。巨扇揮颺。或垂頭而腕脫。或立寐而顛僵。此其爲害一也。

【訓讀】若し乃ち華棧廣廈、珍簟方牀、炎風の燠き、夏日の長き、神昏く氣蹙まり、流汗漿を成す。四肢を委して擧ぐることを莫く、兩目を眊まして其れ茫洋たり。惟だ枕を高うして一覺す。冀くは煩歎の暫くも忘れんことを。念ふに爾に於て何をか負けた警め、臂已に痺れて猶攘ぐ。此の時に於て、孔子も何に由つて周公を髣髴に見ん。莊生も安んぞ蝴蝶と飛揚するを得んや。徒に蒼頭丫髻をして、巨扇もて揮颺せしむ。或は頭を垂れて腕脱し、或は立るに寐ねて顛僵す。此れ其の害を爲すの一なり。

●華棧。華麗に彩色した棧。●廣廈。廣い大きな家屋。●珍簟。草は竹の筵。珍は美しいこと。●方牀。四角なる影臺。●委。音「あう」。甚だ熱し。音「いく」は「あたたか」。●委。委に通じて「しほれる」。●「なへる」。●眊。音「ばう」。くらむ。●茫洋。「ぼんやり」する。●煩歎。歎は熱氣。うるさく堪へ難い暑氣。●眼眶。眶は「まぶた」。●攘。「はらふ」。袖をまくる。●孔子。論語述而篇に「子曰。其矣吾衰也。久矣。吾不復夢見周公」とある。●莊生。名は周。莊子齊物論に「夢爲胡蝶栩栩然。胡蝶不知也。俄然覺則蘆々然周也」とあるに由る。●蒼頭。奴僕をいふ。●丫髻。下婢。●揮颺。ふるひあふぐ。●顛僵。ころがり倒れる。

【通釋】若し華棧を飾つた廣い家屋の中に、美しい竹筵を敷き詰め、四角な影臺を設けても、暑い夏の炎風がいやが上にもあつく、燠くが如き日のだらだらと長い時には、精神も昏んで物思ふ力もなく、氣もつまつてうるさく、流れる汗は漿液の如くに出る。手足は委えて擧ぐるに難く、兩眼はくらんで茫洋して了ふ。此の時唯だ枕を高くして一睡して覺めるまで、堪へ難い暑さも暫く忘れようとするのである。然るに、吾れは汝に對して何の負くこともしないのに、汝は吾れに對して殃害

を興へて苦しめる。即ち頭を尋ね廻つたり顔面を撲つたり、袖の中にも入り裳裾の下へも潜り込む。或は眉毛のさきを集り、或はまぶたの邊に這ひ廻る。此の時いくら目をつぶつて眠らうとしても復た驚きさめる。臂はもう疲れ弱つても猶追ひ拂はうとしてゐる。此の場合に、孔子もどうして周公を夢の中に髣髴と見ることが出来よう。又莊周の如きもどうして楽しい夢を夢見て胡蝶となつて飛び揚がることが出来よう。只だむやみに下男下女どもをして巨大な團扇を扇いであふがせるより仕方がない。しかし蠅は追ひ拂つても直ぐに集り来るから、終には下男下女どもも氣負けして、或は頭を垂れ腕も脱けるやうになり、或は立ろに睡くなつてころがり倒れることもある。此れ其の汝が害を爲すことの一である。

【評釋】 盛夏苦熱の際に於て、午睡の快夢を結ばんとするも、蒼蠅の集り來つて苦しめるの状を寫したので、微に入り細に亘り、能く其の實況を穿ちてゐる。孔子・莊周の夢、用ひ得て至妙といふべきである。

又如峻宇高堂。嘉賓上客。沽酒市脯。鋪筵設席。聊娛一日之餘閑。奈爾衆多之莫敵。或集器皿。或屯几格。或醉醇酎。因之投溺。或投熱羹。遂喪其魄。諒雖死而不悔。亦可戒夫貪得。尤忌赤頭。號爲景迹。一有霑汗。人皆不食。奈何引

類呼朋。搖頭鼓翼。聚散倏忽。往來絡繹。方其賓主獻酬。衣冠儼飾。使吾揮手頓足。改容失色。於此之時。王衍何暇於清談。賈誼堪爲之太息。此其爲害一也。

訓讀 又峻宇高堂。嘉賓上客あるが如き、酒を沽ひ脯を市ひ、筵を鋪き席を設け、聊か一日の餘閑を娛まんすれば、爾が衆多の敵莫きを奈せん、或は器皿に集り、或は几格に屯る。或は醇酎に酔ひて、之に因つて投溺す。或は熱羹に投じて、遂に其の魄を喪ふ。諒に死すと雖も悔いず。亦夫の得るを食む可し。尤も赤頭を忌む。號して景迹と爲す。一たび霑汗するあれば、人皆食はず。奈何ぞ類を引き朋を呼び、頭を揺し翼を鼓ち、聚散倏忽として往來絡繹たる。其の賓主獻酬し、衣冠儼飾するに方つて、吾をして手を揮ひ足を頓て、容を改め色を失はしむ。此の時に於て、王衍も何ぞ清談に暇あらん。賈誼も之が爲めに太息するに堪へたり。此れ其の害を爲すの二なり。

●峻宇。たかき屋宇。●脯。乾した肉。●几格。狙や膳棚。●醇酎。醇は酒の濃い良い酒。酎は新酒。●諒。まことに。●貪得。班固の書いた難莊といふものに、「青蠅嗜三肉汁而忘三溺死。衆人貪三世利而陷三罪過。」とある。●赤頭。頭の赤い蠅。身は青くて能く物を敗るといふ。●倏忽。二字共に「たちまち」。疾きをいふ。●頓足。足をそと。●獻酬。獻は主人より賓客に盃をたてまつる。酬は客より主人に盃をかへす。●儼飾。いかめしく飾る。●玉柄の麈尾を捉ばだてる。足ずりする。●王衍。晋の人。字は夷甫。神情明秀、風姿詳雅、惟だ老莊を談じて事と爲し、手と色を同じうすと晋書に在る。麈尾とは拂子の如きもの。詳しくは「蒙求」に在る。●賈誼。「弔屈原」を見よ。賈誼が嘗て上書したる中に、「可爲痛哭二者三。可爲長太息者六」とあるをいふ。

【通釋】 又立派なる家の座敷に於て、尊い賓客があつて、美酒を買ひ肉類を求め、美しき敷物を布

き、座席を設け作りて、聊か一日の餘閑を娛しみ遊ばうとする場合にも、汝は多勢集り來るので、之を防ぐことの出来ないには困りはてる。或は皿や鉢などの器物に集り、或は粗板や膳棚などにも集りとまる。或は醇酎を飲んで酔ひ、遂には中へ落ちて溺死する。或は熱い羹の中に陥つて遂に其の生命を喪ふ。誠に汝は死んでも後悔しない。恰も是れ亦かの食欲の爲めに罪禍に罹るものを戒むるに足るのである。蠅の中でも頭の赤い景迹といふやつが特別に嫌なのである。此の赤頭奴が一たび食物の上に止つて汚すことがあれば、何人も之を食はない。どうして汝等は同類を引き寄せ朋友を呼び集めて、頭をゆりうごかし、翼で羽ばたきををし、聚つたり散つたりが極めて速かで、往來することが絡繹として續くのであるか。恰かも其の賓客と主人とが盃を献酬して、禮儀も正しく衣冠をいかめしく着飾つて居る時に方り、汝が集り來るが爲めに、吾をして手を揮ひて汝を逐ひ拂ひ、又足をそば立てて、容儀を亂し顔色を失はすやうな恥をかかせる。斯る時に於ては、彼の王衍でも清談に耽ける暇があるまいし、賈誼も之が爲めに愈々長太息をするであらう。此れ汝の害毒を爲すことの二である。

【評釋】 峻宇高堂に於て、嘉賓貴客を饗し、一日の清閑を娛まんが爲めに宴飲せんとするに際し、蒼蠅の爲めに興を殺き禮を失ふの狀を叙したので、之れ亦委曲詳備、前節に異る所がない。王衍・賈誼は前節の孔子と莊周とに對比したので、清談と長太息とも亦適切である。

又如醢醢之品。醬醬之制。及時月而收藏。謹餅罌之固濟。乃衆力而攻鑽。極百端窺覬。至於大臧肥牲。嘉穀美味。蓋藏稍露於罅隙。守者或時而假寐。纔少怠於防嚴。已輒遺其種類。莫不養息蕃滋。淋漓敗壞。使親朋卒至索爾。以無歡。臧獲懷憂。因之而得罪。此其爲害者三也。

【訓讀】 又醢醢の品、醬醬の制の如き、時月に及んで收藏し、餅罌の固濟を謹む。乃ち衆力もて攻鑽し、百端を極めて窺覬す。大臧肥牲、嘉穀美味に至つては、蓋藏すれども稍々罅隙より露はれ、守る者或は時として假寐し、纔に少しく防嚴に怠れば、已に輒ち其の種類を遺して、養息蕃滋せざるは莫く、淋漓敗壞し、親朋をして卒に索爾として以て歡ぶこと無きに至らしむ。臧獲憂を懷き、之に因つて罪を得。此れ其の害を爲すの三なり。

【語釋】 ●醢醢。醢は酸にて「す」。醢は肉醬にて「ししびしほ」。●品。類に同じ。●醬醬。醬は味噌の類。罌は肉と骨とを切りまぜて醬に漬けたもの。●餅罌。瓶と「もたひ」。●固濟。固く密封する。●攻鑽。攻めて穴をあける。●極百端。いろいろの方法を用ひて。●大臧。大きな肉のきれ。●肥牲。うまさうな肉。●蓋藏。ふたをしてしまつておく。●蕃滋。蕃殖して多くなる。●淋漓。肉などの腐敗して汁の出ること。●索爾。素然に同じく、無くてさびしいこと。●臧獲。下男下女。奴婢。

【通釋】 又酢の物や肉醬の類、或は味噌類や肉醢などを製する時など、適當の時期まで收め藏して、其の容れ物の瓶や罌を固く密封しておくのに、乃ち汝等は衆多の力で攻め破り、種種の方法を用ひ盡して、少しの隙間でも無いかと窺ひのぞく。大きな肉切や肥えた肉や、又よい肴のうまい物に至つては、其の蓋の仕方がわるくて、稍々其のすきまから露れ出ることがあつたり、其れを守る者が或

は時によつて假寐して、少しく防禦を嚴にすることを怠るならば、汝等は直ちに其の上に卵を産みつけるから、忽ち蛆蟲が生育繁殖して、其の品物が皆腐敗して食べられなくなる。親戚や朋友などが來訪した時に取り出して見れば、卒に腐敗してゐるので索然として失望せしめ、何の歡びも無いやうにする。其の結果は奴婢が憂ひを懷いて之に因つて罪を得るに至ることもある。此れ其の害毒を爲すことの三である。

【評釋】 蒼蠅が食料品に集りたかつて、腐敗せしむるの害毒を示して、小人姦者の爲さざる無く到らざる無きに喩へたもの、其の害毒愈々深きを見るに足る。

是皆大者。餘悉難名。嗚呼。止棘之詩。垂之六經。於此見詩人之博物比興之爲精。宜乎以爾刺讒人之亂。誠可嫉而可憎。

【訓讀】 是れ皆大なる者なり。餘は悉く名づけ難し。嗚呼。止棘の詩、之を六經に垂る。此に於て詩人の博物比興の精たるを見る。宜なるかな、爾を以て讒人の亂を刺れること。誠に嫉む可くして憎む可し。

【語釋】 止棘之詩。詩經小雅青蠅篇に、「營營たる青蠅、棘に止まる。讒人極りなし。交々四國を亂る」とある。之はもと周の大夫が周王の淫虐無道を諷つた詩である。●六經。詩經・書經・易經・禮記・春秋の五經に樂記を加へたもの。●比興。此は比喩で他物を借りて其の意義を顯はすこと、興は他物を借りて自己の情思を抒べること。比・興・賦・風・雅・頌は之を詩の六義といふ。

【通釋】 以上に擧げた者は其の害毒の大なるもので、其の餘の細かいことは悉く名狀し難いほど多くある。嗚呼止棘の詩に於て青蠅を讒人に比したことは既に六經中の詩經に載せてある。此に於て

古代の詩人が博學多識であつて比興の方法が精密であつたことがわかる。宜なる哉、汝を以て讒人とし、世の中の治道を亂す者であるを諷刺したのである。誠に汝は嫉むべく又憎む可きものである。【評釋】 「是皆大者」を以て以上の凡てを收束し、止棘の詩を引き、詩人博物比興の精妙を擧げて、以て本旨の在る所「刺讒人之亂」の意を呈露したのである。「可嫉而可憎」は冒頭の「蒼蠅蒼蠅」と累呼したるに應じて剴切である。

● 說 類 (五篇)

説は説明又は解説の意で、事理を説き明白詳悉ならしめ己に従はしむるものである。文體明辨に「字書を按ずるに、説は解なり述なり。義理を解釋して、己が意を以て之を述ぶるなり。説の名は説卦より起る。漢の許慎、説文を作り、亦其の名を祖として以て篇に命く。魏晉以來作者絶えて少く、獨り曹植の集中に二首あり。而して文選には載せず。故に其の體闕けたり。……縦横抑揚、詳贍を以て上と爲すのみ。論と大異なきなり」とある。

10. 師 説

韓

愈

【備註】 師道の頹廢を慨し、世俗の誤想を解いて、古の師道を復興せしめたいの念願から書いた一篇である。即ち韓愈の當時

世の士大夫と稱する者、皆師と仰ぎ弟子と呼ぶを恥ぢ、却つて人の師弟と稱する者を嘲笑するの惡風があつた。韓愈之を見て憤慨に堪へず、李蟠の我を師として來り學ぶに因つて、此の説を作つて與へたのである。

今日教育隆興の世でも、師道の廢れて居ることは、古へよりも甚しい。猶此の師説を三復する必要が大にある。

【作者】

韓愈。——字は退之、唐の鄆州南陽の人である。生れて三歳にして孤となり、從父兄に養はる。長じて諸子百家の學に通じ、特に孟子に學ぶ所あり、唐の憲宗の貞元八年、進士に及第し、監察御史となつた。事を言ふを以て陽山の合に貶せられ、憲宗の時に佛骨を論じて又潮州刺史に貶せられ、尋いで袁州に改められた。後朝官に復して吏部侍郎となり、昌黎伯に封ぜられ、諡して文といひ、禮部尙書を贈られた。愈は博學宏才であつて、嘗て四門博士、國子祭酒となつた。常に力を古文の復興に盡し、遂に八代の衰を興し、一大文豪と稱せられ、唐宋八大家の魁である。又老佛の説を排斥し、儒道を擁護するに努力したから、世には其の功を以て孟子に配してゐる。著はす所、昌黎集、順德實錄等がある。

古之學者必有師。師者所以傳道授業解惑也。人非生而知之者。孰能無惑。惑而不從師。其爲惑也終不解矣。生乎吾前。其聞道也固先乎吾。吾從而師之。生乎吾後。其聞道也亦先乎吾。吾從而師之。吾師道也。夫庸知其年之先後生於吾乎。是故無貴無賤。無長無少。道之所存。師之所存也。

訓讀 古の學ぶ者は必ず師あり。師は道を傳へ業を授け惑を解く所以なり。人・生れながらにして之を知る者に非ず。孰が能く惑無からん。惑ひて師に從はずんば、其の惑たるや終に解けず。吾が前に生れて、其の道を開くや、固より吾れに先んぜば、吾れ從ひて之を師とせん。吾が後に生れて、其の道を開くや、亦吾れに先んぜば、吾れ從ひて之を師とせん。吾れは道を知りて之を師とせん。夫れ庸んぞ其の年の吾れに先後生するを知らんや。是の故に貴と無く賤と無く、長と無く少と無く、道の有する所は、師

の有する所なり。

語釋 一 ●學者。二様の義がある。將に學ばんとする者と、既に學びたる者とをいふ。此は前者である。●道。古聖賢の道、●業。學業、詳しく言へば、六經、禮樂詩文等をいふ。●惑。疑惑。胸中の疑問。●生而知之。論語述而篇に在るの語。●聞道。先王の道を能く學び知ること。●夫庸、それなんぞ。●先後生於吾。吾より前に生れ或は後に生れる。●無貴無賤。貴といはず賤といはずの意。

【通釋】 古の學ばんと志す者には、必ず師といふ者があつた。師といふは、先王聖賢の道を傳へ、詩書六藝の業を授け、胸中の疑惑煩悶を解決してやるものである。凡そ人は生れながらにして事物の理を知るものではない。故に誰にでも必ず疑惑がある。疑惑を有しながら師に從つて學び解することをしなければ、其の疑惑は終生解決出來ない。故に吾より前に生れて、其の道を開き知ること亦固より吾に先きだつならば、吾は此の人に從ひて師として學ばねばならない。又吾より後に生れた人でも、其の道を開き知ること、吾に先きだつて居るならば、吾は又從ひて師とし尊ぶべきである。吾は道その物を師とするので、其の人の生年月が、自分より前であらうが後であらうが、問ふ所ではない。是の故に貴賤といはず、長幼といはず、道の存在する所が、即ち師の存在する所である。

【評釋】 「傳道、授業、解惑」是れ實に師道の三大綱である。此の大綱を提舉して以下の細目を叙し、旋回盤轉、盡くるが如くにして盡さず。絶ゆるが如くにして絶えず。首尾相應じ、前後間隙

無きの名文を織り出してゐる。

「人非生而知之者」は論語より借り來つて、師の必要な所以を説くの料としたのである。而して師は年齢にあらず、貴賤にあらず、「道之所存、師之所存」で是れ此の篇の本意である。

嗟乎。師道之不傳也久矣。欲人之無惑也難矣。古之聖人其出人也遠矣。猶且從師而問焉。今之衆人其去聖人也亦遠矣。而恥學於師。是故聖益聖。愚益愚。聖人之所以爲聖。愚人之所以爲愚。其皆出於此乎。愛其子。擇師而教之。於其身也。則恥師焉。惑矣。彼童子之師。授之書而習其句讀者也。非吾所謂傳其道解其惑者也。句讀之不知。惑之不解。或師焉。或不焉。小學而大遺。吾未見其明也。

訓讀 嗟乎、師道の傳はらざるや久し。人の惑無からんと欲するや難し。古の聖人は、其の人に出づるや遠し。猶且つ師に從ひて問へり。今の衆人は、其の聖人を去るや亦遠し。而るに師に學ぶを恥づ。是の故に聖は益々聖にして、愚は益々愚なり。聖人の聖たる所以、愚人の愚たる所以は、其れ皆此に出づるか。其の子を愛すれば、師を擇びて之を教ふ。其の身に於ては、則ち師とするを恥づ。惑へり。彼の童子の師は、之に書を授けて、句讀を習はしむる者なり。吾が謂ゆる其の道を傳へ其の惑を解く者に非ざるなり。句讀の知らざると、惑の解けざると、或は師とし、或は不たらず。小をば學びて大をば遺る。吾れ未だ其の明を見ざるなり。

語釋 ●師道。師弟相授の道。●出人。衆人に秀出する。●句讀。讀の音「豆」。句は意の切れる所、讀は意切れざるも讀み切る所。●或不焉。不字の下に師の字を省略したのである。●小學。小とは句讀を習ふこと。●大遺。大とは惑を解くこと。遺は棄てる。忘れる。

【通釋】 嗟呼。大切なる師道が世に傳はらざることが随分久しい。故に世人が疑惑を解かうとしても頗る困難なことである。古の聖人と稱せらるる者は、其の資性衆人に傑出してゐることが甚だ遠い。然るに猶且つ師に從ひて學ぶことを勉めた。今日の衆人は、其の聖人に及ばないことが亦甚だ遠い。而るに却つて師に就いて學ぶことを恥辱としてゐる。是の故に聖人は益々聖哲となり、愚人は益々迂愚となるのである。聖人の聖となる所以も、愚人の愚となる所以も、其れ皆此の師に就いて學ぶを恥とするしなにと由るのである。誰でも其の子を愛する者は、皆師を擇んで之を教育する。然るに我が身に於ては師とするを恥づるは間違つたことである。彼の童子の師といふ者は、之に書物の讀方を授け、句讀の誤を正すぐらゐのことである。吾等の謂ふ所の「道を傳へ業を授け惑を解く」といふのとは同一のことではない。句讀の知らないのと、惑の解けないのとに對して、前者には師を擇びて教へ、後者には師とするを恥ぢてゐる。即ち小なることは學び、大なることを棄ててゐるのである。是れは實に不明無智な話で、とても吾は賢明な方法だとは言へないのである。

【評釋】 嗟呼の二字、能く上を承けて下を起すの關鍵である。古の聖人と今の衆人とを對比して、

智愚賢不肖の差は、師道の廢頽に由るを論じ、一轉して童子句讀の師と、大人解惑の師との差を擧げ、世俗の不明を斷じたのである。「古之聖人」以下は、全く雙關的修辭法で、古人の最も愛誦した所である。一揚一抑、一進一退、開闔の妙を知るに足る。

巫醫樂師百工之人不恥相師。士大夫之族曰師曰弟子云者則羣聚而笑之。問之則曰彼與彼年相若也道相似也。位卑則足羞官盛則近諛嗚呼師道之不復可知矣。巫醫樂師百工之人君子鄙之。今其智乃反不能及其可怪也歟。聖人無常師。萇弘師襄老聃郟子之徒其賢不及孔子。孔子曰三人行則必有我師。故弟子不必不如師。師不必賢於弟子。聞道有先後。術業有專攻。如斯而已。

訓讀 巫醫樂師百工の人、相師とするを恥ぢず。士大夫の族、曰く師、曰く弟子と云ふ者は、則ち群衆して之を笑ふ。之を問へば則ち曰く、彼と彼とは年相若けり。道相似たり。位卑ければ則ち羞づるに足り、官盛んなれば則ち諛ふに近しと。嗚呼、師道の復せざること知る可し。巫醫樂師百工の人は、君子之を鄙む。今其の智は乃ち反つて及ぶ能はず。其れ怪む可きか。聖人には常の師無し。萇弘・師襄・老聃・郟子の徒は、其の賢孔子に及ばず。孔子曰く、三人行へば則ち必ず我が師有り、是の故に弟子必ずしも師に如かずんばあらず。師必ずしも弟子より賢ならずんばあらず。道を聞くに先後あり。術業專攻あり。斯の如き而已。

語釋 ●巫醫。巫は鬼神を祭り、舞樂などして「神おろし」を行ふ巫女。醫は醫師。●百工。諸種の職工、大工でも左官でも。

も。●士大夫之族。士は古今に通じ然否を辨へる者、大夫は賢を進め能を達する者、何れも官位に在る者。族は階級、「やから」●相若。相同じいこと。●聖人無常師。論語子張篇にある語。聖人には一定の師といふものがない。誰にでも聞き習ふとの意。●萇弘。周の大夫。孔子之に音樂を問ふ。●師襄。魯の人、孔子就いて琴を鼓くを學ぶ。○老聃。老子のこと。孔子の禮を學んだ師。禮記曾子問篇にも、史記老莊申韓列傳にも出てゐる。●郟子。鄭といふ小國の君。孔子之に就いて官制の事などを學んだ。左傳昭公十七年の條に見ゆ。●孔子曰。論語述而篇にあり。●專攻。攻は治める。専ら研究する。

【通釋】 巫女や醫師、音樂師、百工の人人は、それぞれの専門の師に就いて學ぶことを恥としなない。然るに士大夫の階級に在る者は、「先生だ」「弟子である」など云ふ者があれば、則ち皆が群り聚つて之を嘲笑する。其の理由を問へば、「彼の師と稱し弟子と言ふ者とは、年齢が略々同じい。其の道も亦殆んど似てゐる。然るに師といひ弟子といふは可笑しい」といふ。又「師たる人の官位が卑くければ、從ひて學ぶことが恥かしい。官位盛高であれば阿諛するに近いから、師弟といひ難い」ともいふ。嗚呼、斯る偏狹な考へだから、師道の回復せざることがわかるのである。彼の巫醫百工の人は、君子の之を鄙み疎んずるものである。然るに今其の師を求むるの智には、士大夫と稱する者も反つて及ぶことが出来ない。實にそれ怪むべきことではないか。孔子の如き「聖人にも常の師がなかつた」と論語にもある。彼の萇弘や師襄や老聃や郟子の徒輩は、其の賢なること到底孔子に及ぶ者ではなかつた。然るに孔子は一一之に就いて、それぞれの教を受けられた。孔子曰く「三人して事を行へば、各々其の長短を發揮するから、必ず其の中に師とすべき者がある」と。實に千古の訓

言である。此の故に弟子でも必ずしも師にまさらないことはない。即ちいくらも勝ることがある。先生だとして必ずしも弟子より賢明だとはいへない。師といひ弟子といふは、畢竟するに、道を聞くことの先後と、其の學術徳業に専門的の深いものがあるか無しかに歸することである。斯の如きのみで、其の他は問ふまでもないことばかりである。

【評釋】 巫醫百工と士大夫と對比して、師道の彼に在つて此に無きを慨し、今の君子の智は、巫醫百工にも如かざるを擧げ、「聖人無常師」を以て、孔夫子の如き聖人も師とするを恥ぢざるを示し、以て巫醫百工に映照せしめてゐる。「弟子不_レ必不_レ如_レ師」「師不_レ必賢_レ於_レ弟子」は其の論斷で、「聞道有_レ先後……」は、冒頭の三大綱に歸結したのである。「年相若也。道相似也。位卑足_レ羞。官盛則近_レ諛」の四句は、前の「無_レ貴無_レ賤。無_レ少無_レ長」に應じたのである。

李氏子蟠年十七好古文六藝經傳通習之不拘於時請學於余余嘉其能行古道作師說以貽之。

訓讀 ●李氏の子蟠、年十七、古文を好み、六藝經傳之を通習す。時に拘らずして余に學ばんことを請ふ。余其の能く古道を行ふを嘉し、師說を作りて以て之に貽る。

語釋 ●李蟠、貞元十九年の進士である。其の他は詳かでない。●六藝、六經をいふ。●經傳、經は本文、傳は經の註疏。●不拘於時、時は時の流行。時俗、時習。●古道、古の師道。●貽、贈る。

【通釋】 李氏の子の蟠といふ者、年僅に十七歳だが、時文を舍てて古文を作るを好み、六經の經傳を通讀誦習して、時俗の惡風に拘泥せず、余に就いて學習せんことを請うた。余は其の能く古の師道を實行する健氣な志に感心して、此の師說一篇を作つて、以て之を贈與したのである。

【評釋】 師說を作つた理由を明かにして、李蟠を賞揚したのである。是れ即ち師道の復興を獎勵する所以である。

呂東萊の評に曰く、此の篇最も是れ結び得て力あり。中間の三段、自ら三意あつて説き起せり。然れども大概意思相承け、都て師道の本意を失はずと。

顧廻瀾の評に曰く、昌黎の文章に於ける、材力本と人に過絶す。學も又工夫を盡す。故に能く變態此の如く測られざるに至る。細かに此の篇を玩(味)せば、全く袁盎傳(史記)の意を用ひ、其の骨法に倣へりと。

一一、雜 說

韓 愈

【雜說】 「雜說」とは、事に觸れ物に感じて書いた雜文、即ち隨筆又は漫言とでも言ふべきものである。韓愈には本と「雜說」が四篇あるのである。第一は「龍の說」、(人君には臣下無かる可からざるを説いたもの)、第二は「醫の說」、(治を爲すには安を恃

む可からざるを説いたもの、第三は「鶴言の説」、(人を採用するには容貌を以てす可からざるを説いたもの)第四は則ち此の「馬の説」である。通篇比喩の文で、則ち伯樂を以て明君に喩へ、千里の馬を以て賢臣に比し、第一段は、世には名馬あれども伯樂なきを言ひて、賢臣ありて明主無きに喩へ、第二段は、世の人の馬を養ふ道を得ざるを歎じて、君主の賢臣を禮遇せざるに喩へ、第三段は、馬を養ふ者の名馬たるを知らざるを歎じて、君主の賢臣を知らざるに喩へたのである。

通篇、悲憤慷慨、世の不遇者の爲めに氣を吐いたもの、小品文の上乗として千古に愛誦せらるる所以である。

作者 一〇、「師説」に在り。

世有伯樂。然後有千里馬。千里馬常有。而伯樂不常有。故雖有名馬。祇辱於奴隸人之手。駢死於槽櫪之間。不以千里稱也。馬之千里者。一食或盡粟一石。食馬者不知其能千里而食也。是馬雖有千里之能。食不飽。力不足。才美不外見。且欲與常馬等。不可得。安求其能千里也。策之不以其道。食之不能盡其材。鳴之不能通其意。執策而臨之曰。天下無良馬。嗚呼。其眞無馬邪。其眞不識馬邪。

【訓讀】 世に伯樂ありて、然る後千里の馬あり。千里の馬は常に有り、而れども伯樂は常に有らず。故に名馬ありと雖も、祇に奴隸人の手に辱められ、槽櫪の間に駢死し、千里を以て稱せられざるなり。馬の千里なる者は、一食に或は粟一石を盡す。馬を食ふ者、其の能の千里なるを知りて食はざるなり。是の馬や千里の能ありと雖も、食飽かざれば力足らず、才の美外に見はれず、且つ常馬と等しからんと欲するも得べからず。安んぞ其の能の千里なるを求めんや。之を策つに其の道を以てせず、之を食

へども其の材を盡す能はず、之に鳴けども其の意に通ずること能はず、策を執つて之に臨んで曰く、天下に良馬無しと。嗚呼、其れ眞に馬無きが、其れ眞に馬を識らざるか。

●伯樂。伯樂は本と人の名。秦の穆公の頃の人、姓は孫、名は陽。善く馬を馭す。石氏星經に、「伯樂は天の星の名。天馬を主典す。孫陽馭を善くす。故に以て名と爲す」とあり。即ち星の名より人の名に轉ぜしもの。而して善く馭するの意が、善く馬を相する、馬の善惡を見分くる者を稱する意となつたのである。●千里馬。一日に千里も走る馬で、駿とか驥とか言はるゝもの。●紙。「まさに」或は「ただ」と調ず。音は「し」。普通本には「紙」を用ひてある。●奴隸人。馬丁などの賤しきもの。●駢死。首を並べて死する。●槽櫪。槽は馬の食物を入れる飼桶、櫪は廐の踏板。●粟。「ぞく」、米の「もみがら」を取らざるもの。●食馬。馬に食ましむるの意にて馬を養ふ。●才美。才能の善美なること。即ち能く走ること。●策之。策は竹條で、即ち鞭である。動詞に調めば「むちうちつ」である。●鳴之。之は副へ字で無くともよろしい。唯々「鳴けども」の意。或は、之を「其の苦しさに」、又は「其の虐待に」の意と見ても通ずる。

【通釋】 世の中に伯樂の如き善く馬の良否を鑑定する者があつて、然る後に千里の名馬があらはれ出るのである。千里の馬は常にあるが、伯樂はいつも居るといふことがない。故に千里の名馬があつても、世にあらはれずして賤しい奴隸人の手に酷使せられ、槽櫪の間に凡馬驛馬と首を並べて死んで了つて、千里を走る材能を認められないで終るのがある。(以上は、世に名馬あれども伯樂なく、賢臣あれども名君無きを歎いたのである)。馬の千里を走る者は、一度の食事に多量の粟を喰ひ盡すものである。然るに馬を飼養する者が、千里を走る名馬駿馬であることを知つて飼養しない。即ち何も知らずに飼養してゐる。故に是の馬が千里の材能があつても、其の食料が十分に給與され

ないから、力を十分に出すことも出来ず、才能の善美も外に發揮することが出来ないものである。それのみならず尋常の馬と等しく働かうとしても、それすら出来ないものである。どうして其の千里の材能をあらはすことが出来ようか出来ない。(以上は馬を養ふにも方法がある。賢臣を用ふるにも禮遇せねばならないことを示したのである)。本來馬に策しやうをあてるには其の方法がある。養ふには其の道がある。然るに馬を策つに其の適當な方法を用ひず、之を養ふにも十分の飼料を與へないで、其の材能を十分發揮させることもせず、馬がいくら虐待に鳴いてゐても、其の意を考へ悟ることもせず、さうして策を揮つて馬の傍に臨んで曰ふには、「天下には良馬が居ないものだ」と。嗚呼それ眞個に良馬が無いのであらうか、それとも又眞個に馬を識別することが出来ないものであらうか。言ふまでもなく、良馬を鑑識する明がないのである。(以上は名馬を識らないことを以て、賢臣を知らざるに喩へたのである)。

【評釋】 韓愈、曠世の才を抱いて大いに世に用ひられず、煩悶の情を抑ふる能はずして、此の一篇を成せるものである。即ち當時の宰相皆人を知るの明なく、徒らに情實に拘はつて天下の英才俊秀を登用せず、野に遺賢多く、異材却つて巖穴に隠るの世相に憤慨したものである。今の世猶此の歎尠からず。故に諷意剴切、文に生氣あり。長く三編せらるる所以である。

沈德潜評して曰く、寥寥たる短章、庸耳俗目を寫し盡くすと。

頼山陽の評に曰く、千里の馬の字七たび見はれ、一として變ぜざるは無し。而して其の變ずるの跡を見ずと。又云ふ策を執つて之に臨む……此れ一篇の生色を着する處なりと。

一一一名二子説

蘇

洵

【篇旨】 蘇老泉に二子があつた。それに命名した所以を説明して、二子の前途を説めたのが此の文である。斯る文體を名子説といふ。即ち人に命名する場合に、其の理由を説明するもので、能く其の人の性格に合ふやうにせねばならない。此の二子に名づくる説は、如何にも能く的中してゐるので、古來老泉の眼識を稱讚してゐる。

【作者】 蘇洵——字は明允、老泉と號す。宋の眉山の人である。年二十七、憤を發して學んだ。進士に擧げられて茂才異等皆中らず。乃ち常に爲る所の文を悉く焚き、戸を閉ぢて益々書を読み、遂に六經百家の説に通じ、筆を下せば頃刻にして數千言をなすに至つた。既にして二子軾・轍と共に京師に至り、文を上りて歐陽修の知る所となり、其の名益々著はる。宰相韓琦、朝に奏し、秘書省校書郎に除せられ、後、姚開と共に禮書を修め、太常因革禮一百卷をつくつた。書成りて方に奏したが、まだ報ぜられずして卒した。時に年五十八。光祿寺丞を贈らる。文集嘉祐二十卷、設法三卷あり。其の二子と共に三蘇の名あり、老蘇と稱せられてゐる。

輪輻蓋軫皆有職乎車。而軾獨若無所爲者。雖然去軾則吾未見其爲完車也。軾乎吾懼汝之不外飾也。天下之車莫不由轍。而言車之功轍不與焉。雖然車仆馬斃而患不及轍。是轍者禍福之間。轍乎吾知免矣。

訓讀 輪・輻・蓋・軾は、皆車に職あり。而して軾のみ獨り爲す所無き者の若し。然りと雖も軾を去れば、則ち吾れ未だ其の完車たるを見ざるなり。軾か、吾れ汝の外飾せざるを懼るるなり。天下の車は、輻に由らざるは莫し。而して車の功を言ふや、輻は與らず。然りと雖も車仆れ馬驚るとも、患は輻に及ばず。是れ輻は禍福の間なり。輻か、吾れ免るるを知る。

語釋 ●輪。車の輪。●輻。車のや。車の中心にある穀から輪に向つて放射したる木。●蓋。車を覆ぶもの、今の轆の如きもの。●軾。車の後の横木。●軾。車の前方に在る木。車に在りて人に敬禮する時、手をかけ懸りかかる木。●完車。完全なる車。●輻。「わだち」で車の輪のあと。●不輻。關係しない。

【通釋】 輪とか輻とか蓋や軾などは、皆車の主要部分で一定の職分役目がある。然して軾だけは何の役目も無いやうである。然りと雖も軾を取り去つては、吾等は之を完全なる車と爲すことは出来ない。吾が長男たる軾よ。汝に軾と名づけた。汝は車の軾のやうに國家に無くてはならない人物ではあるが、吾れは汝が外面を飾ることを知らず、直情徑行世俗に容れられずして、如何なる禍罪に觸れるかもわからないことを深く憂懼する。汝能く之を注意せよ。

天下の車は皆輻に由らずに行くものは無い。而して車の功用を言ふには、輻は少しも關係しない。然りと雖も何か事變があつて車が仆れ馬も驚れ死ぬるやうな場合があつても、輻は毫も災難を受けないで依然として居る。即ち輻といふものは、功用にも與らないが、災禍にも觸れないから、禍福の中間に立つ者と謂ふべきであらう。輻と名づけた少子よ、汝は國家に大なる功績を立てないかも知れないが、又禍罪を免れるを得るであらう。

【評釋】 「子を見ること親に如かず」といふ。蘇老泉我が二子に軾と輻とを名づけて、其の前途を誠めた。其の言一一的中して毫も間違が無かつた。蘇軾は政争の渦中に立ちて王安石一派と争論し、讒に遭ひ貶謫の禍に逢つた。蘇輻は多少の患難にも逢つたが晩年は頗る安泰であつた。字數僅かに八十。二子の前途を卜して之を誠むるの意深く、老泉の眼鑑常凡に非ざるを見るに足る。

一三、稼 説

蘇 軾

【補註】 作者の友人に張璪といふ者があつた。共に仁宗の徳祐二年二十二歳の時を以て進士の試験に及第したのである。今それが京師へ往くといふので、之を送るが爲めに作つたのである。稼は穀を種うるといふ字で、稻を作ることである。其の稼に譬へて、人間一生修養の大切なるを述べ、お互にもつと勉強しよう。さうして吾が弟にもよく言傳をして呉れよと言ふやさしい情の籠つた文である。

【作者】 七、「前赤壁賦」に在り。

盍嘗觀於富人之稼乎。其田美而多。其食足而有餘。其田美而多。則可以更休而地力得完。其食足而有餘。則種之常不後時。而斂之常及其熟。故富人之稼常美。少秕而多實。久藏而不腐。今吾十口之家。而共百畝之田。寸寸而

取之。日夜以望之。鋤耨銍艾。相尋於上者。如魚鱗。而地力竭矣。種之常不及時。而斂之常不待其熟。此豈能復有美稼哉。

訓讀 蓋ぞ嘗に富人の稼を觀ざるや。其の田美にして多く、其の食足りて餘りあり。其の田美にして多ければ、則ち以て更と休む可くして地力完きを得。其の食足りて餘りあれば、則ち之を種うること常に後れずして、之を斂むること常に其の熟するに及ぶ。故に富人の稼は常に美に、批少くして實多く、久しく藏して腐ちず。今吾れ十口の家にして、百畝の田を共にし、寸寸にして之を取り、日夜以て之を望み、鋤耨銍艾、上に相尋ぐこと、魚鱗の如くにして、地力竭く。之を種うること常に時に及ばずして、之を斂むること常に其の熟するを待たず。此れ豈に能く復た美稼あらんや。

語釋 ●蓋。何不の二字の音を合せた字である。●嘗。試み。●稼。穀を種うる即ち稻を作る。●斂之。收穫する。●批。「しひな」。穀の成熟せざるもの。●十口。十人。●寸寸。細かく、小さく。●鋤耨。鋤きかへして種子を蒔き土をおほひかける。●銍艾。銍は小さき鎌。艾は草を刈る。●時。適當な時期。

【通釋】 何ぞ試みに、富人の稻を作るを観察しないか。其の田地は美質肥沃であつて多くを所有してゐる。又其の食料も多く蓄へてあつて餘りがある。其の田地の土質が良くて面積が廣いならば、則ち代る代るに土地を休ませて耕作するを得るから、地力が竭盡しないでいつも肥えてゐる。又其の食料が不足なく十分であれば、則ち種子を播くにも植うるにも、常に季節に後れずに適當な時にやれる。之を刈り取り斂むるにも、常に能く十分に熟るのを待つことが出来るのである。故に富者の稻は常に美しく、不成熟の「しひな」などが少く實がよいから、久しく倉庫に藏しておいても腐敗などはしない。(以上は富人の美稼をいふ)。それに反して今吾れ十口もある家族の多い家であり

ながら、僅かに百畝ばかりの田地を共に耕して居るから、寸寸の細かい小さいものに分けて、少しの餘地も残さず、稻を作つて之を取ることを考へ、日夜稻の生長を望んでゐる。それ故に鋤でかへすやら、種子をまいて土をかけるやら、小鎌で草を刈り取るやら、次から次へと魚鱗の相累なるやうにせき立てるから、土地の養分も盡きて瘠田となる。種子を蒔き苗を植ふるにも、適當な時期にはやれず、又之を刈り取る時は、いつも其の十分に熟するまで待つて居られない。こんな有様だから、どうして美しい良い稻が取れようか取れる筈はない。(以上は貧者の惡稼をいふ)。

【評釋】 稼説といふ題によつて、富人の美稼と貧者の惡稼と異なる所以を擧げて、以下の古人今人の異なる所以に入るの前提としたのである。實は題から言へば本論であるが、作者の趣意からは全く客想である。

古之人。其才非有以大過今之人也。其平居所以自養而不敢輕用。以待其成者。閔閔焉如嬰兒之望長也。弱者養之以至於剛。虛者養之以至於充。三十而後仕。五十而後爵。信於久屈之中。而用於至足之後。流於既溢之餘。而發於持滿之末。此古之君子所以大過人。而今之君子所以不及也。

訓讀 古の人、其の才以て大いに今の人に過ぐるあるに非る也。其の平居自ら養ひて敢て輕用せず、以て其の成を持つ所以の

者、閔閔焉として嬰兒の長ずるを望むが如し。弱き者は之を養ひて以て剛きに至り、虚なる者は之を養ひて以て充つるに至り、三十にして後仕へ、五十にして後爵し、久しく屈するの中に信じて、至つて足るの後に用ひ、既に溢るの餘に流れて、満を持するの末に發す。此れ古の君子の大きい人に過ぐる所以にして、今の君子の及ばざる所以なり。

●平居。平生の閑居。●輕用。輕卒に仕官などする。●閔閔。憂ひ傷む貌。惘に同じ。●虚。空虚にて氣力の充實せざること。●爵。爵祿を受ける。●信。伸と通じて伸べる。●持滿。弓の弦を引きしほつて満月の如くにする。

【通釋】古の人といつても、其の才智が今の人に格別まさつて居たわけでもないが、唯其の平居安閑の際にも、自ら修養切磋することを怠らず、敢て輕々しく其の才智を用ひて仕官の志などは起さない。さうして其の學徳の成就發達を待つことは、恰も慈母が閔閔として心配しながら嬰兒の生育成長するのを望むが如くである。即ち才力の弱き者は、之を養ひて剛きに至らしめ、志氣の乏しい者は、之を修養して充實するに至らしめ、志氣才智共に成るを待ち、三十歳に達して始めて仕官し、五十歳に及んで爵祿を受ける。久しく屈して雌々し居たる中から雄飛して伸べる。而して十分に足るやうになつて始めて之を用ひ、既に満ち溢れるほど蓄へた後に、自然に流れ出るやうにする。又十分に弦を引きしほつてよく視ひを定めて矢を放つのである。古人は斯くの如く能く修養研究を積んだ後に之を應用するから、今の者に過ぐる所があつたので、今の者は之に反するから、古人に及ばないのである。

【評釋】前節を承けて、古今君子の差異は、平素の修養如何によることで、深く養ひて輕く用ふる

が古の君子人であるとし、富者の美祿に比するのである。「閔閔焉如嬰兒之望長」の一句は、吾人の修養に對する最も善い訓言である。久屈、至足、既溢、持滿の四句は亦是れ好い對句である。

吾少也有志於學。不幸而早得。與吾子同年。吾子之得。亦不可謂不早也。吾今雖欲自以爲不足。而衆且妄推之矣。嗚呼。吾子其去此而務學也哉。博學而約取。厚積而薄發。吾告吾子止於此矣。子歸過京師而問焉。有曰。轍子由者。吾弟也。其亦以是語之。

訓讀 吾れ少きとき學に志あり。不幸にして早く得、吾子と同年たり。吾子の得たるも、亦早からずと謂ふ可からざるなり。吾れ今自ら以て足らずと爲さんと欲すと雖も、而かも衆且つ妄りに之を推す。嗚呼、吾子其れ此を去つて學を務めよや。博く學びて約に取り、厚く積みて薄く發せよ。吾れ吾子に告ぐるは此に止まる。子歸らば京師を過ぎて問へ、轍子由と曰ふ者あり。吾が弟なり。其れ亦是を以て之に語げよ。

●早得。早く進士の第に登つて官途に就いたこと。●吾子。相親しむの語。張璠をさす。●博學。論語雍也篇に、「博學之於文、約之、以禮」とあるに據つたもの。博く六經の文を學びて、之を守るに要を以てし、動くに禮を以てすること。博學は扇を擡げたかたち、約取は扇をとちて要を持つのかたちである。●厚積。學問は多く厚く蓄へ積みて。●薄發。才智は少しく薄く使用する。

【通釋】吾れ少年時代より學問に志を立てて勉強したが、不幸にして早く進士の試験に及第した。それが貴公と同年であつた。貴公の及第したことも亦早くないとは謂はれない。隨分他人に比して

は早い方である。吾れ今日に及んで尙自ら修養の足らざるを感じて、更に一段の研究を積んで見たいと思つても、世間の衆が妄りに推舉して官に就かせた爲めに、十分の餘裕も無くなつた。貴公もそれ此の地を去つて官に就いたとしても、學問を務めて必ず怠る勿れ。即ち博く文を學んで之を約するに禮を以てするの精神を固め、其の蘊蓄を厚くして、施用を輕少にせよ。吾れの貴公に忠告するのは之だけのことである。貴公が若し歸つて京師を通過するならば、吾が弟の轍字は子由といふ者が居るから、之を訪問して呉れ。さうして弟に對して此の吾が説を語り聞かせて、一層勉強するやうに激勵して呉れ給へ。

【評釋】「吾少也云云」と、先づ自己より言ひ、吾子と呼びかけて説く所、實に親友たるを示すものである。「博學約取、厚積薄發」は互に切磋琢磨するの意。送行の餞として呈する所之だけに過ぎないが、千萬金にもまさる光輝と價值とがある。友に由つて又吾が弟に及ぼさんとするは、友情の敦さを示す。

樓迂齋曰く、坡公の作る所を觀るに、豈に一世の盛名を以て居らんや。其の朋友兄弟の相切磋すること此の如し。名益々盛んにして學益々進む所以なりと。

黄東發が日抄に曰く、東坡が稼説に、厚く積み薄く發するを論じて、自ら道の見難きことを論ず。

蓋し學を務めざる者の爲めに誠むるなりと。又曰く、東坡の文は長江大河の一瀉千里なるが如し。其の混浩流轉、曲折變化の妙に至つては、則ち復た以て名狀すべきもの無し。蓋し能文の士も之に能く尙ふる莫きなりと。

一四、愛蓮説

周敦頤

蓮を愛するに託して、自ら君子の徳を慕ひ行ふ者であることを示し、世人の名利を逐ひ驕奢に趨るを諷したものである。「古文標準」の題註に、周濂溪先生は、道學の宗師なり。其の蓮花を愛するは、其の君子の徳あるを取るにて、衆人の愛するに異なり。學者斯の文を玩味せば、當に其の旨を悟るべし」とある。

此の説は、先生四十七歳の時の作といはれてゐる。それは先生が南康郡の知たる時のことで、役所の後庭に池を鑿ち、蓮を植ゑて愛蓮池と稱して居たのである。

作者 周敦頤。——一に惇頤とも書く。字は茂叔、宋の道州營道の人である。博學力行にして高節あり、道を聞くこと早く、事に遇ひて剛果、古人の風があつた。嘗て分寧縣の主簿となり、獄を決して令名あり。政を爲すに嚴恕。務めて理を盡し、名節を以て自ら厲ぐ。後、桂陽の令に遷り、治績あり。又廣東の轉運判官と爲つた。刑獄を提點し、冤を洗ひ物を澤するを以て己の務と爲す。初め業を舅の龍圖閣學士鄭向に受けた。學を修むること師傳によらず、黙して道體に契ふ。後廬山蓮花峰下に家した。前に溪水あり、濂溪といふ。因りて以て號とした。世に濂溪先生と稱す。熙寧六年(皇紀一七三三)卒した。年五十七。元公と諡す。後孔子の廟に從祀せらる。敦頤、雅より高趣あり。應前草をも除かず、曰く「自家の意思と一般なり」と。黄庭堅稱す「其の人品甚だ高く、胸中洒落なること光風霽月の如し」と。著す所、太極圖説、通書あり。所謂宋學は即ち周子を以て祖と爲す。二程子其の門に出づ。故に併せて濂洛の學といふ。

水陸艸木之花。可愛者甚蕃。晉陶淵明獨愛菊。自李唐來。世人甚愛牡丹。予獨愛蓮之出淤泥而不染。濯清漣而不妖。中通外直。不蔓不枝。香遠益清。亭亭淨植。可遠觀而不可褻翫焉。予謂菊花之隱逸者也。牡丹花之富貴者也。蓮花之君子者也。噫。菊之愛陶後。鮮有聞。蓮之愛。同予者何人。牡丹之愛。宜乎衆矣。

訓讀 水陸艸木の花、愛す可き者甚だ蕃し。晋の陶淵明は獨り菊を愛せり。李唐より來、世人は甚だ牡丹を愛す。予は獨り蓮の淤泥より出でて染らず、清漣に濯はれて妖ならず、中は通じ外は直く、蔓とならず、枝とならず、香遠くして益々清く、亭亭として淨く植ち、遠く觀る可くして褻れ翫ぶ可からざるを愛す。予謂へらく、菊は花の隱逸なる者なり。牡丹は花の富貴なる者なり。蓮は花の君子なる者なりと。噫、菊の愛は、陶の後聞くこと有ること鮮し。蓮の愛は、予に同じき者は何人ぞや。牡丹の愛は、宜なるかな衆きこと。

●蕃。普通は「しげる」又は「しげし」と訓む。此は衆多の意にて「おほし」と訓んでよろし。●陶淵明。歸去來辭及五柳先生傳の作者。●李唐。唐の高祖、姓は李氏、名は淵。故に李氏の唐といふ意味。嬴秦、劉漢、曹魏、趙宋など皆此の類である。●來。以來と同じく「このかた」と訓む。●牡丹。隋唐以前には牡丹を稱揚したるもの尠きも、唐の則天武氏が宮中に植えて賞玩せしより、天下に流行せしこと、舒元興の牡丹賦に見ゆ。●淤泥。淤は濁泥。二字合せても同じ。●清漣。清き小波。●妖。妖艶にて人をばかすほどの艶麗さをいふ。●亭亭。亭亭は聳立の貌で、眞直ぐに立てること。●褻翫。褻は近狎。翫は玩弄。●隱逸。世俗を避けて幽靜を樂むこと。隱逸に同じい。●陶後。陶淵明の後。

【通釋】 水中陸上に咲く草木の花で、愛玩すべきものが甚だ多くある。晋の陶淵明は獨り菊の花を

愛賞した。李唐より以來は、世人一般に甚だ牡丹の花の華麗艶美なるを愛するやうになつた。然し予は獨り彼の水中に咲く蓮の花を愛賞する。其の理由は、蓮は濁つた汚れた泥土の中から咲いて出て、其の不潔にも染らない。又清い小波に洗はれて居ても、妖艶な美しさともならない。莖の中は穴が通つてゐて、外部は眞直ぐで、蔓ともならず、枝ともならず、其の香氣は遠くからでも益々清いことがわかる。さうして亭々として淨く植つて居る姿は、遠方から賞觀するに適してゐて、狎れ近づいて玩弄することが出来ない氣品と風致とを具へてゐるからである。故に予は、「菊は花中の隱遁者で、牡丹は花中の富貴なる者、蓮は花の中の君子ともいふべきものである」と謂ふ。噫、菊を愛するといふ者は、陶淵明以後には、誰もあることを聞かない。蓮を愛するといふ者は、予と心を同じうする者が果して幾人あるであらうか。之も餘り多くはあるまい。牡丹の花を愛する者の多いのは尤も千萬なことである。

【評釋】 最初に「水陸草木之花」と總括して、花の愛すべきものの畧からざるを示し、淵明の菊を舉げて、隱遁者の嗜好を見はし、牡丹を舉げて、世俗の喜ぶ所を示し、尋いで自己の愛好する蓮の花が他の花に異つてゐる點を列舉説明して、自ら君子の徳を慕ふ者であることを明かにしたのである。淵明の愛菊も周子の愛蓮も、要するに其の人格の反映と見てよろしい。

君子に比したといふのは、「出淤泥而不染」は、君子は世俗の風に隨ふとも其の徳操を汚さざるこ

と。「不妖」は清廉質素にして毅然身を持し、敢て外を飾らざること。「中通外直」は、心性聰明にして萬理に通じ、言行正直にして邪曲なきこと。「不蔓不枝」は無欲にして人に阿附せず、主一無適なること。「香遠益清」は、徳望高くして汎く遠くから仰慕せらるること。「亭亭淨植」は、行義堅固にして獨立すること。「遠觀云々」は威ありて猛ならず、親しむべくして狎るべからざることといふのである。「噫」以下は、簡にして勁拔。能く世俗の華奢を諷したものである。

● 解 類 (二篇)

解は解釋の意で、義理を一一分析解剖して人の疑惑を解くこと、庖刀の牛を解くが如きをいふ。文體明辨には「字書を按ずるに解は釋なり。人の疑あるに因つて之を解釋するなり。揚雄始めて解嘲を作り、世遂に之に倣ふ。其の文、疑惑を辯釋し、紛難を解剖するを以て主となす。論說義辯と蓋し相通ず」とある。文心彫龍には「解は結滯を解釋し、事を徴して以て對ふるなり」とある。

一五、獲麟解

韓 愈

韓愈が、麟に託して自己の不遇を歎じた寓意のある文である。則ち當時の君主も宰相も皆愚凡庸であつて、世に靈能神才ある人物があつても、それを鑑別して登用することが出来ないのは、麟が出て居ても常人がわからないと同じである。聖人で

なくては麟を知ることが出来ない。聖人に遭はない麟は不幸であり、不祥である。と暗に激する所があつて作つたのである。獲麟のことは、「春秋」の哀公十四年の條に、「春、西狩獲麟」とあつて、「左傳」には、「十四年、春、西の方大野に狩す。叔孫氏の車子、鉏商といふもの麟を獲たり。以て不祥と爲し、以て虞人に賜ふ。仲尼之を觀て曰く、『麟なり』と。然る後之を取る』とある。麟は聖人の世に在る時に「ざれば出ないと、古來言ひ傳へてゐるのに、此の周末戰亂の際に現はれたのは、何の爲めであらうか。孔子は此の獲麟に感じて、『春秋』を作り、筆を獲麟に絶つたのである」と史記の世家に書いてある。故に「春秋」を「麟經」とも稱するのである。又孔子を感麟翁、泣麟翁ともいふのである。「麟は仁獸にして、麋身牛尾、一角あり。角上に肉あり。生物を食はず、生草を踐まず。王者道あれば則ち麟出づ。毛蟲三百六十、麟は之が長たり。四靈の一たり」といふのが、麟の説明である。

作者 一〇、「師說」に在り。

麟之爲靈昭昭也。詠於詩。書於春秋。雜出於傳記百家書。雖婦人小子。皆知其爲祥也。然麟之爲物。不畜於家。不恒有於天下。其爲形也不類。非若馬牛犬豕豺狼麋鹿然。然則雖有麟。不可知其爲麟也。角者吾知其爲牛。鬣者吾知其爲馬。犬豕豺狼麋鹿。吾知其爲犬豕豺狼麋鹿。惟麟也不可知。不可知則其謂之不祥也亦宜。

訓讀 麟の靈たるは昭昭たり。詩に詠じ、春秋に書し、傳記百家の書に雜出す。婦人小子と雖も、皆其の祥たるを知る也。然れども麟の物たるや、家に畜はれず、恆には天下に有らず。其の形たるや類せず、馬牛・犬豕・豺狼・麋鹿の若く然るに非ず。然らば則ち麟ありと雖も、其の麟たるを知る可からざる也。角ある者は吾れ其の牛たるを知り、鬣ある者は吾れ其の馬たるを知り、

犬豕・豺狼・麋鹿は、吾れ其の犬豕・豺狼・麋鹿たるを知る。惟だ麟や知る可からず。知る可からざれば則ち其れ之れを不祥と謂ふも亦宜なり。

【語釋】 ●靈。神靈のもの、凡常の物でないこと。 ●昭昭。明かなること。 ●詠於詩。詩經の周南に「麟之為靈」がある。 ●春秋。篇旨に在る通り。 ●傳記。六經以外の古書。歴史的書類。 ●百家。諸子百家にて、老・莊・荀・孟子など。 ●祥。祥瑞で、めでたいしるし。 ●不類。何物にも類似せず。 ●豺狼。豺は山犬。狼は「おほかみ」。 ●麋。水牛に似たる一種の鹿。麋鹿(となくい)

【通釋】 麒麟が靈獸であるといふことは、極めて明白なことである。即ち詩にも詠ぜられ、春秋にも書かれ、傳記百家の書にも、雜然として書かれてゐる。故に婦人や小供でも、其の麟は祥瑞の獸であることを知つてゐる。けれども、麟といふ獸は、家に飼養することも出来ず、又恒には天下に居らない希有の物である。又其の形態も普通の獸には類似してゐないで、馬牛や犬豕や、豺狼や麋鹿のやうな物とは全然異つてゐる。して見れば、たとひ麟が居ると言つても、其の果して麟であるかどうかはわからないのである。角のある者は、吾等は直に其の牛であることがわかる。鬣のある者は、直に其の馬であることがわかる。其の他犬や豕や豺狼麋鹿なども、それぞれ形態の特徴があるから、吾等は直に其の犬豕や豺狼麋鹿であることがわかる。しかし麟だけは、其の麟であるといふことが誰もわからない。わからないものならば、則ち之を不祥な物と謂はれるのも、亦尤も千萬のことである。

【評釋】 此の一段は「靈」の字から、其の「祥」たる所以を説き、「然れども」と一轉折して麟の知る可からざるを説き、知るべからざる物は「不祥」であると斷じたので、「祥」と「不祥」とが一篇解説の眼目である。而して其の説明の長短反映した所が面白いのである。

雖然麟之出。必有聖人在乎位。麟爲聖人出也。聖人者必知麟。麟之果不爲不祥也。又曰。麟之所以爲麟者。以德不以形。若麟之出。不待聖人。則其謂之不祥也亦宜。

【訓讀】 然りと雖も麟の出づるや、必ず聖人の位に在るあり。麟は聖人の爲めに出づるなり。聖人は必ず麟を知る。麟は果して不祥たらざる也。又曰く、麟の麟たる所以の者は、徳を以てして形を以てせず。若し麟の出づること、聖人を持たずんば、則ち其れ之れを不祥と謂ふも亦宜なり。

【語釋】 ●聖人在乎位。五帝三王の時、麒麟が郊野に在つたと言ひ傳へてゐる。

【通釋】 然りと雖も、麟は何處にでも居らず、常には出る物でない。其の出る時には、必ず五帝三王の如き聖人が位にあつて、天下泰平の時である。麟は則ち聖人の爲めに出るのである。故に聖人は必ず麟の麟たるを見分け知るのである。果して然らば、麟といふ物は不祥な物ではないのである。又他 一方から言へば、麟が麟として祥瑞とか靈獸とか稱せらるる所以は、其の徳あるが爲めで、形態の異なるが爲めではない。故に若し麟が聖人の位に在るを待たずに、いつでも出るとするならば、則ち又之れを不祥な物と謂ふことも、尤も千萬な次第である。

【評釋】 前段を承けて、更に「雖然」と再轉せしめて麟と聖人との關係を示し、「不祥ではないぞ」と論斷し、「又曰」を以て麟の靈たる所以は形でなくて徳であるを説き、遙かに靈の字に呼應し、聖人と麟と相待たずして出づれば「不祥である」と結論したのである。「祥」と曰ひ、「不祥」と曰ひ、又「不祥」と説き、又「不祥」と斷じたる變轉滑脱の妙を玩味すべきであらう。試みに古人の評言一二を示さう。

謝疊山曰く、此の篇僅かに百八十餘字。許多の轉換・往復・變化あり。議論究らず。人能く此等の文字を熟讀せば、筆便ち圓活となり、便ち能く議論を生ぜん。

呂東萊曰く、字は少くして意は多く、文字節を立て、甚だ佳なる所以なり。其の抑揚開合は、祥の字を賓主とし、反覆五段を作して説けり。

一六、進學解

韓愈

【備註】 進學とは學問に上進する方法で、勳獎の意ではない。解とは前に述べた如く、事理を説き疑惑を解くのである。實は韓愈自らの不平不満を訴ふる爲めに書いたもので、大學の諸生との問答體になつては居るが、それは勿論假設のものである。原註には、

韓愈の本傳に據れば、唐の貞元十八年、國子四門博士に調せられ、十九年監察御史に拜せらる。元和元年國子博士と爲り、

二年東都に分教す。七年に至りて復た國子博士と爲り、後四門博士と爲る。御史たりし後に及んで、又三たび博士と爲れり。元和八年癸巳に及び、愈、數々官を擢けられ又下に遷るを以て、乃ち進學解を作り以て自ら諭し、己が意を發明せり。執政その才を奇とし、比部郎中に改めらる。

とある。即ち此の文に由つて時の宰相に認識せられ、次第に昇進の緒を得たので、言はば韓愈の出世作である。文章の巧妙にして辭句の整正斬新なるは、夙に後世諸大家の激稱して措かざるものである。

【作者】 一〇、「師説」に在り。

國子先生。晨入大學。招諸生立館下。誨之曰。業精于勤。荒于嬉。行成于思。毀于隨。方今聖賢相逢。治具畢張。拔去兇邪。登崇俊良。占小善者率以錄。名一藝者無不庸。爬羅剔抉。刮垢磨光。蓋有幸而獲選。孰云多而不揚。諸生業患不能精。無患有司之不明。行患不能成。無患有司之不公。

【訓讀】 國子先生、晨に大學に入り、諸生を招きて館下に立たしめ、之に誨へて曰く、「業は勤むるに精しく、嬉しむるに荒み、行は思ふに成りて、隨ふに毀る。方今聖賢相逢うて、治具畢く張り、兇邪を拔去し、俊良を登崇し、小善を占むる者も率ね以て錄せられ、一藝に名ある者も庸ひられざる無し。爬羅剔抉、垢を刮り光を磨く。蓋し、幸にして選を獲ることあるも、孰か多にして揚げられずと云はんや。諸生、業は精なること能はざるを患へよ、有司の明ならざるを患ふる無かれ。行は成ること能はざるを患へよ、有司の公ならざるを患ふる無かれ」と。

【語釋】 ●國子。國子學として主に諸侯の長子を教育する唐の大學の名。韓愈此の時國子四門博士であつたから、自ら國子先生と稱したのである。我國現在の學習院教授。如きもの。●大學。即ち國子學のこと。●業。學業のこと。●精。精熟。●嬉。遊樂。

●荒。荒廢。●行。品行。行迹。●思。思慮工夫。●隨。放隨。氣まま。●毀。毀敗する。●治具。政治の機關。法令制度など。●俊良。俊を峻とした書もある。峻は俊に同じく、智千人に過ぐるを俊といふ。●占。身にたもつ。享有する。●爬。爬は爪にて物を掻き寄せる。羅は網にて鳥を取る。●剔抉。剔は骨を切り解くこと。抉は「えぐる」。●刮垢。垢塵を刮り去る。●磨光。光彩を磨き出す。二句共に人材を採用養成すること。

【通釋】 國子學の教授たる余は、早朝大學に出勤して、多くの學生を招き寄せ、之を館下に立たせて訓へ諭して曰ふやうには、「凡て學業は勤勉によつて精熟するし、遊び嬉んで居れば荒廢してしまふ。又其の品行は思慮工夫を巡らすことに因つて成就するが、氣隨氣儘では破れこはれるものである。現今の世の上には聖君あり下に賢。あつて、政治の機關や法令制度なども舉ぐ伸張完備し、姦兇邪佞の者は排斥拔去せられ、才俊賢良の者は登庸尊崇せられ、僅に小善ある者でも率ね記録表彰せられ、一藝に秀でて名ある者も採用されざることは無い。凡そ才能のある者は、掻き寄せ探り集めて、骨を解き肉を抉ぐるが如くに毫も残す所はない。而して其の人材の汚垢を刮り去り、光輝を磨き出すやうにして、それぞれに採用されてゐる。故に僥倖にして選抜の榮を被ることがあつても、多才多能の士で登庸されないといふ者があらうか、そんな者は決して無い筈である。願はくは諸生たちよ。學業の勤勉精熟ならざることを患へて、上司上官の不明を患ふるな。自己の徳行の成就せざることを患へて、上司の人々の不公平を患ふるなよ」と。

【評釋】 以上を第一大段とし、國子先生が諸生を訓誡激勵するの辭である。「業精于勤。荒于嬉。行成于

思。毀于隨」の四句は、千古の格言と爲すに足る。終りの「業患不能精」と「行患不能成」とは、始めの業と行とを結んだのである。

言未既。有笑于列者曰。先生欺予哉。弟子事先生于茲有年矣。先生口不絕吟於六藝之文。手不停披於百家之編。記事者必提其要。纂言者必鉤其玄。貪多務得。細大不捐。焚膏油以繼晷。恆兀兀以窮年。先生之業可謂勤矣。舐排異端。攘斥佛老。補苴罅漏。張皇幽眇。尋墜緒之茫茫。獨旁搜而遠紹。障百川而東之。廻狂瀾於既倒。先生之於儒。可謂勞矣。

訓誡 言未だ既らざるに、列に笑ふ者あり。曰く、「先生、予を欺くかな。弟子、先生に事ふること、茲に年あり。先生、口、六藝の文を吟ずることを絶たず、手、百家の編を披くことを停めず。事を記するには必ず其の要を提げ、言を纂するには必ず其の玄を鉤す。多を貪りて得ることを務め、細大捐てず。膏油を焚いて以て晷に繼ぎ、恒に兀兀として以て年を窮む。先生の業は勤めたりと謂ふ可し。異端を舐排し、佛老を攘斥し、罅漏を補苴し、幽眇を張皇し、墜緒の茫茫たるを尋ね、獨り旁く搜して遠く紹ぎ、百川を障へて之を東せしめ、狂瀾を既に倒れたるに廻す。先生の儒に於ける、勞せりと謂ふ可し。

語釋 ●既。盡也。終也。「ををはる」と訓む。●六藝。普通には、禮樂射御書數のことではあるが、此では六經——詩經・書經・易經・春秋・禮記・樂記——をいふ。●提其要。其の要點を提擧拔萃する。●鉤其玄。玄妙深遠の理を引き出す。●舐排。日影に繼いで。●兀兀。屹々に同じく勤勞の貌。●舐排。舐は角が觸るといふ字。「つきとばす」こと。排は排又は斥の意で、「おしおとす」こと。●異端。孔孟の儒教以外の學說。楊墨の如きもの。●佛老。佛教と老子の教。●補苴。補は「おぎなふ」。苴は

「つつむ」又は「しく」●罅漏。缺けた所と漏る所。缺點。●張皇。共に「大いにする」。●幽眇。道の奥かにして小さきもの。●懸緒。切れて落ちた糸口。永く廢れてゐる儒教。●障。堤也。阻也と解するから、防ぎ止めて他へやらぬ。●狂瀾。荒れ狂ふ大きな波。

【通釋】先生の言が皆まで終らない先きに、學生の列中に笑ふ者があつて曰ふには、「先生は我等をうまく欺きなさるワイ。我等多くの子弟は、先生に従ひて學業を受くることが多年の久しきに亘つてゐるから、先生の學徳についてよく知つてゐる。先生、口には詩書六藝の文章を口ずさむことを絶やさず、手には諸子百家の書冊を披くことを思めないで、何事を記するにも必ず其の要點を提舉拔萃し、言辭を編纂するにも必ず其の玄妙の理を引き出すやうに努め、精々多くの見聞を貪り求め智識の收得に務め、細事も大事も捨てないで、日の短さを歎じ夜は油を焚いて晝に繼ぎ、終始孜々屹々として一年中休息の暇もない有様である。先生の學業は實によく勤勉せられると謂つてよろし。

又先生の主義に忠實なることは、異端邪説を排斥し、佛教や老子の教へを攘ひ斥け、儒道の缺點や漏れた所を補ひつくり、幽微眇小の未だあらはれざる處を擴張廣大にして、將に廢れて墜ちんとしてゐる儒教の茫漠たるものを尋ね究め、獨力を以て旁ねく聖人の道を搜し出して永遠に紹ぎ傳へんと努力せられたることは、百川の汎濫横流するを防ぎ止めて之を東海に注ぐやうにし、荒れ狂

ふ大波の既に倒れ落ちたものを元に廻へすが如くに、儒道の恢復に勤められたのである。先生の儒學に於ける功勞は實に大なるものがあると謂つてよろしい。

【評釋】此の段の前半は先生の業に勤勉なるをいひ、後半は儒道に於ける功勞の偉大なるをいふ。蓋し自ら言はずして學生の口を假りて叙するが故に、毫も街誇の感を起さないのが文に巧みな所である。勤と勞とが前段と脈絡あつて字眼をなしてゐる。

沈浸醲郁。含英咀華。作爲文章。其書滿家。上規姚姒。渾渾無涯。周誥殷盤。佶屈聱牙。春秋謹嚴。左氏浮誇。易奇而法。詩正而葩。下逮莊騷。太史所錄。子雲相如。同工異曲。先生之於文。可謂閱其中。而肆其外矣。少始知學。勇於敢爲。長通於方。左右其宜。先生之於爲人。可謂成矣。

訓讀 沈浸醲郁して、英を含み華を咀ひ、文章を作爲して、其の書家に滿つ。上は姚姒の渾渾として涯り無き、周誥殷盤の佶屈聱牙なる、春秋の謹嚴なる、左氏の浮誇なる、易の奇にして法ある、詩の正にしては葩なるに規り、下は莊・騷・太史の錄せし所、子雲・相如の同工異曲なるに逮べり。先生の文に於けるや、其の中を閱にして、其の外を肆にすと謂ふ可し。少にして始めて學を知り、敢て爲すに勇に、長じて方に通じ、左右其れ宜し。先生の人と爲りに於けるや、成れりと謂ふ可し。

訓讀 ●沈浸。物によく浸みこむ。文章に深く心を入れること。●醲郁。酒の濃厚にして香氣よきこと。文章によき味のあること。●姚姒。姚は舜。姒は禹王の姓。書經の堯典・舜典・禹貢などを斥す。●渾渾。重厚圓熟にして瑕疵なき貌。●周誥。書經中の大誥・康誥・召誥・洛誥・康王之誥等の總稱。●殷盤。書經中の盤庚上中下三篇をいふ。●佶屈聱牙。難固讀みにくく解し難き

こと。●春秋。孔子の作、魯の史記。隱公より哀公に至る二百四十二年間の歴史。●左氏。春秋左氏傳のこと。●易。易經。●詩。詩經。●葩。花にて文辭の華麗なること。●莊騷。莊は莊周の著書「莊子」をいひ、騷は屈原の著書「離騷」をいふ。●太史。漢の武帝の時の史官司馬遷のこと。史記百三十卷を著す。●子雲。漢の揚雄字は子雲。「法言」、「太玄」等を著す。●如。漢の司馬相如。辭賦を善くす。●同工異曲。工は巧思で文章の構想をいふ。曲は部曲で文章の體制をいふ。構想が同じでも體制が異つてゐるか、又體制が同じでも構想が異つてゐること。●閔其中。胸中に蘊蓄する所の廣大にして無邊なること。●肆其外。外部に發表する文章が自由自在にして放肆なること。即ち拘泥する所も無く、拘束さるる所もないこと。●方。道、又は義。●其宜。續文章軌範には其宜とあり。

【通釋】 又先生の文章に對する功を見るに、古文の道に心を深く沈浸して芳醇佳香を取り、花の英を含み華を咀嚼するが如く美しく、文章を作爲して其の書は家に充滿してゐる。即ち上は、遠く舜禹の典謨などの重厚にして其の意の際涯なきものや、周代の詁辭や殷代の盤文の如き倍屈聲牙にして讀みにくきものや、春秋の謹嚴にして苟くもせざる體制や、左氏傳の浮虛誇大なる叙述や、易經の奇にして法則のあるものや、詩經の雅正にして華やかなるものなどに規り倣つて、下は莊周の書や、屈原の離騷や、太史司馬遷の録した史記や、揚子雲・司馬相如などの同工にして異曲なる文章辭賦の類までを學び盡して居られる。先生の文章に於けるは、胸中の蘊蓄が廣大であつて、外への發表は自由放肆の拘泥する所の無い妙諦を得て居られると謂つてよからう。又先生の人と爲りは、少年時代から學問の必要を知り、敢爲進取の勇氣に富み、年長じては道義に

通曉し、前後左右皆その宜しきに適つてゐる。先生の人格に於ては、もう既に完成したものと謂つてよからう。

【評釋】 前段と同じく學生の口で、文章に於ける勤苦努力の功を擧げて、其の人格の一端を叙したので、長短錯綜して文の變化を盡してゐる。「姚姒渾々」以下は極めて簡明剴切なる批評で、後人皆之を取つて用ひ言ふ。

訓點は舊來のもの誤謬を訂正してあいた。

然而公不見信於人。私不見助於友。跋前疐後。動輒得咎。暫爲御史。遂竄南夷。三爲博士。冗不見治。命與仇謀。取敗幾時。冬暖而兒號寒。年登而妻啼飢。頭童齒豁。竟死何裨。不知慮此。反教人爲。

訓讀 然り而して、公には人に信ぜられず、私には友に助けられず。前を跋み後に疐きて、動もすれば輒ち咎を得。暫く御史と爲りて、遂に南夷に竄せられ、三たび博士と爲りて、冗にして治を見はさず。命と仇と謀り、敗を取ること幾時ぞ。冬は煖かなれども兒は寒に號び、年は登れども妻は饑に啼く。頭は童に齒は豁にして、竟に死すとも何の裨かあらん。此れを慮るを知らずして、反つて人に教ふことを爲さんや」と。

跋前疐後。詩經、幽風、狼跋篇の語。年老いたる狼には、頰下に長毛あり、前へ進まんとすれば其の毛を跋み、又後へ退かんとすれば長き尾に疐くといふ。故に進退共に困難すること。●御史。監察御史。百官の善惡を考へ、財役刑獄等を取締るの官名。●竄南夷。連州陽山縣の令に貶謫せられたこと。●冗不見治。冗は閑散をいふ。閑散無爲の官に置かれて治績を見は

すを得ざること。●命與仇謀。運命が仇敵の者と相謀つて困しめる。●頑童。童は毛髮の脱落して少く短きこと。●齒轄。齒が抜けてまばらになる。●裨。裨益。

【通釋】斯の如く、先生の學に於ける儒に於ける文章に於ける、將又人格に於ける、何れも衆に超えて勤勞し、世に優れた才徳があるにも拘はらず、朝廷公儀に於ては人に信用されず。私の交際上に於ても朋友に助けられもせず。進まうとすれば前に支障があり、退かうとすれば後に躓いて身の自由を得ず。却つて動もすると咎めを受けたりする。暫く監察御史となつて居られたが、遂には遠き南夷の陽山縣に左遷の厄に遭ひ、三たびまで國子博士として任用されなかつたが、閑散の冗官に置かれて何の治績も見はされない。運命は先生の仇敵に味方をして、先生に失敗させたことが幾度かわからない。其の爲めに俸祿も薄少であつて、例年より暖かな冬でも兒童は寒さに泣き號び、いっもより豊かな年でも妻は飢渴に啼くといふ有様である。その上先生の頭髮は脱けて禿げ頭となり、齒も落ちてまばらとなつて居られるが、永年の勤苦辛勞も酬いられず。竟に死んで了はれたとて世の中に何程の裨益を興へられることであらう。其の薄倖不遇な身の上を考慮せずして、反つて人を教へて、「有司の公明ならざるを思ふるなかれ」などと言はれたとて何の所詮もない話ではありませんか。

【評釋】前の二段の「業に勤、儒に勞、文に巧、爲人に成る」を承け來つて、先生現在の不遇に及んだので、此れが齷物の不平等を洩す主想である。先生の學徳に對する待遇の賤にして薄なるは、言ふまでも無く、當路者の不明であり不公平であることを暗示して、第一段の「無患有司之不明」、「無患有司之不公」に反照せしめたのである。

先生曰。吁。子來前。夫大木爲杗。細木爲桷。構榑侏儒。闌居楔。各得其宜。施以成室屋者。匠氏之工也。玉札。丹砂。赤箭。青芝。牛溲。馬勃。敗鼓之皮。俱收並蓄。待用無遺者。醫師之良也。登明選公。雜進巧拙。紆餘爲妍。卓犖爲傑。校短量長。惟器是適者。宰相之方也。

訓讀 先生曰く、吁。子來り前め、夫れ大木を杗と爲し、細木を桷と爲し、構榑・侏儒、闌居・居楔、各々其の宜しきを得、施して以て室屋を成すは匠氏の工なり。玉札・丹砂、赤箭・青芝、牛溲・馬勃、敗鼓の皮をも、俱に收め並べ蓄へ、用を待ちて遺す無きは、醫師の良なり。登すこと明かに選ぶこと公に、巧拙を雜へ進め、紆餘を妍と爲し、卓犖を傑と爲し、短を校べ長を量りて、惟だ器に是れ適せしむるは、宰相の方なり。

【通釋】國子先生、子弟の嘲笑を聞き終つて、更に曰はれるには「吁。諸子よ進み來つて吾が言ふ

所を聴けよ。夫れ大木を梁と爲し、細い木材は桷と爲し、構柱や侏儒や、根闌や居楔など各木材の宜しきに從ひ、其の適當したる處に用ひ施して、家屋を作り成すことは大工の巧妙と言ふべきではないか。又玉札や丹砂や、赤箭や青芝等の貴き藥劑や、牛溲馬勃、敗鼓の皮の如き下等な品物まで、俱に收め蓄へおいて、其の必要に應じて之を調合肥劑し、少しも遺すことの無いやうにするのが、良い醫師である。それ等と同じく、天下の人材を登用することが明かであり、選抜することが公平であつて、巧智の者も拙才の者も雜へて用ひ、多方にして餘裕のある者をば妍美と爲し、氣象の磊落卓拔なる者をば雄傑と爲し、其の長所短所を較べ量り、其の器量に應じて適當な官職を授け能率を發揮せしむるのが、大臣宰相たる者の人を用ふるの道である。

【評釋】 學生に思ふ存分を言はせたから、今度は先生が之を反駁するのである。先づ大工の用材法と、醫師の配劑法とを比喩として、宰相の人材登用法を説明するのである。「匠氏之工也」「醫師之良也」。「宰相之方也」は句法が整然としてゐる。

昔者孟軻好辯。孔道以明。轍環天下。卒老于行。荀卿守正。大論以興。逃讒于楚。廢死蘭陵。是一儒者吐辭爲經。舉足爲法。絕類離倫。優入聖域。其遇於世何如也。

訓讀

昔者、孟軻は辯を好みて、孔道以て明かなり。轍天下を環りて、卒に行に老いたり。荀卿は正を守りて、大論以て興

る。讒を楚に逃れて、蘭陵に廢死せり。是の二儒は、辭を吐けば經と爲り、足を舉ぐれば法と爲る。類を絶ち倫を離れて、優入聖域に入りしも、其の世に遇へること何如ぞや。

【語釋】 ●好辯。孟子、滕文公下篇に、「公都子曰。外人皆稱夫子好辯。敢問何也。孟子曰。予豈好辯哉。予不得已也。」云々とあるに基づく。●轍。車轍。遊歴の爲めの車轍。●荀卿。名は況。趙の人。孟子以後の大儒にして性惡説を唱ふ。荀子三十篇あり。●離倫。群倫を抜く。●何如。比較の疑問詞。如何とは異なる。

【通釋】 昔、孟子は辯を好むとまで訕られたが、異端を排し邪説を息めて孔子聖人の道が明かになった。けれども東奔西走、其の車轍が天下に普く周りて、卒に途上に老果てて了つた。荀卿は正道を守り、大議公論を以て世道を興隆させたけれども、齊國の讒を避けて楚國に逃れ、蘭陵縣の令となつて、世の役にも立たないで死なれた。是の二人の儒者は、文辭を吐き出せば永遠の經典となり、一舉手一投足の行爲が天下後世の法則となるほどの人物で、普通の人類人倫にかけ離れた、十分に聖人の仲間に入るの大賢であつた。然るに其の世の中から遇せられたことは如何なる有様であつたか、實に不幸な逆境に在つたではないか。

【評釋】 韓愈、自ら謂へらく、文は八代の衰を興し、道は孟荀に繼ぐと。此段孟荀二子を擧げて他を言はざるのは蓋し暗にその意を示したので、「吐辭爲經」以下も自ら任ずるの意であらう。

今先生學雖勤而不繇其統。言雖多而不要其中。文雖奇而不濟於用。行雖修而不顯於衆。猶且月費俸錢。歲糜廩粟。子不知耕。婦不知織。乘馬從徒。安

坐而食。踵常途之役役。窺陳編以盜竊。然而聖主不加誅。宰臣不見斥。茲非幸歟。動而得謗。名亦隨之。投閑置散。乃分之宜。

訓讀 今先生、學は勤めたりと雖も而かも其の統に蘇らず、言多しと雖も而かも其の中を要せず。文は奇なりと雖も而かも用を濟さず。行は修まれりと雖も而かも衆に顯はれず。猶ほ且つ月に俸錢を費し、歳に腐粟を糜す。子は耕すを知らず、婦は織るを知らず。馬に乗り徒を従へ、安坐して食ふ。常途を踵むこと役役たり。陳編を窺ひて以て盜竊す。然り而して聖主誅を加へず、宰臣にも斥けられず、茲れ幸に非ずや。動いて謗を得れば、名も亦之に隨ふ。閑に投じ散に置くは、乃ち分の宜しきなり。

語釋 ●蘇。由に同じく「よる」。●其中。中正の道。●糜粟。俸禄の米を費す。●常途。日用常行の道。●役々。勤務の貌。●陳編。陳は舊いこと。古書をいふ。●盜竊。古書中の要點を記憶すること。●投閑。閑隙の多い官位に置く。●置散。實務のない官位に置く。

【通釋】 今、國子先生たる予は、學業に勤苦したとは言ふものの、誰の傳統に由つたでもない獨學であり、言論する所多いとは言ふものの、道の中正に適ふを求めず、文章は奇巧だとは言ふものの世間の用をもなさないのであり、品行はよく修まつて居るとは言ふものの、廣く衆人には知られて居ないといふ有様である。然るに猶ほ且つ毎月俸給を消費し、毎歲祿米を食ひつづしてゐるから、子は耕作の勞苦を知らずして食ひ、婦女は機械の艱苦を嘗めずして着てゐるのである。予も亦外出する時は馬に乗つて供人をつれ、家に居ては安坐して衣食してゐる。身分相應の途である博士教授の官に在つて終日役々として勤務はして居るが、古臭い書物を窺ひ讀んで以て名句佳言を盗み取つ

て先生顔をしてゐるだけのことである。然るに寛仁なる聖天子は誅戮を加へようともせられず、朝廷の大臣宰相には排斥もせられずに斯うして居るではないか。あちこち動いて何事をか成さうとすれば人の誹謗も受けねばならない。すると名譽も亦隨つて毀損することである。現在の地位の如き閑官に投入し散位に放置してゐるのは、全く自分の才能の宜しきに適してゐるのである。何ぞ有司の不明不公を恨むの要があらうぞ。

【評釋】 「學雖勤……」以下の四句は、學生の言つた第一段と二段とを承けて一一に分疏辯解するもの。「猶且」以下は、學生の言つた第三段を承けたもので、一句も前後照應せざるものがないのである。「投閑置散、乃分之宜」は頗る皮肉な言ひ方で、是が不平なのである。

若夫商財賄之有亡。計班資之崇庳。忘己量之所稱。指前人瑕疵。是所謂詰匠氏之不以杙爲楹。而訾醫師以昌陽引年。欲進其豨苓也。

訓讀 若し夫れ財賄の有亡を商り、班資の崇庳を計り、己が量の稱ふ所を忘れて、前人の瑕疵を指さば、是れ謂はゆる匠氏の杙を以て楹と爲さざるを計つて、醫師の昌陽を以て年を引くを訾り、其の豨苓を進めんと欲するなり。

語釋 ●商。量にて「はかる」。●財賄。賄も財である。金玉を貨と曰ひ、布帛を賄と曰ふ。ここは俸禄をさす。●有亡。有無に同じ。●班資。班は位列、資は資給。官位俸禄をいふ。●崇庳。高い低い。●杙。楹である。●昌陽。菖蒲のこと。不老延年の薬と稱せらる。●豨苓。豨苓といふものに同じく、腎を苦し目を昏くする薬と稱せらる。

【通釋】 若し夫れ自己の身分を忘れて、俸禄の有無多少を比較したり、官職位階の高低貴賤を計り

かぞへ、自己の器量の適當して居る分位を忘れて、前人先輩の不公平などの瑕疵缺點を指摘するやうなことがあれば、飛んでもない了見がちひであつて、謂はゆる大工に對して、細い杓くわをなぜ大きな柱に使用しないかと詰問したり、醫師が菖蒲の延年薬を用ひてゐるのを警り笑つて、その代りに猪苓といふ毒草を飲ませようと欲するの類であつて、錯誤の最も大なるものである。故に自己の事は何にも言はないのである」と。

【評釋】最後に自己の官位の卑きを歎き、有司の不明不公を怨み尤むるが如き精神は斷じてない。若し斯る不平を有して他人を云爲せんとするならば、それは匠氏を詰り、醫師を警るもので、大人君子の爲す所ではないと、自ら高く標置するのは、如何にも國子學の師範たるの風格を示したかの如くである。以下全篇に對する二三の評言をあげて見よう。

洪容齋の評に曰く、東方朔が「答客難」は自ら是れ文中の傑出せるもの、揚雄之に擬して「解嘲」を爲る。尙馳聘自得の妙あり。崔駰が「達旨」、班固が「賓戲」、張衡が「應問」に至りては、皆屋下に屋を架して、章幕し句寫す。韓退之が「進學解」出づるに及び、是に於て一洗すと。

鄒東郭の評に曰く、此の篇莊騷に出入し、班馬に追歩す。其の字句を釋ぬるに、全く左氏の妙處を得たり。初學讀みて久しくせば、則ち筆を下して自ら沛然たるの思ひあらんと。

茅鹿門云ふ。此れ韓公の正々の旗堂々の陣なり。其の主意は専ら宰相に在り。蓋し大才を小用せられ、憾み無き能はず。而るに怨懟無聊の辭を以て、之を人に托し、自ら咎め自ら責むるの辭は、之を己に托す。最も體を得たりと。

齋藤拙堂云ふ。昌黎の進學解は揚子雲の體に倣ひ、佳字妙句亦零碎して之を取る可し。通篇僅々數百言のみ。後人採りて著書に名づけ、居室に命じ、及び別號と爲す者甚だ多し。余嘗て之を檢出せり。「刮垢磨光」は京僧文雄「磨光韻鏡」を著す。「紀事者必提其要」は、宋の袁樞「通鑑紀事本末」を著し、清の乾隆の朝「四庫全書提要」を編す。「纂言者必鈎其玄」は、元の吳澄「三經纂言」を著し、京醫香月啓益「醫學鈎玄」を著す。「廻狂瀾於既倒」は、明の顧起元「廻瀾」と號す。「含英咀華」は、清の劉文蔚「詩韻含英」を輯す。「詩正而葩」は、後人遂に三百編を稱して「葩經」といふ。「敗鼓之皮」は醫師某、その樓に扁して「敗鼓」といふ。「投閑置散」は、薦野こしのの文學南川氏「閑散餘錄」を著す。その餘の名言、後人に採用せられしもの亦衆しと。

● 序 類 (六篇)

序は叙に同じく用ひ、緒(いとぐち)の意で内外前後の順序を正しくして次第を云ひ述ぶるの義である。文體明辨に「序は緒なり。其の善く事理を叙して、次第序あること、絲の緒の如くなるをいふ」

とある。又尙書の註疏の毛傳にも「序は緒なり。則ち其の事を述べて、理をして相胤續せしむること、繭の緒を抽くが若し」とある。古文矜式には「序は事を序するを以て直達を貴ぶ」とある。之で序の體がわかる。その中に議論體と叙事體とがあり、或は兩者混淆のものもある。仕宦を序し、行旅を序し、著作を序し、壽康慶福を序し、德行才藝を序するなどいろいろある。

一七、春夜宴桃李園序。

李 白

編者 詩仙と稱せらるる李白が、春陽の一夜、同族兄弟を招いて、桃李花芳しき庭園に於て、酒宴を催して相飲み、各々詩を賦して清遊を極めた其の序文である。而してその旨意は、人の一生は夢の如くである。大いに飲み大に樂み、而して大いに詠歌吟詠を肆にするがよからうといふのである。然し今の人の酒色の馬鹿遊びのことではない。

作者 李白。——字は太白、青蓮と號す。唐の隱西成紀の人である。少くして逸才あり。志氣豪放、飄然として超世の心があつた。初め岷山に隠れて居たが益州の長史蘇頌之を異として、「この子は、天才特異、相如に比すべし」と曰つた。天寶の初、長安に到つて賀知章を見た。知章その文を見て「予は謫仙人なり」と歎稱し、玄宗に薦めた。玄宗金鑾殿に召見し、翰林に待詔せしめて國政を問うた。玄宗に頗る愛重せられた爲めに左右に悦ばれず、遂に山林に還るを請うて許された。後永王璣の僚佐と爲り叛亂の罪に坐して獄に繋かれた。赦に逢ひて復た江湖に放浪し、族人李陽水に頼り、病を得て卒した。年六十。その集三十卷、廣く世に行はれてゐる。杜市と共に唐代第一の詩人と稱せられ、長ずる所は絶句であつた。

夫天地者。萬物之逆旅。光陰者。百代之過客。而浮生若夢。爲歡幾何。古人秉燭夜遊。良有以也。況陽春召我。以煙景。大塊假我。以文章。會桃李之芳園。序

天倫之樂事。羣季俊秀。皆爲惠連。吾人詠歌。獨慚康樂。幽賞未已。高談轉清。開瓊筵。以坐花。飛羽觴。而醉月。不有佳作。何伸雅懷。如詩不成。罰依金谷酒數。

訓讀 夫れ天地は、萬物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の如し。歡を爲すこと幾何ぞや。古人燭を秉りて夜遊ぶ。良に以ある也。況んや陽春我を召すに煙景を以てし、大塊我に假すに文章を以てす。桃李の芳園に會し、天倫の樂事を序ぶ。羣季の俊秀は、皆惠連たり。吾人の詠歌は、獨り康樂に慚ぶ。幽賞未だ已まず、高談轉だ清し。瓊筵を開いて以て花に坐し、羽觴を飛ばして而して月に酔ふ。佳作あらずんば、何ぞ雅懷を伸べん。如し詩成らずんば、罰は金谷の酒數に依らん。

語釋 ●逆旅。逆は迎へる。旅は旅客。即ち旅客を迎へ止むる旅館。●過客。旅客のこと。●古人秉燭。文選二十九、古詩に云ふ。「生年不滿百。常憂千歲憂。晝短苦夜長。何不秉燭遊。爲樂當及時。何能待來茲。」云々。又魏の文帝の吳質に與ふるの書に、「年一過往。何可攀援。古人思秉燭夜遊。良有以也云々」とある。●有以。以は故と訓む。理由あるをいふ。●陽春。詩經に「春日載陽。」などあるに由り三春のこと。●煙景。煙霞風景。春の景色をいふ。●大塊。莊子太宗師篇に、「大塊載我以形。勞我以生。佚我以老。息我以死。」云々とあるが如く、天地をいふ也。●天倫。兄弟のこと。春秋穀梁傳に、「兄弟天倫也」とあり、其註に「兄先弟後、天之倫次」とある。此處は皆兄弟ばかりではないが、李白の親戚の者で兄弟の如くなるを以て天倫といつたのである。●羣季。多くの少年達をいふ。●俊秀。俊は千人に優るをいふ。秀は逸才として人よりすぐれたるをいふ。●惠連。晋の謝方明の子、謝惠連をいふ。「十歲能屬文。族兄靈運嘉賞之云云。每有篇章。對惠連輒得佳句。」と言はれた秀才。●吾人。自他を含めて言ふ語であるが、此にては李白自身をいふ。●康樂。謝靈運のこと。靈運父祖の封爵を襲きて康樂公に封ぜられる。「少好學。博覽群籍。文章爲江左第一」と稱せられた人。●幽賞。靜かに深く風景を賞する。●高談。高尙優雅なる談論。●瓊筵。瓊は珠玉。美しき會場。●羽觴。鳥の形をした盃。觴はさかづきの總名。●雅懷。風流なる思想。●金

谷。晋の石崇の別荘を金谷園といふ。崇嘗て金谷園に玉調・潘岳など二十四人の賓客を會して、山水風景を、し、飲酒歌舞の樂を催した。其の時詩の出来なかつた者六人に罰盃として三斗宛の酒を飲せたと、いふ故事。

【通釋】 夫れ廣大無邊の天地は、一切萬物を宿すべき旅館であつて、運行滯る無き日月光陰は、百代永劫を馳過する旅客である。而して果敢なき人の一生は夢の如くである。逸遊歡樂を盡すといふも幾何のことであらうぞ。古人が燭火を點して夜を日に繼いで遊んだといふのも、まことに尤も千萬なわけである。まして況んや三春の陽氣は、長閑な美しい風光景物を以て我等を呼び出し、大塊の天地は、大自然の文章を綴つて我等に貸し與へて呉れるではないか。此の際に方つて桃李花芳ばしき園庭に於て、兄弟一族の會合を企て、一日の清遊歡樂を縦にするは、眞に人生の樂事である。集れる多くの諸弟は、皆俊秀の英才で彼の謝惠連の如くであるが、吾人の詠歌は拙劣で、謝康樂に及ばないことを慚愧する。静夜の幽賞感歎も未だ已まず、高論雅談は次から次へと花が咲いて美しい。玉の筵を敷いて花の下に坐を占め、輕き羽觴を飛ばし交はして月光を眺めながら酔ふのである。此の清興に對して詩文の佳作が出ないといふならば、何ぞ風流な思想を伸べ弘めることが出来ようか。若し詩が出来ないと言ふならば、其の罰として晋の石崇のやつた金谷園の故事に倣つて、罰盃を飲ませることにしよう。

【評釋】 僅々百二十字に満たずして能く清遊の雅懷を抒べたもの、辭句は悉く四六駢儷の名句佳言、

恰も珠玉を鑲めた彫刻の如くである。詩仙李白の錦心繡腸を見るに足ると言つてよからう。

李廷機の評に曰く、此の序は春園夜宴の爲めにして作る。惟だに當時の光景を描寫して、奇艶精絶なるのみならず、即ち用字用句の、逆旅過客、召我假我、坐花醉月等の字の如き、具に錦繡の心腸を見る。後の宴游を序する者の能く萬一を彷彿する所に非るなりと。

一八、集昌黎文序

李

漢

韓愈卒して後、昌黎伯に封ぜられたるを以て、敬して韓昌黎といふのである。李漢は韓愈の女婿であつて當時文名が高かつた。故に韓愈の文を集めて整理し、其の序文として之を書いたのである。

文は頗る莊重典雅で、次序最も整然たるものである。殊に韓昌黎の文章道に於ける功勞を稱讚して、非凡拔群と言ひ、八代の衰を興したる偉績を顯揚するに重きをおいたのである。

李漢——字は南紀、唐の宗室淮陽王李道明の後裔である。少くして韓愈に師事し古學に通じた。辭を屬する雄偉、人となり剛にして略と愈に類してゐた。愈之を愛重して女を以て妻はせた。元和七年進士の第に擢んでられ、左拾遺となる。敬宗宮室を治め、鮑買沈香の亭材の獻を納れたから、漢之を諫めた。後或は出でて地方の刺史となり、又入りて朝廷に在り、大中の時召されて宗正少卿を拜して卒した。漢の第三人、その子皆進士の第に登つた。

文者貫道之器也。不深於斯。道有至焉者不也。易繇爻象。春秋書事。詩詠歌。書禮別其僞。皆深矣乎。秦漢已前。其氣渾然。迨乎司馬遷。相如董生。揚雄。劉

向之徒。尤所謂傑然者也。至後漢・曹魏。氣象萎茶。司馬氏以來。規模蕩盡。悉謂易已下爲古文。剽掠潛竊。爲工耳。文與道。秦塞固。然莫知也。

訓讀 文は道を貫くの器なり。斯に深からずして、道至ることある者はあらざる也。易の交象に繇り、春秋の事を書し、詩の詠歌し、書禮の其の儀を刷る、皆深いかな。秦漢より已前は、其の氣渾然たり。司馬遷・相如・董生・揚雄・劉向の徒に追ひては、尤も謂ゆる傑然たる者なり。後漢・曹魏に至つては、氣象萎茶たり。司馬氏より以來、規模蕩盡す。悉く易より已下を謂ひて、古文と爲し、剽掠潛竊して、工なりと爲す耳。文と道と秦塞すること、固然として知ること莫きなり。

語釋 ●文者貫道之器。文と道とは相離るべからざるものである。道は理なれば形無く、文は文字にて形あり。此の文字を借つて道を述べるが故に文章は道を貫く道具といふのである。●於斯。文章をいふ。於斯道。と訓じたのはよろしくない。●交象。爻の辭は周公の作る所。象の辭は孔子の述ぶる所。共に易を説くの辭。●春秋。魯の史記。孔子の筆削せしもの。●詩。詩經にて古代の詠歌である。●書禮。書經と禮記。共に浮辭を刷り偽を去つて事實を記録したるもの。●渾然。氣象渾厚圓滿なること。●司馬遷・相如。「進學解」に在り。●董生。董仲舒のこと。漢の武帝に仕ふ。醇儒を以て聞ゆ。●劉向。漢末の大學者。字は子政。宣帝・元帝・成帝の三朝に歴仕し、屢々得失をいふ。列女傳、新序、說苑等を著す。●傑然。萬人に勝るを傑といふ。傑出の作者。●曹魏。三國時代の魏。曹操の立てたる國なるを以て曹魏といふ。李唐、趙宋の類皆同じ。●萎茶。萎は草木の萎え凋むが如く衰へ弱ること。茶は草の枯ることにて疲弊する。●司馬氏。司馬炎の建てたる西晋東晋のこと。●蕩盡。衰へ廢れること。●秦塞。「いばら」で道の塞がるが如きをいふ。●固然。心の蔽固なること。

【通釋】 文章といふものは道を貫き載せる道具である。斯の文章に深く通達せずしては、聖人の道に至ることは出來ないのである。周易の高遠なる原理も爻象の辭に由つて明かになりたる、春秋の事實によつて褒貶を爲したる、詩經の情緒を詠歌したる、書經・禮記の偽疑を刷り去つて正しき道

を傳へたるが如きは、皆是れ上古聖人の記する所であつて、其の道理は皆極めて深いものである。而して秦漢より以前のもの、即ち戰國時代までの文章は、其の氣象が渾然として敦厚なものであつた。漢代に入つての司馬遷や司馬相如や、董仲舒・揚雄・劉向の徒輩に及んでは、謂ゆる尤も傑出した偉い人物ばかりであつた。後漢の頃から曹魏の時代に至つては、文章が次第に活氣を失ひて、草木の萎え凋むが如くであつた。司馬氏の晋より以後は、文章の形式が四六駢體の流行となり、全く衰へ廢れた。而して周易より以下の諸經をば、當世流行の文ではない、古臭いものであるとしながら、其の中から二三字宛又は一二句宛、剽竊奪掠して綴り合せ、以て文章に巧みであるとするのであつた。即ち文章と道とは、俱に萎で塞がれた如くに、頹廢を極めたが、天下皆固陋で無學で之を知ることが出來なかつたのである。

【評釋】 「文者貫道之器也」の一句、頗る莊重である。然し此の語には缺點があると朱熹は評してゐる。それは、「文章は道から出たもので、文章から道が出るものではない。故に文は道を貫くといふは誤りで道は文を貫くといふべきである」との意である。一應御尤もだが、此の序は昌黎の文の尊いことを言はんが爲めに、文は道を以て本とすると、特に此の句を用ひたのであらう。

易經以下聖經の深奥を説き、秦漢以前より揚雄・劉向の渾然たるもの傑然たるものを挙げ、一轉して魏晋以下六朝の衰頹を叙して、文と道と俱に一致せざるに至つた徑路を簡明に叙したのである。

其の次序亂れず、よく其の要を提擧してある。

先生生大曆戊申。幼孤。隨兄播遷韶嶺。兄卒。鞠於嫂氏。辛勤來歸。自知讀書爲文。日記數千百言。比壯。經書通念。曉析。酷排釋氏。諸史百子。搜抉無隱。汗瀾卓蹕。齋泚澄深。詭然而蛟龍翔。蔚然而虎鳳躍。鏘然而韶鈞鳴。日光玉潔。周情孔思。千態萬貌。卒澤於道德仁義。炳如也。洞視萬古。愍惻當世。遂大拯頽風。教人自爲。時人始而驚。中而笑。且排。先生益堅。終而翕然。隨以定。嗚呼。先生於文。摧陷廓清之功。比於武事。可謂雄偉不常者矣。

訓讀 先生大曆戊申に生れ、幼にして孤なり。兄に隨ひて韶嶺に播遷す。兄卒して嫂氏に鞠はる。辛勤して來り歸る。書を讀み文を爲ることを知りしより、日に數千百言を記す。壯なるに比びて經書念を通じて曉析す。酷だ釋氏を排し、諸史百子、搜抉せられて隠るる無し。汗瀾卓蹕して、齋泚澄深なり。詭然として蛟龍翔り、蔚然として虎鳳躍り、鏘然として韶鈞鳴り、日光玉潔、周情孔思、千態萬貌、卒に道德仁義に澤して炳如たり。萬古を洞視して、當世を愍惻す。遂に大いに頽風を拯つて、人をして自ら爲さしむ。時人始めは驚き、中ごろ笑つて且つ排す。先生益も堅し。終には翕然として隨ひて以て定まる。嗚呼、先生の文に於ける、摧陷廓清の功、武事に比すれば、雄偉にして常ならざる者と謂ふ可し。

●大曆。唐の九代目代宗帝の年號。戊申は其の三年。●韶嶺。韶州は南方五嶺の地方である。故に韶嶺といふ。●播遷。播は散。遠く左遷せらるること。●嫂氏。韓愈の兄韓會の妻鄭氏をいふ。●通念。念を入れて。能く心を用ひて。●曉析。明かに曉り細かに析つ。●釋氏。釋迦の説いた佛教。●搜抉。搜索剔抉。●汗瀾。清き波の紋多きこと。●卓蹕。文の卓抜にして

て奇なること。●齋泚。齋は泉の深く涌き出ること。泚は水の流ること。文章の安深なるに喩ふ。●詭然。奇怪なる様。●蔚然。草木の盛に茂れる様。●鏘然。金玉の聲。音樂の聲。●韶鈞。韶は九韶、舜の樂。鈞は鈞天、天帝の樂。●周情孔思。周公の情、孔子の思。●頽風。六朝以下文章の頽廢したるをいふ。●翕然。集り合ふ貌。●摧陷。文章の弊風を摧破陷却する。●廓清。廓は大、大いに清める。●不常。非凡抜群のこと。

【通釋】 韓昌黎先生は、代宗の大曆三年の生れで、幼少にして孤兒となられた。其の兄韓會に隨ひて遠く南方の韶州に配謫せられた。兄上が死なれて嫂の鄭氏に養育せられ、具に辛苦艱難を経て、故郷の河陽に歸り來たのである。七歳より書を讀み、十三歳より文を作り始めて、毎日毎日數千百言を諳記した。二十歳頃に及んでは、六經の諸書を研究し、最も念を入れて分析明瞭にした。いたく佛教を排斥し、諸史百家の書を研究搜索して、少しも隠るる所のない程にまで通讀した。此の故に其の作つた所の文章は、清流の波紋あるが如く流暢にして、古人にも卓越し、泉の涌くが如く水の流るが如くに清澄深宏のものであつた。其の奇怪にして變化のあることは、蛟龍の翔り昇るが如く、蔚然として盛なる様は虎の躍り鳳の飛ぶ如く、鏘然として音節の整へることは、九韶鈞天の樂にも似てゐる。燦然たる光りは日の輝くが如く、溫和にして潤澤あることは、珠玉の皓潔なるが如く、周公の情志を具へ、孔子の意思を體し、千態萬狀、いろいろに言ひ表はし述べ盡して、卒に歸着する所は仁義道德を闡明するに在つて、其の旨趣は炳然として火を見るが如くである。古今萬世の道理をよく視透して、現代當世の缺陷を憐みいたみ、遂に魏晉以下六朝の頽廢した文章の弊風を救ひ

矯めて、古代聖人の正しき道に回へさんとし、世人をして自ら道を修め文を爲らしめるやうに獎勵せられた。當時の人は皆始めは先生の文章を見て驚いたが、中頃は之を嘲笑して且つ排斥した。而かも先生は益々操守を堅固にして、「文は八代の衰を興さう」との決心が衰へなかつた。其の結果は終に翕然として先生の文に隨ひて一定するに至つた。嗚呼、文章道に於いて、俗惡無氣力の弊風を摧陷廓清して、古聖賢の大道に復せしめられた先生の偉勳大功は、之を武事に比較して言ふならば、雄傑俊偉にして非凡拔群の者の爲したる功績と等しいものと謂ふべきである。

【評釋】昌黎先生の略歴を叙し、苦學勉強の狀よりして其の文章に轉じ、「汗瀾卓犖」以下、あらゆる比喩を列擧して、其の傑出卓逸せる所以を述べ、其の歸著點は道德仁義に在りとして、起句の「文者貫道之器」に應じたのである。「時人始而驚」以下、「終而翕然隨以定」は能く當時の毀譽褒貶を竭凡してゐる。

「日光玉潔」「周情孔思」、など簡勁の句を用ひて、莊重典雅の趣を示してゐる。嗚呼以下は、先生の文績を武功に比して歎美したもので、「雄偉不常」の結句に千鈞の重みを托したのである。

一九、送孟東野序

韓

愈

【編者】

孟東野、名は郊、東野は其の字である。唐の武康の人、少くして崇山に隱れ、處士と稱してゐた。その性孤介にして知

女に乏しく、韓愈獨り忘年の交を結んで、文酒の間に唱和往來してゐた。年五十に及んで進士に登第したが、江南の深陽縣の尉官に任命せられた。東野中心之を不平不満に思つて赴任した。韓愈其の心事を察して、別を惜み情を寄せて慰撫激勵したので此の文である。

其の旨意は、「萬物平を得ざる時は、必ず鳴るものである。自然の草木金石でも、人間社會の事でも皆不平があつて鳴るものである。而して其の鳴るに至ることも天命であるから、君も今は不満でもあらうが、暫く辛抱して居れ、其の中に好い機會も廻つて来るであらう」と言つて、古今の鳴るものを列擧して激勵したのである。

【作】一〇、「師說」に在り。

大凡物不得其平則鳴。艸木之無聲。風撓之鳴。水之無聲。風蕩之鳴。其躍也或激之。其趨也或梗之。其沸也或炙之。金石之無聲。或擊之鳴。人之於言也亦然。有不得已而後言。其詞也有思。其哭也有懷。凡出乎口而爲聲者。其皆有弗平者乎。

【訓讀】

大凡物其の平を得ざれば則ち鳴る。艸木の聲無きも、風之を撓せば鳴り、水の聲無きも、風之を蕩せば鳴り、其の躍るや之を激する或ればなり。其の趨るや之を梗ぐ或ればなり。其の沸くや之を炙ぶる或ればなり。金石の聲無きも、之を撃つ或れば鳴る。人の言に於けるも亦然り。已むを得ざるありて後に言ふ。其の詞ふや思ふことあればなり。其の哭するや懷ふことあればなり。凡そ口より出でて聲を爲す者は、其れ皆平ならざる者あるか。

【語釋】●大凡。萬物を總括するの語。●撓。動也。「うごかす」と訓む。或は「たまわす」と訓んでもよろしい。●蕩。「うごかす」と訓む。●梗。塞で「ふさぐ」である。●其詞。詞は歌で「うたふ」。毛詩の序に、「情動中而形言。言之不足。故嗟歎」

之。嗟歎之不足。故咏三歌之。●懷。胸懷にて内に「おもひ」を抱くの義。故に不平の意を藏す。思は念慮である。

【通釋】 大凡天地間の萬物は、皆其の平靜安穩を得ざる時は、鳴るものである。彼の草木の如き自ら聲を出す機能のないものでも、風が來つて吹き撓せば音を立てて鳴る。水の如きも聲の無いものであるが、風が吹いて之を搖がし蕩せば鳴るものである。又水の躍り上つて鳴るのは、岩石か何かに衝突して激するからである。水の趨り流れて滔滔と鳴り響くのは、何物かが梗塞して堰き止めるからである。水の沸騰して音を立てるのは、下から炭火や焚火で炙るからである。金石の聲の無いものでも、之を撃てば則ち鳴り響くのである。我等人間の言語に於ても亦同然である。已むを得ざることあつて不平不満が生ずると、即ち言語となつて鳴るのである。其の詠歌となつて出るのも何か思ふことがあるからである。其の哭泣の聲となるのも何か不平を懷抱するからのことである。要するに凡て口から出て聲となるものは、皆何か其の平靜平和を得ざるものがあるからである。即ち不平が聲となつて出るものである。

【評釋】 此れ一篇の提綱である。草木と金石とは僅か一句にて叙し、水をば詳説して四句を用ひ、自然の草木金石と、人間の咏歌哭泣とを配して、長短錯綜の妙を示したのである。

樂也者。鬱於中而泄於外者也。擇其善鳴者而假之鳴。金石絲竹匏土草木八者。物之善鳴者也。維天之於時也亦然。擇其善鳴者假之鳴。是故以鳥鳴

春。以雷鳴。夏。以蟲鳴。秋。以風鳴。冬。四時之相推奪。其必有不得其平者乎。

訓讀 樂なる者は、中に鬱がりて外に泄るる者なり。其の善く鳴る者を選んで之を假りて鳴る。金石・絲竹・匏土・草木の八つの者は、物の善く鳴る者なり。維れ天の時に於けるも亦然り。其の善く鳴る者を選んで之を假りて鳴る。是の故に鳥を以ては春に鳴り、雷を以ては夏に鳴り、蟲を以ては秋に鳴り、風を以ては冬に鳴る。四時の相推し奪ふこと、其れ必ず其の平を得ざる者あるか。

語釋 ●樂也者。樂は音樂をいふ。●金石……金は金屬製の樂器、鐘・鈺・鈴など。石は磬の類。絲は琴瑟の類。竹は笛尺八の類。匏は「ひさご」である。古の樂器に匏に穴をあけて竹を挿み、舌をつけて吹くもの、笙の類。土は土製の樂器、埙又は壺にて「つちぶよ」といふ。革は太鼓又は鼓の類、木は祝歌などいふ樂器、拍子木、木魚などの類。

【通釋】 音樂といふものは、胸中に鬱積したる氣を外部に泄らすが爲めのもので、喜びあり哀しみあり、憂ひもあり樂みもある。皆其の善く鳴るものを選択し用ひて、之を假つて不平を鳴するのである。金石・絲竹・匏土・草木の八つのものは、多くの物の中でも善く鳴るものである。之を假りて人が胸中の鬱物を洩し不平を發散するのである。天の氣候季節に於ても亦其の通りである。其の善く鳴るものを選んで之を假りて不平を鳴らすのである。是の故に春は鶯雲雀などの鳥を以て鳴り、夏は殷殷轟轟たる雷を以て鳴り、秋は蚤や蟋蟀などの百蟲を以て鳴り、冬は蕭颯漸瀝たる風を以て鳴るのである。本來四時の推移は自然のことではあるが、夏は春を奪ひ秋は夏を奪ひ、冬は秋を奪ふが如くにして循環してゐる。之も必ず其の平靜を得ないものがあるのであらう。

【評釋】物の能く鳴るのは樂器である。故に樂器を以て中に鬱して外に泄らすものと爲し、更に季節の推移にも平ならざるものあるを叙して、「大凡物不得其平則鳴」の首句を演繹して來たのである。以下一轉して人間の鳴るものを列擧するの前提である。構想といひ、語句といひ、愈々錯綜曲折の妙に入るのである。

其於人也亦然。人聲之精者爲言。文辭之於言。又其精者也。尤擇其善鳴者。而假之鳴。其在於唐虞。皐陶禹其善鳴者也。而假之以鳴。夔弗能以文辭鳴。又自假於韶以鳴。夏之時。五子以其歌鳴。伊尹鳴殷。周公鳴周。凡載於詩書六藝。皆鳴之善者也。

訓讀 其の人に於けるも亦然り。人聲の精なる者を言と爲す。文辭の言に於ける、又其の精なる者なり。尤も其の善く鳴る者を選んで、之を假りて鳴る。其の唐虞に在りては、皐陶・禹は其の善く鳴る者なり。之を假りて以て鳴る。夔は文辭を以て鳴る能はず、又自ら韶を假りて鳴る。夏の時、五子は其の歌を以て鳴る。伊尹は殷に鳴り、周公は周に鳴る。凡そ詩書六藝に載せたるは、皆鳴るの善き者なり。

語釋 唐虞は陶唐氏堯のこと。虞は有虞氏舜のこと。●皐陶。舜の臣、教育を司り、殷の先祖である。●禹。舜の臣、大洪水を治め、舜の禪を受けて夏王となる。書經に「皐陶謨」、「大禹謨」などの篇がある。共に其の言辭を載せたもの。●夔。舜に仕へて音樂を司る。●韶。樂の名。舜の功徳を頌讚したもの。●五子。禹王の孫である太康王の第五人をいふ。太康遊獵を好みて政を顧みず、洛水の外に出でて百日も返らない。其の間に有窮の君羿といふ者叛逆して途を遮り、太康國に歸還するを得

ず、第五人母と俱に洛水の邊に待ち迎へて恨み歎き、禹王の誠めを述べて歌を作る。其の聲哀切を極む。書經に「五子之歌」の篇がある。●伊尹。殷の湯王を輔けて夏の桀王を誅し天下平定の功を樹てた賢臣。●周公。文王の子、武王の弟である。成王を輔佐して政を攝し、制度禮教を興す。

【通釋】音樂や四時に就いては前述の如くであるが、其の人間に於ても亦さうである。人の聲音には種々あるが、其の精にして純なるものが言語である。文辭といふものは其の言語の中の又純粹な精選されたものである。故に人間は此の尤も善く鳴る文辭を擇んで、之を假りて鳴るのである。其の實例を擧げて見ると、堯舜時代に在りては、皐陶や禹は能く鳴つたもので、即ち文辭を假つて鳴つたものである。夔は文辭を假つて鳴ることが出来なかつたから、得意の音樂を假つて大いに鳴つた。夏の時代には、太康の第五子が哀情痛切な歌を以て鳴つてゐる。伊尹は殷の湯王に事へて鳴つた。周公は周の成王を輔けて鳴つた。凡て詩經や書經など六藝に書き載せられてあるものは、皆其の能く鳴るものであつた。

【評釋】人聲の精なるものを言とし、言の精なるものを文といひ、古來文辭を以て鳴つたものを列擧し來る。茲までは上古の主なるものに就いて言つたのである。

周之衰。孔子之徒鳴之。其聲大而遠。傳曰。天將以夫子爲木鐸。其弗信矣乎。其末也。莊周以其荒唐之辭。鳴於楚。楚大國也。其亡也以屈原。鳴。滅孫辰。孟

軻・荀卿・以道鳴者也。楊朱・墨翟・管夷吾・晏嬰・老聃・申不害・韓非・慎到・田駢・鄒衍・尸佼・孫武・張儀・蘇秦之屬。皆以其術鳴。秦之興。李斯鳴之。漢之時。司馬遷相如・揚雄。最其善鳴者也。

訓讀 周の衰ふるや、孔子の徒之に鳴る。其の聲大にして遠し。傳に曰く、「天將に夫子を以て木鐸と爲さんとす」と。其れ信ならずらんや。その末や、莊周は其の荒唐の辭を以て、楚に鳴る。楚は大國なり。其の亡ぶるや屈原を以て鳴る。臧孫辰・孟軻・荀卿は道を以て鳴る者なり。楊朱・墨翟・管夷吾・晏嬰・老聃・申不害・韓非・慎到・田駢・鄒衍・尸佼・孫武・張儀・蘇秦の屬、皆其の術を以て鳴る。秦の興るや、李斯之に鳴る。漢の時、司馬遷・相如・揚雄は、最も其の能く鳴る者なり。

語釋 ●孔子之徒。周末の時孔子出でて先王の道を説き仁義を高調して鳴る。七十子の徒亦之に和す。●傳曰。傳とは古書をいふ。又聖人の書を經といひ賢人の書を傳ともいふ。此は論語を斥す。八佾篇に在り。●木鐸。金口木舌とて金の鈴に木の舌を作り、政を行ふ時、之を振つて衆人をいましめたるもの。轉じて學者の教化を施すをいふ。●莊周。楚の國蒙縣の人、其の書「莊子」三十三篇。今に傳はる。●荒唐。廣大にして域畔なきをいふ。即ち確實な根拠もない、とりとめの無い言。●屈原。漁父の辭に詳し。●臧孫辰。魯の大夫臧文仲、名は辰。哀伯の孫。●孟軻。孟子名は軻、字は子輿。鄒の人、魯の公族孟孫の後である。業を子思の門に受け、孟子七篇を作る。性善、養氣、仁義を説き、王霸を辨ず。●荀卿。名は況、趙の人。後楚の蘭陵に終る。「進學解」を見よ。●楊朱。字は子居。其の學は極端なる自愛利己主義。●墨翟。宋の人、其の學は極端なる兼愛(博愛)主義。楊朱と相反してゐる。●管夷吾。字は仲。齊の桓公を輔けて霸業を成した者。管子十八篇あり。功利を説きて仁義を後にす。●晏嬰。字は平仲、齊の景公に仕へ、節儉力行を以て重んぜらる。其の書「晏子」又は「晏子春秋」ともいふ。八卷あり。●老聃。楚の人、姓は李、名は耳、字は伯陽。聃は其の諡。老子と稱す。道徳經五千餘言。道學の祖である。●申不害。韓の昭侯に相となる。黃老刑名の學を以て著はる。其の書「申子」二卷あり。●韓非。韓の諸公子、李斯と俱に荀卿に師事し刑名法術の學を好む。其の書五十五篇、最も世に著はる。●慎到。趙の人、齊の宣王の時、尹文、田駢等と同じく稷下に遊び。黃老道徳の術を學ぶ。其の書「慎子」、今五篇を存す。●田駢。齊の人、談論を好み、時に談天口と稱せらる。其の書「田子」二十五篇あり。●鄒衍。齊の人、史記に、「衍は陰陽消息を觀て、怪迂の變、終始大聖の篇、十餘萬言を作る。其の語闕大にして不經なり」とある。●尸佼。魯の人、秦の商鞅之に師とし事ふ。鞅死して逃れて蜀に入る。書二十篇を著はす。●孫武。齊の人、兵法を以て著はる。孫子十三篇あり。●張儀。魏の人、六國の從約を散じ連衡して秦に事へしむ。蘇秦と併せて二大遊説家。●蘇秦。洛陽の人、六國を説きて從約を結ばしめ秦に抗す。●李斯。秦の始皇に仕へて相となり、刑名の學を以て天下を治む。焚書坑儒などは皆其の獻策である。●司馬遷。相如。揚雄。三人のことは「進學解」に在り。

【通釋】 周の平王の東遷以後凡そ二百有餘年、其の政令次第に行はれず、春秋の列國各々其の強を争はんとする時、孔子の徒出でて仁義道徳の振興流行を圖つて、大いに其の不平を鳴らした。其の聲は極めて大きく、且つ遠く後世にまで響き渡つてゐる。論語に「天は將に夫子を以て世人を警醒する木鐸としようとするのであらう」と曰つてある。それは如何にも信實であつたらう。其の周の末頃に至つては、莊周といふ者が荒唐不稽の辭を以て莊子を著はし、楚國に於て大いに鳴つた。楚は大國であつたから鳴る者が多かつた。其の亡びんとする時、太夫の屈原が世の濁れるを慨し人の醉へるを憤りて、汨羅に投じて死ぬるまで鳴つた。滅文仲や孟子や荀子などは、皆それぞれの道を以て大いに鳴つたものである。其の他楊子や墨子や管仲・晏平仲・老子・申不害・韓非・慎到・田駢・鄒衍・尸佼・孫武・張儀・蘇秦などの道家や法術家や兵家や遊説家などは、皆それぞれの専門的の術を以

て天下に鳴つた者である。秦が勃興して始皇帝が天下を統一するに及んで、其の臣李斯は峻刑過法を以て、いに鳴つた。漢の時代に入つては、司馬遷は史記百三十卷を著はし、司馬相始は神韻縹緲の辭賦を以て、揚雄は法言・太玄等の書を以て、何れも天下に鳴つたものである。

【評釋】 孔子以下列擧する所の者、皆それ當時の大家先達であるが、「臧孫辰・孟軻・荀卿以道鳴」の一句には古來異論が多い。其の要點は、荀卿は性惡説を主張し非十二子説を述べ、儒教の正統には加へないのである。然るに孟子と併稱するは其の倫を失ふことである。況んや臧文仲は論語に「蔡を居き位を竊むこと」を以て孔子も之を譏り誡めて居られる人物である。然るに荀孟に比するは最も誤れるの甚しいものである。此れは韓退之の學問が偏狹にして雜駁なるが爲めで、惜しむべきことである。——といふのである。

其下魏晉氏。鳴者不及於古。然亦未嘗絶也。就其善鳴者。其聲清以浮。其節數以急。其辭淫以哀。其志弛以肆。其爲言也。亂雜而無章。將天醜其德。莫之顧邪。何爲乎不鳴其善鳴者也。

訓讀 其の魏晉氏より下つて、鳴る者は古に及ばず。然れども亦未だ嘗て絶えざりしなり。就ひ其の善く鳴る者も、其の聲清にして以て浮、其の節數にして以て急、其辭淫にして以て哀、其志弛んで以て肆に、其言たるや亂雜にして章なし。將、天其の德を醜として之を顧みること莫きか。何爲れぞ、其の善く鳴る者を鳴らさざりしや。

語釋 ●魏晉。魏は三國時代の魏、魏亡びて晋起る。魏晉より以下、宋・齊・梁・陳・隋の六朝を経て唐となる。●其節數。數は音「さく」。調子の促急なること。●弛。弛緩、弛廢などの弛で「ゆるむ」こと。●肆。放肆、恣肆などの肆で「わがまま」である。●章。文章で彩光莊飾をいふ。

【通釋】 魏晉六朝以下唐に至るまでの間は、世に鳴る者が無いでは無かつたが、古代の能く鳴つた者に及ぶ能はざるものがあつた。然れども未だ嘗て全く絶ゆることは無かつた。然したとひ其の中の善く鳴る者と言つても、其の聲音が、清澄虚無に流れて浮動する傾向であつた。其の節調は頻數で且つ急促なものであつた。其の詞辭は淫蕩にして且つ哀傷を帯びてゐる。其の志氣は弛緩して放肆なものであつた。其の言語も亂雜にして何等の光彩も莊飾もない。斯の如く見るべきものがないといふことは、天が此の魏晉六朝時代の君王や衆人の才德を醜陋として、之を顧みなかつた爲めでもあらうか。何が故にもつと善く鳴る者を選んで鳴らさなかつたであらう。

【評釋】 前段では孔子以下の善く鳴る者を列擧稱揚しておいて、此の段では六朝沈滯萎微の風氣を陳べて抑へたのである。次の唐代を揚ぐるが爲めの前提である。斯の如く一揚一抑して褒貶錯綜の妙を盡してゐるのである。

唐之有天下。陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀。皆以其所能鳴。其存而在下者。孟郊・東野。始以其詩鳴。其高出晉魏。不懈而及於古。其他浸淫乎漢氏。

矣。從吾遊者李翱張籍其尤也。三子者之鳴信善鳴矣。抑不知天將和其聲而使鳴國家之盛邪。抑將窮餓其身思愁其心腸而使自鳴其不幸邪。三子者之命則懸乎天矣。其在上也奚以喜其在下也奚以悲。東野之役於江南也。有若不憚然者。故吾道其命於天者以解之。

訓讀 唐の天下を有つや、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀、皆其の能くする所を以て鳴る。其の存して下に在る者、孟郊東野始めて其の詩を以て鳴る。其の高きこと魏晉に出づ。憚らずんば古に及ばん。其の他は漢氏に浸淫す。吾れに従ひて遊ぶ者には、李翱・張籍其の尤なり。三子者の鳴るは信に善く鳴るなり。抑も知らず、天將に其の聲を和けて國家の盛を鳴らさしめんとするか。抑も將た其の身を窮餓し、其の心腸を思愁せしめて、自ら其の不幸を鳴らさしめんとするか。三子者の命は天に懸れり。其の上にあるや奚ぞ以て喜ばん。其の下に在るも奚ぞ以て悲しまん。東野の江南に役するや、憚然たらざるが若きものあり。故に吾れ其の天に命ぜらるるものを道ひて以て之を解く。

品評 ●陳子昂。字は伯玉、家世、富豪、十八歳まで書を知らず。後節を折りて書を讀み、最も詩文を善くし、古文復興の先驅を爲す。則天武后の朝に仕へて右拾遺に拜す。後魏罪にて獄に死す。年四十三。陳拾遺十卷あり。●蘇源明。肅宗の時擢んでられて知制誥となる。數、時政の得失を陳べ、秘書少監に終る。文辭に工なるを以て知らる。●元結李白。本書中の作者傳に在り。●杜甫。字は子美。少陵と號す。襄陽の人。玄宗の時祿山の亂に逢ひて蜀に奔り、肅宗に仕へて左拾遺に擧げらる。累進して尚書工部員外郎に至る。後官を棄てて秦州に客となる。大曆五年來陽に客死す。年五十九。李白と並び稱せられて詩聖の目あり。頗る忠君憂國の義氣に富み、詩歌に現はる。杜工部集二十卷あり。●李觀。字は元賓、官は太子校書郎を授けらる。文を屬して前人を蹈襲せず、當時韓愈と上下すと稱せらる。二十九歳京師に歿す。●其存而在下者。今の世に現在生存して居て下位に在る者。●浸淫。漸進の意。肩を比するに至る。●李翱。字は習之、趙郡の人。文章を以て當時に推され、進士の第に中る。元

和の初國子博士と爲り、後諫議大夫を拜す。其の性峭鯁にして宰相李逢吉を面折し廬州の刺史に遷さる。韓愈に従ひて文を學び其の辭渾厚と稱せらる。復性書を著はす。●張籍。字は文昌。和州烏江の人、古詩及び書翰行草を善くす。進士の第に登る。韓愈の客と爲り、朝に薦められて國子博士と爲る。是より文名天下に馳す。「答張籍書」參看。●尤也。最もすぐれたる物を尤物といふ。●江南。江南道の溧陽縣に赴くをいふ。今の江蘇省金陵道に屬す。●憚然。憚は「よろこぶ」。

【通釋】 六朝以は既に斯の如くである。我が唐朝の天下を有するに至つては、陳子昂や蘇源明や、元結・李白・杜甫・李觀の如き、皆各、の長所を以て天下に鳴つたものである。然し此の六人は既に歿して此の世には居ないが、現在生存してゐて下位に在る者では、孟郊字は東野といふ者が、始めて其の詩を以て天下に鳴つてゐる。其の詩の高雅なことは魏晉二代のものに過ぎてゐる。今少しく憚らずに勉勵せば、遠き古代の作者にも及ぶことが出来よう。其の他の文章なども漢代の司馬遷・相如・揚雄輩にも比肩するであらう。吾れに従つて研學して居る者の中で、李翱と張籍とが最も優れた者である。孟東野と合せて三人の者は、信に善く鳴る力を有してゐる。そこで天は此の三人を相當な官職に擢んで採用し、其の聲を和らげさせて、國家の隆昌和平を鳴らさせようとするか、或は又彼等三人の身を窮餓の逆境に陥れ、其の心腸を愁ひ悲しましめて、自ら其の不幸薄命を鳴らさせようとするのか、果して其の何れであるか、天意はわからない。要するに三人の運命即ち窮達貧富は天意のままである。故に高位貴官となつて上に在るとも深く喜ぶべきでもなく、又下位卑官に沈淪して居ても強ひて悲しむべきことでもない。天命ならば甘んじて受け安んじて居るべきである。

今や孟東野が江南溧陽縣の尉となつて遠く赴任するに方り、心中憚然たらざるものがあるやうである。故に吾れは「人間の運命は天に在るものだ」といふ理を説いて、東野の不滿不平を解いてやらうとするのである。

【評釋】 前段を承けて、唐朝の能く鳴る者陳子昂以下六人を挙げ、更に吾に従ひ遊ぶ三人者を拉し來つて、大いに之を稱揚し、始めて本題の旨意に觸れ來つたのである。而かも猶三人を併せあげて「三子者之命則懸于天矣」と斷じ、最の「東野之役於江南也……」に於て始めて全主題に歸到したのである。其の文の巧にして妙なること他に比類がないのである。

謝疊山の評に曰く、此の篇六百二十七字、鳴の字三十九あり。讀者其の繁を覺えざるは何ぞや。句法の變化凡そ二十九様、頓挫あり昇降あり抑揚あり。層峰重巒の如く、驚濤怒浪の如く、一句の怠慢なく、一字の塵埃なければなり。愈讀みて愈愛す可しと。

錢豐實曰く、許多の物、許多の人より、奇々怪々、繁々雜々説き來れるは、孟郊の詩を以て善く鳴ることを顯出せしめんが爲めに非る無し。末段に至つて、吁嗟の詠歎は盡きざるの意あり。文の變幻を語る者、此の作に過ぐるは無からんと。

二〇、送李愿歸盤谷序

韓

愈

【題旨】 李愿といふ者が盤谷といふ山奥へ歸還するのを送つたので、韓愈の多数の文中でも、名文の一に數へられてゐる傑作である。蘇東坡が嘗て「唐には文章がない。唯々韓愈の李愿の盤谷に歸るを送る序が一篇あるだけである。平生此に倣つて一文を作つて見たいと思ふが、どうもうまく行かないので罷めた」と言つたことが文章軌範の評注に載せてある。之れは恐らく過稱であらうが、他の追隨を許さない獨創的のものであることは實際である。猶最後に二三の評を載せてあるから、それを看ても傑作であることがわかる。

李愿といふ者は如何なる人物であつたかに就いても、古來異論がある。普通には、德宗の時に朱泚の亂を平定した西平郡王李晟の子李愿であるといふのであるが、それは此の文が韓愈三十四歳即ち德宗の貞元七年の作で、其の時此の李愿は、宿衛の將となつて居るので、事實が合はないのである。そこで閻若璩が李晟の子に非らざることを精細に考證して八ヶ條を列挙してゐる。要するに同名の異人で、當時の隱遁の士であつたといふだけよりわからないのである。

【作者】 一〇、「師説」に在り。

太行之陽有盤谷。盤谷之間。泉甘而土肥。艸木叢茂。居民鮮少。或曰。謂其環兩山之閒。故曰盤。或曰。是谷也。宅幽而勢阻。隱者之所盤旋。友人李愿居之。

【訓讀】 太行たいぎやうの陽ひがしに盤谷ばんこくあり。盤谷の間、泉甘くして土肥えたり。艸木そうぼく叢茂し、居民鮮少なり。或は曰く、其の兩山の間を環るを謂ひて、故に盤と曰ふと。或は曰く、是の谷や、宅幽たくゆうにして勢阻せいそんなり。隱者いんしやの盤旋ばんせんする所なりと、友人李愿之に居る。

【語釋】 ●太行。山名。懷州に在る。●陽。山の南。●盤谷。地名。孟州濟原縣に在る。●宅幽。宅は處る。人の居る處。幽は奥深い。●勢阻。地勢が險阻。●盤旋。共に「めぐる」。徘徊徜徉する。

【通釋】 太行山の南方に盤谷といふ地がある。その盤谷の間は甘い清泉が流れ、土壤が肥沃である。草木は繁茂して鬱蒼としてゐるが、民の居住する者は鮮少である。或人は、此の盤谷の地勢が兩山

の間を環つて居るから、盤と曰ふのであるといふ。又或人は、是の盤谷は、民の居宅が遠く幽僻であつて地勢が險阻であるから、世の隱遁者の盤旋徘徊するによい所である。故に盤谷と曰ふのであるともいふ。何れにしても幽邃な處である。我が友人の李愿が此處に居るのである。

【評釋】 盤谷の地勢景物の大要を提示し、「或曰」によつて、盤谷といふ所以を説明したのである。「隱者之所盤旋。友人李愿居之」で、先づ一篇の大意をほのめかしてゐる。

愿之言曰。人之稱大丈夫者。我知之矣。利澤施于人。名聲昭于時。坐于廟堂。進退百官。而佐天子出令。其在外。則樹旗旄。羅弓矢。武夫前呵。從者塞塗。供給之人。各執其物。夾道而疾馳。喜有賞。怒有刑。才俊滿前。道古今而譽盛德。入耳而不煩。曲眉豐頰。清聲而便體。秀外而惠中。颺輕裾。翳長袖。粉白黛綠者。列屋而閑居。妬寵而負恃。爭妍而取憐。大丈夫之遇。知於天子。用力於當世者之所爲也。吾非惡此而逃之。是有命焉。不可幸而致也。

訓讀 愿と言に曰く、人の大丈夫と稱せらるる者は、我れ之を知れり。利澤人に施し、名聲時に昭かに、廟堂に坐して、百官を遊退し、天子を佐けて令を出す。其の外に在りては、則ち旗旄を樹て、弓矢を羅ね、武夫前に呵し、從者塗に塞り、供給の人、各々其の物を執り、道を夾みて疾馳す。喜ばば賞あり。怒れば刑あり。才俊前に滿ち、古今を道ひて盛徳を譽め、耳に入りにて煩しからず、曲眉豐頰、清聲にして便體、外に秀でて中に惠あり。輕裾を颺し、長袖を翳し、粉白く黛綠なる者、屋を

列ねて閑居す。寵を妬んで負恃し、妍を争つて、憐を取らる。大丈夫の天子に遇知せられて、力を當世に用ふる者の爲す所なり。吾れ此れを惡んで、之を逃るるには非ず。是れ命あり。幸うて致すべからざるなり。

語釋 ●大丈夫。才氣優秀の男。孟子滕文公下に詳しく在り。●旗旄。旗は普通の「はた」。旄は旗の竿首に羗牛の尾をつけたもの。●羅。羅列。つらねる。●供給之人。いろいろの御用を承つて供給する者。●曲眉豐頰。眉毛のやさしく曲りて、頰のふつくりと肥えたる美人。●便體。身體の輕便にして清楚なること。からだか細く軽く自在にふるまひて品のよきをいふ。●秀外。外貌の秀でて美しい。●惠中。惠は慧で心の中が慧敏である。●妬寵。他の婦女の寵愛せらるるを妬む。●負恃。己の愛せらるるを恃みて自慢する。●有命。運命がある。●幸。「ねがふ」と同む。

【通釋】 其の李愿が言ふには、世人の大丈夫などと稱揚する者は、如何なる者を指すのか、我は能く之を知つてゐる。それは利益德澤が廣く一般人民に施し及んで、名聲は赫々として一時に高く明かになり、朝廷廟堂の高い處に坐つて、天下の百官を進退したり、天子を輔佐して、制令を出し、其の外へ出て居る時は、則ち旗旄を樹てたり、弓矢を羅ねたりして威容を示し、前驅の武士は前拂ひして警固し、隨從の供人は途上に充塞してゐる。又使令供給の人人は、各々其の物を執つて、道路を夾んで奔走疾驅するから、如何なる用事でも直に辨ぜられる。喜ぶ時は直に賞賜があり、怒る時は直に刑罰が加へられる。其の威力は實に恐るべきものである。又内に還れば、天下の才子俊髦が、坐前に滿ちてゐて、古今の歴史を引き偉人傑士に比して、主公の盛徳を譽めそやすから、耳に入つても少しもうるさいとは思はない。又側には曲眉豐頰の美人が居て、歌を歌へば其の聲は涼し

く優しく、容姿は楚々として、しなやかに軽く自由に立ち廻り、外貌は美しく、頭腦は敏慧でよく氣が利くのである。斯る美人が軽い裳裾をひらひらと飄し、長い袖袂をふりかざして起居振舞ひしてゐる。白粉を白く塗り眉墨を緑に入れ、お化粧に心を凝してゐる。斯る婦女子が幾人ともなしに華屋を列ねて仕事も無しに閑居してゐる。さうして他人の寵愛を妬んだり、自己の愛幸を自慢したり、或はお化粧を競争して愛憐を取り意を迎へようとしてゐる。

斯の如き生活は、大丈夫と稱せられて天子に用ひられ、才力を當世に發揮する者の爲す所である。吾れは此の如き者を惡み嫌つて此の盤谷に逃げかくれたのではない。斯る地位に至ることは運命であつて、希望したとて到達できるものではないから、今更致方もない次第である。

【評釋】 此の一節は、世の大丈夫と稱せられ、志を得て富貴を擅にし、得意の絶頂に在る將相大官者の生活状態を述べたもので、當時一般世俗の者の瞻望する所は此に在つたのである。「吾非惡之而逃之。是有命焉。不可幸而致也」は次節に亘る連鎖であつて、李愿の志は世俗の富貴に非ざるを暗示してゐる。

窮居而野處。升高而遠望。坐茂樹以終日。濯清泉以自潔。採於山美可茹。釣於水鮮可食。起居無時。惟適所安。與其有譽於前。孰若無毀於其後。與其有

樂於身。孰若無憂於其心。車服不維。刀鋸不加。理亂不知。黜陟不聞。大丈夫不遇於時者之所爲也。我則行之。

窮居して野處し、高きに升りて遠く望み、茂樹に坐して以て日を終へ、清泉に濯ひて以て自ら潔くす。山に採りて美なるは茹ふ可く、水に釣りて鮮なるは食ふ可し。起居時無くして、惟々安んずる所に適す。其の前に譽あらんよりは、其の後に毀なきに孰若ぞや。其の身に樂あらんよりは、其の心に憂なきに孰若ぞや。車服維がれず、刀鋸加へられず。理亂も知らず、黜陟も聞かず。大丈夫時に遇はざる者の爲す所なり。我は則ち之を行はん。

●窮居。貧窮に安居する。●茹。食ふ。●適所安。適は氣にかなふ。氣まかせにする。安樂とする所を氣まかにする。●車服不維。官位ある者は一定の輿車にも乗り、服装をも飾らねばならない。それらの事に繫がれないで自由なること。●刀鋸不加。刀鋸は刑罰の具。刑罰を身に加へられない。●理亂。治亂。●黜陟。黜は官位をしりぞける。陟は官位をのぼせる。不加。刀鋸は刑罰の具。刑罰を身に加へられない。●理亂。治亂。●黜陟。黜は官位をしりぞける。陟は官位をのぼせる。

【通釋】 貧窮して民間に閑居し、高い處に昇つて遠い眺望を肆にし、密林茂樹の間に安坐して一日を暮し、清泉に臨んで身心を濯ひ以て自ら皓潔にする。山に入つて果實草根を採り、美なるものは食ふべく、川に立ちて魚鰕を釣り、新鮮なるものはうまく食べられる。起きるにも寝るにも一定の時刻もなく、惟々我が身の安樂とするまゝに自由にやつてゐる。元來目前に於て賞讃せられるよりは、其の背後に於て毀貶せられないがよいではないか。其の身體に快樂があらうよりは、其の心意に憂患のないのがよいではないか。官位のない身は、輿車の乗物や服装などに、制限されたり拘束されたりもしない。又罪を犯さないから、刀鋸の刑罰を加へられる心配もない。位に居ないから、

天下の治亂にも關知せず、又百官の進退黜罰なども聞知せず。極めて安閑としたのん氣な生活も面白いことである。斯る境遇は、大丈夫と稱せられて、世に用ひられざる者の爲す所である。而して我(李愿)の行ひたいと思ふことである。

【評釋】 此の一節は、隱棲閑居の生活を述べたもので、自然を友とする田園生活が躍如として描かれてゐる。字句最も洗練せられ、簡勁にして優雅である。「我則行之」は前節の末尾に應じて、李愿の本意を示したのである。

伺候於公卿之門。奔走於形勢之途。足將進而趨起。口將言而嚙嚙。處汚穢而不羞。觸刑辟而誅戮。僥倖於萬一。老死而後止者。其於爲人。賢不肖何如也。

【訓讀】 公卿の門に伺候し、形勢の途に奔走し、足將に進まんとして趨起し、口將に言はんとして嚙嚙す。汚穢に處りて羞ぢず。刑辟に觸れて誅戮せらる。萬一を僥倖して、老死して後に止む者、其の人と爲りに於ける、賢不肖何如ぞや。

【語釋】 形勢之途。威勢權柄のある人の所。●趨起。行いて進まざる貌。「ためらふ」。●嚙嚙。言はんと欲して言はれない貌。●汚穢。道義にはづれた行ひをいふ。●刑辟。辟は罪。刑罰。

【通釋】 世の富貴利達を求めようとする者は、窃かに三公九卿の門に御機嫌伺ひに出たり、權勢ある當局者の處へ出入奔走して、お鬚の塵を拂はうとしたりして、御前へ進み出でようとして幾度も

逡巡趨起し、口にて何か言はうとしても怖れて十分にも言へない。汚穢なる行爲に甘んじて羞づることをも知らず。刑罰に觸れて誅戮せられるやうな危険を冒し、萬一の僥倖によつて幸福を得ようとして、遂には老いて死するに至るのである。斯る陋劣な人物と、世の隱遁者と、或は世の大丈夫などと稱せらるる者とを比較したならば、其の人としての賢不肖智慧は孰れであらうか。それは言はずともわかるであらう。

【評釋】 此の一節は、世の富貴利達を求めんとして、權門に奔走し、當途の人に伺候するの狀を叙したので、今日の政黨者流の獵官運動などもかうであらうかと観察せられるのである。「其於爲人賢不肖何如也」を以て以上三種の人々の結論としたのであるが、自ら其の是非を判定せずして、「何如也」といふ比較疑問詞で讀者をして其の得失を決せしむるは、最も老獪巧妙な手法である。實に餘情の盡さざるものがあつて含蓄が深い。

昌黎韓愈聞其言而壯之。與之酒。而爲之歌曰。

盤之中。維子之宮。盤之土。維子之稼。盤之泉。可濯可湘。盤之阻。誰爭子所。窈而深。廓其有容。繚而曲。如往而復。嗟盤之樂兮。樂且無央。虎豹遠跡兮。蚊龍遁藏。鬼神守護兮。呵禁不祥。飲且食兮。壽而康。無不足兮。奚所望。膏

吾車兮秣吾馬。從子于盤兮。終吾生以徜徉。

訓讀

昌黎の韓愈、其の言を聞きて之を壯とし、之に酒を與へて、之が爲めに歌うて曰く。

盤の中、維れ子の宮なり。盤の土、維れ子が稼なり。盤の泉、灌ふべく湘るべし。盤の阻、誰か子が所を争はん。竊として深く、廓として其れ容るるあり。線として曲り、往いて復るが如し。嗟、盤の樂み、樂んで且つ火り無し。虎豹跡を遠け、蚊龍遁れ、鬼神守護して、不祥を呵禁す。飲んで且つ食ひ、薄くして康し。足らざる無し。奚ぞ望む所あらん。吾が車に膏し、吾が馬に秣ひ、子に盤に従ひて、吾が生を終へて以て徜徉せん。

語釋

●子之宮。子は李愿を斥す。宮は宮室。家のこと。●稼。種殖して生活すべきをいふ。●可湘。湘は烹。茶を煮る。●竊。深くして幽静。●廓。廣大空虚の貌。●線。めぐる。まどふ。●無央。「かぎり」又は「きはまり」無し。●鬼神。「鬼神は二氣の良能」といひて、陰陽造化の屈伸往來し、萬物を生殺して良能を現はすをいふ。即ち天地の神のこと。●呵禁。呵は叱る。禁は止める。●徜徉。徘徊。

【通釋】昌黎の韓愈が、以上李愿の言を聞いて、甚だ其の志氣を壯とし、送別に臨んで之に酒を飲ましめ、且つ之が爲めに一首の歌を作つてやつた。其の歌は左の如くである。

盤谷の中は、維れ即ち李愿の居るべき處である。盤谷の土地は、李愿の稼穡して生を樂むべき處である。盤谷の泉水は、心身の垢辱をも濯ひ清め、又茶を烹、菜を煮るにもよからう。盤谷は地勢險阻であるから、誰も來つて子の居住を争ひ奪はうとする者も無い。全く子の獨占の場所である。實に此の盤谷は奥深い幽静な處であり、且つ廣大大きく何物をも包容し得る。道路はまこと繞るが如くに迂曲し、往いて復へるが如くにぐるぐるしてゐる。嗟乎。斯の如く浮世離れをした

盤谷の樂みは、いくら樂んでも窮極がなからう。古から有徳者の住む處には、惡獸も遠く避けるといふから、今此の盤谷も李愿が居るから、虎豹も遠く跡を隠し、蚊龍も逃げかくれて、其の害を人に加へない。のみならず天地の鬼神も守護して、不祥なる禍殃を呵禁して近寄せないであらう。それ故に安らかに飲み且つ食ひて、心に憂患もないから、長壽にして健康を保つことが出来る。斯くの如く何一つ不足もないから、又更に希望する所も無い筈である。洵に此の上もない良い境地である。予も機を見て、吾が車に油をさし、吾が馬に秣を食はせて、子の處へ行き、子と俱に吾が一生を終るまで、徜徉自適の生活をやつて見たいと思ふ。

【評釋】「聞其言而壯之」。之れだけが韓愈の自語である。實は言ひたいことが多くあつたのであるが、それは凡て既に李愿に言はせて了つたから、自ら何も言はないですますことにした譯である。是れが韓愈の新しい獨創的の格法で、蘇東坡をして筆を投ぜしめたのもあらう。歌は冒頭に述べた地勢を敷衍し、隱者の隱棲に適する所以を擧げ、「膏吾車兮。……終吾生以徜徉」。を以て、欽慕已み難い情を寄せたのは、即ち李愿を稱揚し尊敬する所以で、送行の本旨である。

頼山陽云ふ。此の文六代の風習あるは、文に深からざる者と雖も亦之を知る。唯其の造語依然として昌黎の本色なり。試みに六代の文字を把り來つて之を比較せば、何人の手筆か此れに彷彿たるを

得ん。是れ文に深き者に非ざれば知らざるなり。

儲同人の評に曰く、公の此の文を作る時纔に三十四歳。公嘗て云ふ。辭備らずんば成文と謂ふ可からずと。此の文を見るに李愿の口中に於て、三種の人を描寫し、各情状を極むること、化工の物を付するが如し。信なる乎其の辭の備はること。學者之を解せば最も舉場に利ありと。

茅鹿門の評に曰く、通篇全く李愿の説話を擧げて、自ら説くこと只數語のみ。此れ又別に是れ一格なり。而して其の造語形容の處は則ち又六代の長技を鑄すと。

二二、送薛存義序。

柳宗元

訓讀 薛存義は河東の人で、唐の憲宗の時、永州零陵縣の令となつてゐた。當時子厚も亦永州の司馬に貶謫せられてゐたので、存義が今や他に轉任して行かうとするのを送つたのである。或は、京師へ還り行くのであるといふ説もあるが、柳文集には「送薛存義之任序」として「任にゆく」といふ字があるから、轉任と見てよからう。又京師から何處かへ赴任するといふ説もあるが、此の文中に「吾賤而辱、不_レ得_レ與_二考績_一剛明之説」とあるから柳子が中央政府に居た時のことではあるまい。それはとにかくとして、此の序は、轉退之が評して「雄深にして雅健である」云々と曰つてゐる位で、名文の一つである。

作者 柳宗元。——字は子厚、唐の河東の人である。少くして精敏絶倫、博學宏詞の科に登第して、集賢殿正字を授けられた。貞元十九年監察御史と爲る。王叔文その才を奇とし禮部員外郎に拔擢した。叔文敗るるや永州の司馬に貶せられ、元和十年柳州の刺史に遷された。能く州民を愛撫しその願願を受けた。子厚俊傑廉悍にして議論今古に證據し、經史百子に出入して時人を服せしめた。永州に居るや刻苦文詞を長じ、一に感慨を文に寓した。柳州に遷るや衡湘以南文詞を爲るもの、皆子厚を以て師とすに至つた。元和十四年遂に柳州に卒した。年四十七。集四十七卷がある。

河東薛存義將行。柳子載肉于俎。崇酒于觴。追而送之江之澗。飲食之。且告曰。

訓讀 河東の薛存義將に行かんとす。柳子肉を俎に載せ、酒を觴に崇て、追ひて之を江の澗に送り、之を飲食せしめ、且つ告げて曰く。

語釋 ●將行。將に出發せんとする。●俎。「まないた」。然し肉を盛つた器物のこと。●崇。充たす。●觴。「さかづき」。然し之も酒を入れた器物のこと。●澗。「ほとり」。

通釋 余と同郷の河東の薛存義が將に任地に向つて出發せんとする。そこで余は肉と酒とを携へて、其の後を追かけて行き、江水の澗に於て、肉を食はしめ酒を飲ませて、且つ之に告げて曰つた。
評釋 薛存義はもと是れ同郷の知友である。故に自ら酒肉を携へて其の行を送らんとするので、其の親密の情と惜別の思との深さを示すものである。

凡吏于土者。若知其職乎。蓋民之役。非以役民而已也。凡民之食於土者。出其十一。傭乎吏。使司平於我也。今受其直。怠其事者。天下皆然。豈唯怠之。又從而盜之。向使傭一夫於家。受若直。怠若事。又盜若貨器。則必甚怒而黜罰之矣。以今天下多類。此而民莫敢肆其怒與黜罰。何哉。勢不同也。勢不同而

理同。如吾民何。有達于理者。得不恐而畏乎。

訓讀 凡そ土に吏たる者、若其の職を知れるか。蓋し民の役に於て、以て民を役するのみに非ざるなり。凡そ民の土に食む者、其の十が一を出し、吏を備ひて、平を我に司らしむるなり。今其の直を受けて、其の事を怠る者、天下皆然り。豈惟之を怠るのみならんや。又従ひて之を盜む。向使ば、一夫を家に備ひ、若其の直を受けて若の事を怠り、又若の貨物を盜まば、則ち必ず甚だ怒りて之を黜罰せん。以ふに今の天下多く此に類す。而も民敢て其の怒と黜罰とを肆にする莫きは何ぞや。勢同じからざればなり。勢同じからざれども而も理は同じ。吾が民を如何せん。理に達する有る者は、恐れて畏れざるを得んや。

語釋 ●吏于土。其の地方の官吏となつた者。●若。汝と同じい。●役。徭役、賦役など皆民の上に奉ずる者。轉じて民を役する者を役人と曰ふ。●食於土。土地の耕作に由つて生活する者。●其十一。其の十分の一。●直。僅にて「あたひ」。●向使。向に「せしむ」と訓んだ本もあるが、二字で「たとへば」と訓むのが適切である。●貨器。貨財器物。●黜罰。黜は「しりぞける」。以。「おもふに」。●勢。上下貴賤の勢。

【通釋】 凡そ其の土地に官吏となつた者は、如何なる職分を有するか、汝は能く之を知つて居るのか。本來官吏は、人民の爲めの役務であつて、民衆を使役するばかりのことではないぞ。凡そ人民の土地の生産に由つて衣食する者は、其の收穫の十分の一の租税を納めて、官吏を備ひ、各自の爲めに公平なる保護安寧を委託して司らしめてゐるのである。然るに今其の俸祿を受けて其の職責を怠る者が、天下推しなべての弊風である。豈に惟だ怠るのみではなくて、甚しい者は、權力を濫用して人民の財貨を貪り盜むに至る。實に浩歎に堪へないことである。たとへば、今一人の男を家に備ひ入れた場合に、其の男が相當の賃金なり給與を受けて居て、其の業務を怠けて一向やらない。

其の上に家に藏してある大切な財貨器物などを盗み出すやうなことがあれば、誰でも必ず甚だ怒つて、之を黜け罰するであらう。おもふに、今日天下の官吏の爲す所は、大概此の備人に類した者である。然るに人民は敢て其の怒りを發して官吏を放逐したり處罰したりすることを、十分に爲し得ないのは何であるかと言へば、上下貴賤の勢力が同じでないからである。然し其の勢が同じくないとしても道理に於ては同じである。然らば此の虐げられて黙して居らねばならない人民を如何に取扱つてやるべきであらうか。少しく物の道理に通達したる官吏は、恐れた上にも畏れずには居られない筈である。

【評釋】 「凡吏于土者」云々は、能く官吏の職能本質を道破したもので、今日の民衆主義的思想である。又一備夫の譬喩は、最も今日の官吏にも適用し得る名句であつて、之を讀んで背を沾すものが多いであらう。「勢不同也」とか「勢不同而理同」などは、是れ實に頂門の一針、此の篇の骨力となる主意である。

存義假令零陵二年矣。蚤作而夜思。勤力而勞心。訟者平。賦者均。老弱無懷。詐暴憎。其爲不虛取直也的矣。其知恐而畏也審矣。吾賤且辱。不得與考績。幽明之說。於其往也。故賞以酒肉。而重之以辭。

訓讀 存義假に零陵に合たること二年。蛋に作きて夜に思ひ、力を勤めて心を勞す、訟ふる者は平にし、賦する者は均うし、老弱詐を懐きて暴憎すること無し。其れ虚しく直を取らざるを爲ること的かなり。其れ恐れて畏るるを知ること審かなり。吾れ賤くして且つ辱められ、考績幽明の説に與かるを得ず。其の往くに於て、故に賞するに酒肉を以てし、之に重ぬるに辭を以てす。

語釋 ●假令零陵。零陵縣の令としての本官ではなく、權官として代理である。●蛋作。朝早く起きる。●訟者。訴訟する者。●賦者。賦課する租税。●懐詐。上を詐はらうとする。●暴憎。亂暴憎疾。或は「憎を暴にする」と訓じて憎惡の心を暴戾にする。●的。明か。●考績幽明。書經の舜典に「三載考績。三考黜陟幽明」とある。それは三年に一度地方官の治績を考査し、更に三考査即ち九年を累ねて、其の人物性行の幽明、即ち賢不肖智愚を判定し、其の幽者(愚者)を黜罰し、其の明者(賢者)を登用する。

【通釋】 存義は假官ではあつたが、零陵縣の令たることが茲に二ヶ年であつた。其の間毎日朝は早く起きて事務を執り、夜は晩くまで能く考へ、力を盡し心を勞して其の職務に精勵したのである。そして訴訟する者に對しては公平に之を裁決し、租税を課する場合にも、之を均一公平にしてやつた。故に人民の老弱ともに上を詐らうとしたり、亂暴憎惡を肆にすることもなく、皆能く從順であつた。是に由つて觀れば、存義は働かずに俸祿を取るものでないことが明白で、又民の怨みを恐れ天命を畏るるものであることが審かである。今吾れは斯く賤しき官に貶謫せられて恥辱を被つてゐる。従つて考績幽明の説に參與して、人材を登用することも出来ない。だから今存義の出發に際して、心ばかりの酒肉を以て送別の微意を表し、併せて官吏たる者の心得を説いて送別の辭とするのである。

【評釋】 存義の勤務ぶりを示して、「爲不虛取直也的矣。其知恐而畏也審矣」といふのは、よく前段の譬喩に應じた修辭法で、一句の呼應も忽諾に附してないのである。「吾賤且辱」以下、一身の沈淪を訴へて、滿腹の憤懣を散ずるものである。「故賞以酒肉」は首尾相應するものである。

茅鹿門の評に云ふ。子厚の此の序、文辭淳正、韓退之に及ばすと雖も、氣格の雄絶なるに至つては、亦退之の及ばざる所なりと。
謝疊山の評に曰く、章法、句法、字法皆好く、轉換多く、關鎖緊しく、謹嚴にして優柔なり。理は長くして味永しと。

三、滕王閣序并詩 王 勃

【備言】 滕王閣は、今の江西省南昌府南昌郡に在り、唐代では洪州豫章郡である。閣は其の郡城の西、漳江の岸上に在つて風景絶佳を以て聞え、後代の詞客騷人の詩賦に多く上つてゐる。唐の高宗の末子李元嬰が洪州の刺史に任ぜられて居る時に建てられたので、落成の際に滕王に封ぜられたから滕王閣と名づけたのである。其の後高宗帝の咸亨二年、閻伯嶼といふ者、洪州の刺史となり、上元二年に此の閣を修復した。その年の九月九日即ち重陽の佳節に於て、大に賓客を請じて盛宴を開いた。作者王勃會と長安を發し、交趾の令に左遷せられてゐる父の福時を省せんとして、途上此の盛會あるを聞き、舟を馳せて到り著き、座に列するを得たのである。勃時に年二十九歳、座中第一の年少者であつた。是より先き閻伯嶼は此の盛會に於て其の婿吳子章の文才

あるを兼賓に誇り示さうとして、豫め序を作らしめ置き、席の定まるを待ちて紙筆を出し、徧く賓客に請うたが、誰一人筆を執らうとする者が無かつた。末座に在る王勃の前に至れば敢て辭せずして筆を執り紙を請ひ、序を草せんとした。伯嶼驚き且つ怒つて内に入つて出で来ない。數吏をして王勃の文を何はしめ一語一語を報せしめた。愈々出でて愈々奇なるに驚き、「落霞與孤鶩一齊飛、秋色共長天一色」に至り、覺えず手を引き案を拍ちて曰く「此れ天才なり」と、遂に折躍して主席に復した。文成るや伯嶼之を聞して曰く、「子筆を落せば神助あるに似たり」と。徧く群英に示したるに皆面色土の如く、敢て一字を擬議する者が無かつた。伯嶼乃ち王勃を上位に召し、左右に語つて曰く、「帝子をして名聲千古に流れしめ、吾が名をして後世に聞えしめ、且つ洪都の風月江山をして價無からしめたるは、俱に子の力なり」と。五百餘を以て其の勞を謝し南行を餞した。王勃面目を施して出發した。舟洋中に出づるや風波に遇ひ、交趾に到り達せずして海中に溺死した。才子實に薄命で、此の篇は即ち其の絶筆である。詩は夙に初唐四傑の冠として千古に流傳するものが多い。此の篇の人口に膾炙するも亦尤も至極である。

作者 王勃。——字は子安、唐の絳州龍門の人、通の孫である。六歳にして文辭を善くし、九歳の時、顔師古の漢書を得て、その疵瑕を指摘した。未だ冠せざるに舉に應じて及第し、朝散郎を授けられ、數々頌を闕下に獻じた。沛王その名を聞き召して府修撰に署した。嘗て開雅堂を作つて高宗の怒に觸れ、劄南に客となつた。後父を交趾に省せんとして水に溺れて死んだ。時に年二十九であつた。勃好んで書を讀み、文を屬し、未だ嘗て精思せず、之を書するに一字を易へず。時人之を腹稿と稱した。楊炯、盧昭郡、賈賓王と皆詩文に名あり。初唐四傑と號した。集三十卷がある。

南昌故郡。洪都新府。星分翼軫。地接衡廬。襟三江而帶五湖。控蠻荆而引甌越。物華天寶。龍光射牛斗之墟。人傑地靈。徐孺下陳蕃之榻。雄州霧列。俊彩星馳。臺隍枕夷夏之交。賓主盡東南美。

訓讀 南昌の故郡、洪都の新府、星は翼軫を分ち、地は衡廬に接す。三江を襟として五湖を帶とし、蠻荆を控へて甌越を引

く。物華天寶、龍光牛斗の墟を射、人傑に地靈に、徐孺・陳蕃の榻を下す。雄州霧のごとくに列り、俊彩星のごとくに馳す。臺隍夷夏の交に枕み、賓主東南の美を盡す。

訓讀 ●南昌。漢代の南昌郡。後隋の文帝の時洪州と改む。古昔洪崖といふ仙人が茲に在つたから洪州としたのだといふ。宋代には興隆府といふ。●星分翼軫。星は二十八宿をいふ。東西南北各七宿ありて、之を支那全土に配當すれば、洪都の地は南方の七宿星の中の翼と軫との分野に相當するといふのである。●衡廬。衡山と廬山。衡山は西南に聳え、廬山は近く北境に聯る。●三江。荊州の荊江。蘇州の松江。杭州の浙江。●五湖。蘇州の太湖。饒州の鄱陽湖。岳州の青草湖。潤州の丹陽湖。鄂州の洞庭湖。●蠻荆。南蠻荆楚の地に連りて交通の要衝に當るをいふ。●甌越。甌も越の地方の内。●物華。此の地の物に皆光輝ありて華麗である。●天寶。天の瑞寶といふこと。●龍光。大阿と並び稱せらるる龍泉といふ名劍の光。●牛斗。北方七宿の中の二星。揚州吳越の分野に當る。●徐孺。徐孺字は孺子。豫章の南昌の人。恭儉義讓、才徳人に秀で、居る所皆其の徳に服す。●陳蕃。豫章郡の太守。亦之れ高潔の人であつて、郡に在つて賓客にも接しなかつたが、獨り徐孺とは親しく交り、來れば特に一榻(椅子)を下し與へて坐せしめ愉快に對談した。●雄州。雄壯廣大の州。●俊彩。俊抜にして光彩ある人物。●臺隍。高き臺と深き渚(ほり)。滕王閣をいふ。●夷夏。夷は南蠻の地方をいひ、夏は中央の漢土をいふ。●賓主。滕王閣に集合の賓客も、又其の主人公も。

【通釋】 此の地滕王閣の在る處は、古昔の南昌郡で、現今では洪都の府である。二十八宿星の分野でいへば、翼星と軫星とに當る處で、地勢は衡山と廬山とに連接してゐる。更に三江を襟とし、五湖を帶の如くに繞らし、南方遠く蠻夷荆楚の地に引き連り、甌越の方面にも接續して、交通往來の要衝に當つてゐる。従つて此の地に産する物には光華ありて天の瑞寶と稱すべきものが多い。嘗て龍泉大阿の名劍が地中に埋れ居て、其の光芒が毎夜斗星牛星の在る處を貫き射たこともある。人は

皆英傑の士多く、地は凡て秀靈の名區であつて、徐孺の如き高節才徳の人も此の地に生れ、陳蕃の如き名士と榻を並べて歡談したこともある。此の南昌郡内に在る諸州は皆雄大なる形勢を占めて、霧のたなびいた如くに列つてゐる。又俊秀光彩の人物が星辰の如くに周馳してゐる。實に此の洪州の間に在る城臺隍池などは、南夷と中夏と相接續交會する處で、今日此の滕王閣上に集れる賓主は即ち東南地方の人物の精美なるを網羅し盡したのである。

【評釋】 先づ地勢を叙して其の秀麗を謂ふ。語語典據あり、句句相對して優雅莊重を極む。「襟三江……引甌越」に至つて怒れる閻伯嶼も沈黙するに至つたといふ。

都督閻公之雅望。榮戟遙臨。宇文新州之懿範。櫛帷暫駐。十旬休暇。勝友如雲。千里逢迎。高朋滿座。騰蛟起鳳。孟學士之詞宗。紫電清霜。王將軍之武庫。家君作宰。路出名區。童子何知。躬逢勝餞。

訓讀 都督閻公の雅望、啓戟遙に臨み、宇文新州の懿範、櫛帷暫く駐る。十旬の休暇、勝友雲の如く、千里の逢迎、高朋座に滿つ。騰蛟起鳳は、孟學士の詞宗なり。紫電清霜は、王將軍の武庫なり。家君宰と作り、路名區に出づ。童子何を知らん。躬逢餞に逢ふ。

語釋 ●都督。もとは軍事を總べて督すの官。此處は刺史をいふ。●閻公。閻伯嶼のこと。洪州の刺史である。●雅望。雅正の聞望にて、正しい譽れ。●榮戟。前驅に用ふる戟。榮は衣あるの戟。王公以下皆外出の時前驅に用ふる。●宇文新州。宇文鈞といふ者、新に澄州の牧に除せられたるを以て新州といふ。●懿範。懿美の儀範にて威儀の盛大なるをいふ。●櫛帷。櫛は車馬に

坐して其の前を蔽ふ物、膝かけ。或は二字にて「車のとばり」。●十旬休暇。旬は十日、十旬は百日、百日に一度の休暇。得難い休日。●騰蛟起鳳。蛟氣の騰る時光彩目を奪ひ、鳳毛の起つ時文采空に輝くを謂ふので、才華に喻へたのである。●孟學士。晋書に、孟嘉字は萬年。桓温甚だ之を重んず。九月九日、温、龍山に燕し、僚佐畢く集る。時に佐史戎服を着く。風ありて嘉の帽を吹き落す。嘉之を覺らず。温は孫盛に命じて文を作つて嘉を嘲る。嘉即ち之に答ふ。其の文甚だ美なり」とある。同じ九月九日重陽のことだから用ひたのであらう。原注に孟浩然とあるのは無論誤謬である。●紫電清霜。紫電は戟の閃くさま、清霜は戈の鋭利なるに喻へたもの。鄭祁代醉篇三十四。三國典略曰、蕭明與王僧辨書、霜戈電戟、無非武庫兵……とある。之に據つたものである。●王將軍。晋の王濬は金吾將軍と爲つて吳を平定した人。或は前項の三國典略に在る王僧辨のことともいふ。●武庫。晋書列傳四、杜預傳云、「預在內七年。損益萬機、不可勝數。朝野稱美、號曰杜武庫。言其無所不有也」とあるに本づく。●家君。父をいふ。●作宰。王勃の父福時此の時交趾令となつて居た故に宰と曰ふ。●名區。有名なる勝區。洪州をいふ。●童子。王勃自身のこと。●勝餞。勝會餞送にて立派なる送別の會合。

【通釋】 洪州の刺史として閻伯嶼公は令聞名譽を荷うて、榮戟の前驅も勇ましく、遠い京師から來臨せられ、宇文鈞も亦新に澄州の刺史に任せられ、威儀堂堂として來り、其の車馬を暫く此の地に留めて此の會合に列せられた。得難い百日に一度の休暇であるから、勝れたよい友が雲の如くに集り來り、千里の遠方より來れる賓客を迎へ得て、高雅な朋が座中に充滿してゐる。恰かも蚊氣の昇るが如く鳳毛の起つて文采の輝くが如くで才華の美しいことは、一代の詞宗であつた孟嘉に似てゐる。戟は紫電の如く閃めき、戈は清霜の如く鋭く、威儀の盛んなるは、武庫と曰はれた古の晋の王濬にも似てゐる。實にも會合の賓主は天下知名の人人である。然るに余は、父が交趾の令たるを以

て、之を訪問せんとして圖らずも此の名勝の地を通過したのであるが、素より弱冠の身で何の知る所もないのに、斯る勝れたる逢ひ難き饒送の會に出逢つたことを喜ぶのである。

【評釋】宴會賓主の盛大を叙し、其の身の席に列するを得たるの幸榮を喜ぶので、句句故事あり出典あり、簡潔莊重前後を通じてゐる。

時維九月、序屬三秋。潦水盡而寒潭清。煙光凝而暮山紫。儼驂駢於上路。訪風景於崇阿。臨帝子之長洲。得仙人之舊館。層巒聳翠。上出重霄。飛閣流丹。下臨無地。鶴汀鳧渚。窮島嶼之縈迴。桂殿蘭宮。列岡巒之體勢。披綉闥。俯雕甍。山原曠其盈視。川澤盱其駭矚。閭閻撲地。鐘鳴鼎食之家。舸艦迷津。青雀黃龍之軸。虹銷雨霽。彩徹雲衢。落霞與孤鶩齊飛。秋水共長天一色。

訓讀 時維れ九月。序三秋に屬す。潦水盡きて寒潭清み。煙光凝つて暮山紫なり。儼驂を上路に駢にし。風景を崇阿に訪ふ。帝子の長洲に臨み。仙人の舊館を得たり。層巒翠を聳かして。上重霄に出で。飛閣丹を流して。下無地に臨めり。鶴汀鳧渚。鳥嶼の縈迴を窮め。桂殿蘭宮。岡巒の體勢を列す。綉闥を披き。雕甍に俯す。山原曠として其れ視に盈ち。川澤盱として其れ矚を駭かす。閭閻地を撲つ。鐘を鳴らして鼎食の家あり。舸艦津に迷ふ。青雀黃龍の軸あり。虹銷え雨霽れて。彩は雲衢に徹し。落霞と孤鶩と齊しく飛び。秋水天と一色なり。

●潦水。雨が降つて溜つて居る水。●寒潭。寒むさうに澄み切つた深い淵。●驂駢。駢は驢馬の外に在る馬。駢は行いて止まらざる貌。●上路。路上といふに同じい。●崇阿。高き岡。●帝子。滕王のこと。●仙人。洪崖といふ仙人が居たから洪州と名づけたといふ傳説からいふ。●層巒。巒は峯の細く尖つたもの。●重霄。九重の天。●飛閣。樓閣の高く聳えて飛ばんとするが如きをいふ。●流丹。朱塗の殿閣が水流に映ずるをいふ。●無地。開高くして下に臨んで地を見れども、無きが如きをいふ。極めて高きをいふ。●縈迴。めぐりまはる。●體勢。山岡の形勢をいふ。●綉闥。綉は繡に同じく「ぬひもやう」。●闥。小さき門又は其の扉。●雕甍。彫刻をしたる甍。●盱。音「く」。目を張つて視上げる。●閭閻。閭は二十五家の部落。閭は里中の門。小部落をいふ。●撲地。撲は盡也といふから地を盡すとは空地の無いこと。或は拂地と同じく餘地の無きをいふ。●鐘鳴。富家には食時に鐘を鳴して人を呼び集め、鼎を圍んで食ふ。●舸艦。舸は大船。艦は戰船。●迷津。津は船の集り泊る處。●軸。軸に通ずるので船尾又は船首。●雲衢。雲の往来する街衢の意にて大空をいふ。●落霞。消えかかる朝霞。一説には鳥名と曰ひ、又飛蛾と曰ふ。今之を採らず。

【通釋】時は維れ九月で、四時の序は三秋に屬してゐる。地上の潦水が盡き果てて、寒むさうに澄み切つた淵は愈々清く、たなびく煙雲は夕陽を受けて、暮山の景色は紫色に美しい。折しも來會の佳賓名客は、輕車駟馬をいかめしく飾り立てて路上引きも切らず。風景を高き岡の如き滕王閣上に賞せんとするのである。見渡せば古昔帝子の元嬰が跡を留められた長洲を眼下に瞰、其の傍には洪崖仙人の舊館ともいふべきものも見られる。遙には層累せる峯巒が翠色高く聳えて、九重の雲表に出でゐる。飛びあがるかとも思はれる樓閣は、丹朱の彩色麗はしく水流に映じて、下、底へも知られない大地に臨んでゐる。鶴の降り立てる汀や鳧のつどへる渚は、水中の島嶼を縈り廻つて盡きない。桂にて造れる殿閣、蘭にて建てた宮室が、山岡峰巒の形勢に従つて列り並んでゐる。美しい繡を以て飾つた扉を開いて、彫刻をした立派な屋根を見下し、遠くを見れば山村原野曠豁として目に

盈ち、川流水澤杳遠にして目を駭かすものがある。邑里村落は地の盡くるまで立ち並んで、鐘を鳴し鼎を圍んで食事するやうな富豪の家が多い。大船小舟は碇泊の津に迷ふほどの多数で、何れも青雀黄龍などの粧飾した舳のものである。紅紫美しき虹が消え失せて雨も霽れ上がれば、其の光彩は高く雲間にまで映じ徹る。遠く消えかかる烟霞は一羽の鷺と齊しく飛び去り、秋の水は清く澄んで長天の碧空と一色である。

【評釋】 滕王閣上の眺矚の廣大絶佳なるを叙したので、字字錦繡、語語金玉といつてよからう。「落霞、——秋水」の二句は閻伯嶼をして兜を脱がしめたばかりでなく、終りの詩中の「畫棟朝飛南浦雲」の一聯と共に千古の絶調と稱せられるもの、神助に非らずんば得る能はざるものである。

漁舟唱晚。響窮彭蠡之濱。雁陣驚寒。聲斷衡陽之浦。遙吟俯暢。逸興遄飛。爽籟發而清風生。織歌凝而白雲遏。睢園綠竹。氣凌彭澤之樽。鄴水朱花。光照臨川之筆。四美具。二難并。窮睇眇於中天。極娛遊於暇日。天高地迥。覺宇宙之無窮。興盡悲來。識盈虛之有數。望長安於日下。指吳會於雲間。地勢極而南溟深。天柱高而北辰遠。關山難越。誰悲失路之人。萍水相逢。盡是他鄉之客。懷帝閼而不見。奉宣室以何年。

訓讀

漁舟晚に唱へて、響窮の濱を窮め、雁陣寒に驚いて、聲断の浦に断ゆ。遙吟俯して暢く、逸興遄に飛ぶ。爽籟發して清風生じ、織歌凝つて白雲遏る。睢園の綠竹、氣、彭澤の樽を凌ぎ、鄴水の朱華、光、臨川の筆を照らす。四美具はり、二難併す。睇眇を中天に窮め、娛遊を暇日に極め、天高く地迥にして、宇宙の窮りなきを覺え、興盡き悲み來つて、盈虚の數あることを識る。長安を日下に望み、吳會を雲間に指す。地勢極りて南溟深く、天柱高くして北辰遠し。關山越え難し。誰か失路の人を悲まん。萍水相逢ふ。盡く是れ他郷の客なり。帝閼を懷へども見えず、宣室に奉ぜんこと何れの年を以てかせん。

語釋

●彭蠡。鄱陽湖のこと。揚州に屬して洪州に近い。●衡陽。衡山の在る地を衡陽縣といふ。之も洪州に近い。●爽籟。籟は三孔を有する一種の笛。命の大なるを筮と曰ひ、中なるを籥と曰ひ、小なるを箛と曰ふ。其の他孔竅機括あるを籥と曰ふ。爽籟とは晚秋の爽風萬物を鳴らすをいふ。●織歌。聲細く歌ふ。女樂をいふ。●睢園。漢の文帝の子梁の孝王の築く所、方三百里皆竹を植ゑて修竹園ともいふ。●彭澤。陶淵明嘗て彭澤の令と爲り、酒を好んで常に樽を置く。●鄴水。鄴は曹操の都を定めたる所。●朱華。曹操の次子曹植(陳思王)の詩に「朱華冒綠池」とあるを取る。朱華とは荷花といひ芙蓉ともいふ。●臨川。王羲之嘗て臨川の内史の官と成つて居た。●四美。四つの美事。良辰と美景と賞心と樂事とをいふ。●二難。賢主と嘉賓と。●睇眇。睇は目少視也。眇は斜視也とある。茲にては只觀覽するの義。●宇宙。四方上下を宇と曰ひ、往古來今を宙といふ。空間と時間との凡てをいふ。●盈虚。月の盈ちたり虧けたりするが如く榮枯盛衰等人事の變をいふ。●望長安。晉の明帝幼にして聰哲父元帝に寵異せらる。年數歳の時長安の使者來るに遭ひ、父帝問ひて曰く長安と日と孰れが近きかと。明帝對へて曰く「長安近し。人の日邊より來るを聞かず」と。明日群臣宴會の時又之を問ふ。對へて曰く「日は近し」と。元帝驚いて其の理由を問ふ。對へて曰く「目を舉ぐれば則ち日を見る。長安を見ず」と。元帝益之を奇とす。此の故事を用ひたのである。●吳會。吳の地方。もと吳郡と會稽郡との地方。●南溟。溟は海。●天柱。天軸のこと。●關山。關隘く山險なるをいふ。轉じて故郷の意にも用ふることあり。●萍水。萍(浮草)が水に流れ風に吹かれて或は合ひ或は離るるをいふ。●帝閼。天子の宮門。●宣室。漢の賈誼讀せられて長沙王の太傅と爲る。後召されて宣室に見ゆ」との故事にて、宣室は未央宮前の正室をいふ。

【通釋】かくて漁舟が夕方になつて歌を唱ふれば、其の響は遠く鄱陽湖のあたりまでも聞え、陣形をして群り飛ぶ雁も寒さに驚いて、其の聲は衡陽縣の南浦に至りて断える。遙望の吟咏、首を俯して舒暢し、飄逸の清興過に飛ぶが如くに移る。晩秋の爽籟發して清風の生ずるを覺え、坐中の女樂歌唱が聲を凝せば空行く白雲も留るであらう。古の梁の孝王の睢園の綠竹にも比すべき此の滕王閣上の盛宴は、彭澤の令であつた陶淵明が九月九日に太守王弘から送られた酒樽の故事にもまさり、又鄴都の「朱華冒綠池」と詠じた陳思王にも比すべき此の帝子滕王の遺跡を世に輝かさんとして臨川の内史であつた王羲之の如き能筆能文の士を多く集められてゐる。是れ實に天下逢ひ難きの盛事であつて、良辰・美景・賞心・樂事の四美が具り、賢主と嘉賓との二難も併せ得たものと稱すべきである。されば一座の賓客も高く中天を眺めやつて觀覽を窮め、娛み多き清遊を此の重陽の暇日に於て極め盡してゐる。天は澄んで愈々高く、地は爽かにして愈々遠く、宇宙の浩大無邊にして窮り無きを覺える。斯る佳會美景に逢ひて清興の盡くる無きを思ふと同時に、我が心中自ら悲傷の感の涌き來るものがある。即ち萬物皆盈虛盛衰の定まれる運命あるを識ることが出来る。吾れ今遠く交趾の父の許へ行かんとするを以て、あの懐しの長安の帝都をば遙に目の下に想望し、物盛んに人衆き吳會の地方を遠く雲の間に指點して、郷關去り難き念に驅られてゐる。地勢は此處に極まつて南溟深く湛へ、天軸遙に高くして北辰益々遠きを見る。かくまで遠い他郷の空に流浪し來つて故郷の關山

を復び越え歸ることは困難である。誰か此の仕官榮達の路を失つた薄倖なる予の如き者を悲しみ憐むものがあらうか。浮き草の風に吹かれて相逢ふが如くに邂逅した人人は、盡く是れ見ず識らずの他郷の客ばかりである。都の空遠く天子の宮室を懐うて望めども、山河幾千里を隔てて見ることも出來ず、昔漢の賈誼が謫處から召されて宣室に拜謁を得た如きことは、果していつの年であらうか。到底其の望みも絶えたやうである。

【評釋】前段に續いて、尙閣上の景情を述べ、「四美具、二難并」に至つて稱揚を盡してゐる。それより一轉して感慨に入り、「興盡悲來、識盈虛之有數」より、そろそろと自己の身上に及ぼし來らんとするので、抑揚頓旋の關鍵である。

嗚呼時運不齊。命途多舛。馮唐易老。李廣難封。屈賈誼於長沙。非無聖主。竄梁鴻於海曲。豈乏明時。所賴君子安貧。達人知命。老當益壯。寧知白首之心。窮且益堅。不墜青雲之志。酌貪泉而覺爽。處涸轍以猶懼。北海雖賒。扶搖可接。東隅已逝。桑榆非晚。孟嘗高潔。空懷報國之心。阮藉猖狂。豈效窮途之哭。

訓讀 嗚呼、時運齊しからず。命途舛ふこと多し。馮唐は老い易く、李廣は封せられ難し。賈誼を長沙に竄す。聖主無きに非ず。梁鴻を海曲に竄す。豈に明時に乏しからんや。頼む所は君子貧に安んじ、達人は命を知れり。老いては當に益々壯なるべし。寧ろ白首の心を知らんや。窮しては且に益々堅からんとす。青雲の志を墜さず。貪泉を酌んで爽を覺え、涸轍に處して以て

猶ほ懼ぶ。北海餘かなりと雖も、扶搖接すべし。東隅已に逝けども、桑榆晚きに非ず。孟嘗の高潔なる、空しく報國の心を懐けり。阮籍が猖狂たる、豈に窮途の哭に效はんや。

●命途。命途窮達の道途。●馮唐。漢書列傳二十に在り。趙の人、白首まで郎官にて居た。●李廣。漢書列傳二十四に在り。隴西成紀の人。數々匈奴を撃つて戦功あつたが不遇にして諸侯に封せらるるを得なかつた。●梁鴻。字は伯鸞。後漢の肅宗の時の人。嘗て洛陽を過ぎて五噫の歌を作る。肅宗聞いて誹謗となし鴻を求む。鴻姓名を易へて妻子と逃れ齊魯の間に居る。後吳に行き「遇季札兮延陵。求善達兮海隅。」云々の詩を作り、落魄して吳に死す。舊註の梁鴻は誤である。●達人。道理に通達する者。●老當益壯。後漢書列傳十四馬援傳に「投少而有三大志。嘗謂賓客曰、丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯。」とあるを用いたのである。●貪泉。晋の吳隱之が廣州の刺史と爲つた。州に「貪泉」といふ泉があつた。之を飲んで「詩を賦して曰ふ。

「古人云ふ此の水、一たび飲れば千金を懐ふと。試に夷齊をして飲ましむとも、終に當に心を易へざるべし」と。自ら清操を持つること甚だ堅固であつた。●涸轍。水涸れんとする車轍の跡にあざとふ鮒の如く、餘命幾もなきをいふ。莊子に「轍中有鮒魚。激西江之水、不_レ足以活之。」とあるに本づく。●扶搖。颶である。下から吹き上ぐる暴風。莊子逍遙遊篇に「北溟有_レ魚。其名爲_レ鯀。化而爲_レ鵬。搏_レ扶搖而上者九萬里」とあるに因る。●東隅。日出の處。少年の時に喩ふ。●桑榆。日の入る處。老年の時に比す。後漢の馮異嘗て赤眉の賊を破る。光武帝置書もて之を勞して曰く、「始雖_レ垂_レ翅回溪、終能奮_レ翼灑池。可_レ謂_レ失_レ之東隅、收_レ之桑榆」と。●孟嘗。後漢書列傳に、孟嘗字は伯周。會稽の人。少くして操行を修む。嘗て合浦郡の太守となり、前弊を革め、去珠復た還り、百姓利を蒙り、商賈流通し、稱して神明といはる」とある。●阮籍。晋の阮籍字は嗣宗、任情不羈。或は戸を閉ちて書を讀み、月を果ねて出でず。或は登山臨水、竟日歸るを忘る。酒を嗜みて放曠たり。人之を痛といふ。所謂竹林の七賢の一。●猖狂。禮法に拘はらず我がままに振舞ふこと。●窮途。阮籍が時に率然として獨り車に駕して山に入り、徑路車跡窮する所輒ち痛哭して返つた故事。

【通釋】 嗚呼、時世の運り_レせといふものも常に齊しいものではなく、人間の運命窮達の道途も亦

我が意志にたがふことが多いものである。漢の馮唐は賢明のものではあつたが、白首まで用ひられなかつた。李廣將軍は戦功頗る多かつたけれども不遇にして封侯の榮を得ることが出来なかつた。賈誼の如き大天才も長沙へ竄せられた。文帝の如き聖明の主があつても不運ならば致し方もない。梁鴻の如きも英才を有しながら遂に時に容れられないで吳の地に窮死した。明帝の如き清明の時代に於てでも命運薄ければ亦已むを得ぬことである。故に頼む所は君子の貧に安んじて憂へざる心と、達人の命を知つて憤らざる心とである。然し志を立てては老いて尙益壯なるべく、寧ろ白首の年に及んでの心如何を顧みるを要しない。困窮しては益操守を堅固にするの覺悟を要し、官途に就いて青雲の志を持し、國を治め民を濟ふの氣概がなくてはならない。かの貪泉を酌んで飲むとも慾心を生ずることなく、却つて爽快を覺ゆるの廉潔を保ち、車轍の跡の涸れんとする中に居ても憂へ戚むことなく、却つて懼び安んずるの覺悟を有するのである。たとひ北海は遙に遠くとも、或は扶搖萬里の風に乗じて直に到るべき機會もあらう。東隅に失ひて桑榆に收むと言つた如くに、此の少壯時代に罪を得て貶せられたるも、再び晩年に及んで或は其の志を達することもあらうかと思はれる。後漢の孟嘗の如きは高潔な志操を有したれども、一生顯達せずして空しく報國の心を懷きながら老い果てた。我が父は之に似てゐる。又晋の阮籍が猖狂なる振舞をして、時には山林に入つて窮途の哭をやつて還つたといふが、吾は世を捨て去るの心もないから此れに效ふことも欲しないので

ある。

【評釋】 此の段は全く人間の逆境不遇に説き到りて、憂憤鬱屈を伸ばさんとして得ざるを慨げくので、要は自己を敍したのである。一代の奇才にして此の悶悶あるは、亦憐むべきである。

勃三尺微命。一介書生。無路請纓等終軍之弱冠。有懷投筆慕宗愨之長風。舍簪笏於百齡。奉晨昏於萬里。非謝家之寶樹。接孟氏之芳鄰。他日趨庭。叨陪鯉對。今晨捧袂。喜託龍門。楊意不逢。撫凌雲而自惜。鍾期既遇。奏流水以何慙。

訓讀

勃は三尺の微命、一介の書生なり。纓を請ふに路無く、終軍の弱冠に等し。筆を投ぜんことを懷ふあり。宗愨の長風を慕ふ。簪笏を百齡に舍て、晨昏を萬里に奉ず。謝家の寶樹に非ず。孟氏の芳隣に接はらん。他日庭に趨つて、叨りに鯉對に陪せん。今晨袂を捧げて龍門に託するを喜ぶ。楊意に逢はず、凌雲を撫して自ら惜み、鍾期既に遇へり。流水を奏して以て何ぞ慙ぢん。

語釋

●微命。微弱なる身命。或は輕微なる運命。●一介。一夫を介といふ。一箇といふが如し。●請纓。漢の武帝の時、南越が漢と和親した。其の時終軍年二十餘であつたが、自ら長纓を受けて、南越の王を縛つて之を闕下に致さうと願ひ出た故事。●投筆。後漢の班超が家貧にして傭書して母を養つてゐる。或る時筆を投じて歎じて曰ふ。大丈夫他の志略なくとも窮當に傳介子、張奐に效つて功を異域に立て以て封侯を取るべしといつたこと。●宗愨。六朝の宋の人、少き時其の叔父に志す所を問はれた。愨答へて曰ふ。願はくは長風に乗じて萬里の波を破らんと。後振武將軍と爲つて林邑國を伐ち洸陽侯に封ぜられた。●簪

笏。簪は冠を被る時に用ふる「かんざし」。笏は東帶の時手に持つもの。合せて官職に就くことの意。●晨昏。曲禮に、「凡爲二人之子之禮、冬温夏凊、昏定晨省」とあるを取つて親に孝養を盡すこと。●謝家之寶樹。晋の謝玄は其の叔父謝安に頗る器重せられてゐた。或る時謝安が其の子姪を戒めたのに對して、玄は、「譬へば芝蘭玉樹の如く、それをして庭階に生ぜしめんとするのみ」と答へた。●孟氏之芳隣。孟母三遷して我が子の爲めに隣を擇んだこと。●趨庭鯉對。論語季氏篇に「陳元問於伯魚曰、亦有一異聞乎。對曰未也。嘗獨立、鯉趨而過庭。曰、學詩乎。對曰未也。不學詩、無以言。」とあるに本づく。●龍門。後漢の李膺が聲聞名譽を以て自ら高ぶり、漫りに人と交らず。若し士大夫にして其の容接を被る者あらば魚の龍門に登り得たかの如くに羨望した。●楊意。楊得意曾つて司馬相如を漢の武帝に推薦した。相如遂に顯はるに至つたこと。●凌雲。相如の作つた「大人賦」をいふ。武帝之を稱して「凌雲の氣あり」といつたから凌雲の賦といふ。●鍾期。列子湯問篇に「伯牙善鼓琴。鍾子期善聽。伯牙鼓琴、志在流水。子期曰、善哉洋洋兮若江河。伯牙所念、子期必得」とある。之れ知音の故事。

【通釋】 吾は弱少にして輕微なる命運を有するもので、一介の書生である。漢の終軍の弱冠にして纓を請うて南越王を縛せんとした年齢に等しいが、左遷の身であるが故に纓を請ふの路も絶えて無い。又班超の筆を投じて功を異域を立てて封侯を取らんとした雄圖を懷ふこともあり、又宋の宗愨が「願はくは長風に乗じて萬里の波を破らん」と言つた壯志を慕ふこともあつた。然し今となつては衣冠束帶して官途に就かうといふ希望も水泡に歸したから、百年の末までも之を斷念して、萬里の遠き交趾に在る父親の下に赴いて、晨昏昏定の孝養を盡さうとするのである。元來吾は「芝蘭玉樹の如く云云」と答へて一座を驚かした謝玄の如き秀才ではないが、彼の地に赴けば孟母の隣を擇んだといふ如き近隣に賢者もあらうから、それらの人人と交遊したいものである。やがては父の膝

下に趨り見えて、伯魚の孔子に對へられたやうに親しく教へを承けたいと思ふ。今朝幸に袂を捧げ威儀を整へて、恰かもかの龍門に登り得た魚の如くに、閻公の斯の盛宴に列するを得たることを限り無く喜ぶのである。しかし司馬相如を漢の武帝に推薦した楊得意の如き人に逢會しないから、徒らに司馬相如の「大人賦」を誦して獨り不遇を歎き惜んで居たのである。然るに今日此の席に列し得たのは、恰かも伯牙が鍾子期に逢つた如くであるから、流水の曲を奏しても何ぞ慙ぶことがあらうぞ。

【評釋】「物三尺微命」と自ら名のつて、壯志遂げ難く、事志と違ふを述べ、「喜託龍門」、「鍾期既遇」を以て、第二段の「躬逢勝餞」の喜びを結び、此の文を草するを以て伯牙の流水を奏するに比したのである。悲痛感慨の中に欣幸の意を寓し、光榮欣懽の中に無限の咏歎を洩したもので、前段と相接して、英才の憤懣を憐むに足る。

嗚呼勝地不常。盛筵難再。蘭亭已矣。梓澤丘墟。臨別贈言。幸承恩於偉餞。登高作賦。是所望於羣公。敢竭鄙誠。恭疏短引。一言均賦。四韻俱成。

訓讀 嗚呼、勝地常ならず。盛筵再びし難し。蘭亭は已みぬ。梓澤は丘墟となれり。別に臨んで言を贈る。幸に恩を偉餞に承く。高きに登りて賦を作る。是れ群公に望む所なり。敢て鄙誠を竭して、恭しく短引を疏す。一言均しく賦して、四韻俱に成る。

蘭亭。次の蘭亭記を見よ。●梓澤。晋の石崇の金谷園のこと。前の春夜宴桃李園序に詳し。●登高。陰曆九月九日に高山に登つて災厄をはらふ故事。重陽のことに轉用する。●疏。簡條書にして陳べること。●短引。引は一種の文體。文體明辨に「唐以後始有」此體。大略如「序而稍爲「短簡」とある。古詩にも歌行・吟・引・曲の目がある。ここは此の序文をいふ。●四韻。八句の詩をいふ。

【通釋】嗚呼、斯る景勝の地も必ずしも恒久に存するものではない。況んや、今日の如き盛饌は再び逢ひ難いものである。王羲之の蘭亭曲水の清遊も既に遠くの昔の事となり、石崇の金谷園も夙に廢滅に歸して丘墟と化して了つた。今や盛會も終り辭し去らんとするに際し、此の序を作りて閻公に贈呈するは、幸に盛饌の恩恵を辱くしたからである。登高の佳節に於て今日の情景を詩賦に作るは、列席の群賢諸公に希望する所であるが、吾も亦敢へて鄙拙をも辭せず誠意を竭して、恭しく此の序文を草し、一言序と均しく賦し、四韻八句の詩が俱に出來たのである。

【評釋】閻伯嶼の偉饌に感じて、序を草し詩を賦したるを叙し、以て凡てを收束したのである。

滕王高閣臨江渚。佩玉鳴鑾罷歌舞。
畫棟朝飛南浦雲。朱簾暮捲西山雨。
閑雲潭影日悠悠。物換星移度幾秋。
閣中帝子今何在。檻外長江空自流。

訓讀 滕王の高閣江渚に臨めり。佩玉鳴鑾歌舞を罷む。畫棟朝に飛ぶ南浦の雲。朱簾暮に捲く西山の雨。閑雲潭影日に懸懸たり。物換り星移りて幾秋をか度る。閣中の帝子今何にか在る。檻外の長江空しく自ら流る。

語釋 ●佩玉。官人の身に佩ぶるの玉。装身具である。●鳴鑾。貴人の乗馬の「くつわ」につける鈴。或は貴人の車につける鈴をもいふ。●南浦。南昌府廣潤門外に南浦亭あり。往來舟を繋する所といふ。●西山。南昌府城の西大江の外三十里に在り。厭原山といひ又南昌山ともいふ。●閑雲。靜に出沒する雲。●潭影。深き潭の色。●帝子。元嬰のこと。●檻外。欄干の外。

【通釋】むかし滕王元嬰が建てられた高閣が、漳江の岸に聳えて、今も依然として存在してゐるが、滕王已に逝きて後、當時身に佩玉をつけ、鳴鑾の馬車に乗つて往來せし姿も見えずなり、又妓女などの歌舞せし賑かさも絶えて了つた。唯、朝には美しい畫棟の上に、南浦の雲の飛ぶを見、夕には朱簾の内へ西山の雨を捲き込むばかりで、昔の殷盛は見る由もなく蕭條寂寥の情に堪へない。無心の雲の姿や湛へる潭の色などは、日に悠悠として昔に變ることも無いが、人間の物事は換り行き、歲月は移り去つて、滕王の歿後幾度の春秋を経過したことであらうぞ。さても此の高閣は重修せられて舊觀に劣らないが、閣中に在つた帝子元嬰は今果して何處に在るか。復び見るべからざるを如何せん。唯、欄干の外にある漳江の水は千載歌む時もなく空しく流れてゐる。

【評釋】閣は滕王創建の時より閻公重修の時まで約三十年。物換り星移つて、しかも檻外の長江空しく流るる所、是れ一篇の骨子である。畫棟、朱簾の二句は措辭の妙を極め、南浦の雲といひ、西山の雨といふは高閣の高閣たるを示すもの、朝暮の二字又星移るの意を寓するものである。前半は滕王の當時をいひ、後半は重修の際を述べ、「空自流」の三字凡てを收束して感慨太だ無量である。

何晦夫謂へらく、此の序四長あり。一は形勢を張大するに長じ、二は景物を體狀するに長じ、三は言辭を頓挫するに長じ、四は詩を賦するに長ず。然れども未だ三短あるを免れず。全く四六駢儷を用ふるは一の短なり。中間に語意の重複するは二の短なり。鋪叙倫無く自ら叙すること多きは三の短なり。其れ文の初變たる所以なり。晚學妄りに議す。識者之を鑑せよと。

● 記 類 (十二篇)

記とは記事の文で、日記又は史記など事實をその儘に記述するのである。文體明辨に「按ずるに、金石例に云ふ、「記は事を紀するの文なり」と。禹貢・顧命は、乃ち記の祖にして、記の名は則ち戴記學記の諸篇に昉る。その後揚雄蜀記を作る。而して文選に其の類を列せず、劉勰も其の説を著さざれば、則ち知る漢魏以前、作者尙少く、其の盛んなるは唐より始まるを。其の文、事を叙するを以て主と爲す。後人其の體を知らず、かへつて議論を以て之を雜ふ。故に陳師道云ふ「韓退之の記を作るや、其の事を記するのみ。今の記は乃ち論なり」と。蓋し亦此に感ずる有るなり。然れども燕喜亭の記を觀るに已に議論に涉り、歐蘇以下議論淺く多し」とある。故に事を記するのが正體であり、議論を雜ゆ

るのが變體である。後にはその變體が多く流行したのである。

三、蘭亭記

王羲之

作者王羲之が晋の穆帝の永和九年の春三月三日に、孫綽・王彬之等當時の名流四十有一人を會稽山陰に在る蘭亭に會合して、曲水流觴の宴遊を催した。其の時各々詩を作つたのを輯めて一卷とし、其の序として此の文を作つたのである。故に記ではなくて實は序文の中に入るべきであるのを誤つたのである。羲之は天下の能書であつたから自ら之を書するに、鼠鬣紙と鼠鬣筆を用ひ、遒媚勁健、絶代更に無しと稱せられてゐる。

蘭亭は大明一統志に「紹興府山陰縣の西南に在り」とある。往昔越王勾踐が蘭を植えた處で、蘭渚山といつた邊に在るから蘭亭といふのであらう。

作者 王羲之。——字は逸少、覽の孫、曠の子で、王承・王悦と共に王氏の三少年と稱せられた。年十三にして時の宰相周顛に謁した。長ずるに及び、晋に仕へて右將軍會稽内史となる。池に臨んで書を學ぶに、池水盡く黒く、草隸古今に冠たりと稱せられるに至つた。その最も後世に重きを爲すは蘭亭記と樂毅論と黃庭經とである。性鷲鳥を愛好した。羲之すでに官を去り、東土の人士と山水釣の娛を營み、又道士の許遇に遇つて共に服食し、名藥を探らうとして千里を遠しとせず、東中諸郡の名山に遊び、滄海に浮んで歎じて曰く、我れ卒に當に以て樂死すべしと。年五十九を以て死す。子七人あり、名を世に知られたのは五人あつた。

永和九年。歲在癸丑。暮春之初。會于會稽山陰之蘭亭。修禊事也。羣賢畢至。少長咸集。此地有崇山峻嶺。茂林脩竹。又有清流激湍。映帶左右。引以爲流觴曲水。列坐其次。雖無絲竹管絃之盛。一觴一詠。亦足以暢敘幽情。是日也。

天朗氣清。惠風和暢。仰觀宇宙之大。俯察品類之盛。所以遊目騁懷。足以極視聽之娛。信可樂也。

訓讀 永和九年、歲は癸丑に在り。暮春の初、會稽山陰の蘭亭に會す。禊事を修するなり。群賢畢く至り、少長咸集。此地崇山峻嶺。茂林脩竹あり。又清流激湍あり。左右に映帶し、引いて以て流觴の曲水と爲す。其次に列坐し、絲竹管絃の盛なしと雖も、一觴一詠、亦以て幽情を暢敘するに足れり。是の日や、天朗かに氣清み、惠風和暢せり。仰いで宇宙の大なるを觀、俯して品類の盛なるを察す。目を遊ばしめ懷を騁する所以、以て視聽の娛みを極むるに樂れり。信に樂むべきなり。

語釋 ●永和。東晋の第五主穆帝の年號。●歲在。歲は歲星。●暮春。陰曆の三月。●會稽。郡名にして又山の名である。●禊事。三月上旬の日に、流水の邊にて、身を清め垢を洗ひ落して禊の事を修め行ふこと。禊は毒の義で、惡病を祓除する祭の名とす。もとは三月上旬の巳の日に行つて來たのが、魏の文帝の時から三月三日と定つて了つたのである。●激湍。流の早い瀬。●流觴曲水。川の曲り角に坐して、上流から「さかづき」を水に浮べ流して來る間に詩を作り、觴を受けて酒を飲み、又次へ流しやる。若し流れ來る間に詩が出來ざれば、罰杯として酒を多く飲ませる。●其次。其の位置を定めて次ぎ次ぎに。●惠風。春の風。●和暢。溫和にして氣も暢べる。●品類。鳥獸草木等の萬物。●騁懷。思ひを遠くへ馳せる。

【通釋】永和九年、——歲星は癸丑に在る——の春三月の初め、會稽山の北方に在る蘭亭に會合し、宴を催した。それは禊禊の事を行つたのである。時に天下の群賢が畢く聚り至り、少壯の者も長老の者も皆集り來つて、頗る盛會であつた。此の地には、高い山もあり峻しい峰もあり、茂つた林もあれば長い竹もある。又清き流や早い瀬があつて、左右に映り合ひ、山水の景が甚だよろしい。その流を引き入れて曲水流觴の遊びを行ふことにして、それぞれの位置に皆が列坐した。琴瑟笙笛

などの音楽はないけれども、一杯飲んでは一詩を作り、一詩を作つては一杯飲むといふことは、亦以て幽静な情思を叙べ樂むに足るのである。幸に是の日は、天が朗かに晴れ渡つて氣も清く澄み、長閑な春風が温かに吹いて、心からのんびりとする日であつた。仰いで天地古今の廣大無邊なるを觀察し、俯しては草木鳥獸等萬物の嬉嬉洋洋たるを望み見るのは、目を廣くへ遊ばしめ、思を遠くへ馳せる所以で、耳目視聽の娛樂を肆にするに十分である。信に愉快な楽しい會合である。

【評釋】 蘭亭會合の時と人と景物との概要を、四六駢儷の麗辭佳句を以て書き陳ねたので、古來人口に膾炙してゐる。「絲竹管絃」が重複語であるとか、「天朗氣清」が秋景の語だとか言つて、彼れ此れ評する者もあるが、何れも古書に類例のあることで問題とするに足らない。

夫人之相與俯仰一世。或取諸懷抱。悟言一室之內。或因寄所託。放浪形骸之外。雖趣舍萬殊。靜躁不同。當其欣於所遇。暫得於已。快然自足。曾不知老之將至。及其所之既倦。情隨事遷。感慨係之矣。向之所欣。俛仰之間。以爲陳迹。尤不能不以之興懷。況修短隨化。終期於盡。古人云。死生亦大矣。豈不痛哉。每覽昔人興感之由。若合一契。未嘗不臨文嗟悼。不能喻之於懷。固知一死生爲虛誕。齊彭殤爲妄作。後之視今。亦猶今之視昔。悲夫。故列敘時人。錄

其所述。雖世殊事異。所以興懷。其致一也。後之覽者。亦將有感於斯文。

【訓讀】 夫人の相與に一世を俯仰する。或は諸を懷抱に取りて、一室の内に悟言し、或は寄りて託する所に因り、形骸の外に放浪す。趣舍萬殊にして、靜躁同じからずと雖も、其の遇ふ所を欣びて、暫く己に當りては、快然として自ら足り、曾て老の將に至らんとするを知らず。其の之く所既に倦むに及んでは、情、事に隨ひて遷り、感慨之に係れり。向の欣ぶ所は、俛仰の間に、以て陳迹となれり。尤も之を以て懷を興さざる能はず。況んや修短化に隨ひ、終に盡くるに期するをや。古人云ふ、死生も亦大なりと。豈に痛まざらんや。毎に昔人の感を興すの由を覽るに、一契を合すが若し。未嘗て文に臨んで嗟悼せずんばあらず。之を懷に喻す能はず。固に知る。死生を一にするは虚誕たり。彭殤を齊しくするは妄作たり。後之今を見るも、亦猶は今の昔を視るがごとくならん。悲いかな。故に時人を列敘して、其の述ぶる所を録す。世殊に事異なりと雖も、懷を興す所以は其の致一なり。後之覽る者、亦將に斯の文に感ずるあらんとす。

●懷抱。胸中に思ひ感ずること。●悟言。他本に晤言とあるのが正しく、相對して語る。而晤、拜晤などの晤。●寄所託。自己の嗜好する所に感興を寄せる。●放浪。放縱流浪。わが儘する。●趣舍。趣舍に同じく、好む所に進み趨り、好まざる所を退け捨つる。●萬殊。種々に異なる。●靜躁。沈靜と輕躁。●老之將至。論語述而篇に「其爲人也發憤忘食、以忘憂、不レ知レ老之將至云爾」とあるに本づく。●其所之。吾が志の向ひ行く所。●俛仰之間。暫くの間。俯して仰ぐまでの間、即ち僅少の時間。●陳迹。古い迹。●修短。生命の長短。壽夭をいふ。●隨化。化は造化、自然をいふ。●期於盡。盡は死をいふ。必ず死するに至ること。●古人云。莊子德充符篇に「死生亦大矣。而不レ得レ與レ之應レ」とあるを用ふ。●一契。符契のこと。●一生。淮南子精神訓に「以二死生爲一化。以二萬物爲二一方」とあるに由る。●虚誕。虚偽詐誕で、共に「いつはり」。●彭殤。彭は彭祖にて八百歳まで長生したといふ者。殤は痲子にて幼少にて死する者。莊子齊物篇に「天下莫レ大レ於秋毫之末。而泰山爲レ小。莫レ善於痲子。而彭祖爲レ夭」とあるに由る。●妄作。無駄事。

【通釋】 凡て人が世の中に生存して、相與に萬物を俯して見たり、天地を仰いで觀たりする際に、